

想　い　出　の　記

生徒そして先生として

創立80周年記念歴代校長座談会

第9代校長 塩田 一郎

第11代校長 大島 正賢

第12代校長 毛利 敬一

第13代校長 中村 富和

第14代校長 宮田 隆弘

司会 宗竹啓介

進行 竹内福志

司会 本日は皆様にはお忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。80周年記念誌の編纂は予定どおり進んでおりますが、発行委員会としましてはかねてから座談会を催しそれを掲載して記念誌の内容の重みを増し、少しでも興味をもって読んでいただくことを考え、歴代の校長を勤められました5人の先生方にお集まり願ったわけでございます。本日は不慣れではありますが私が司会をさせていただきます。本日は不慣れではありますが私が司会をさせていただきます。

早速座談会に入らせていただきます。当校はもともと北与力町(現在の永国寺町)が発祥の地でありますので、当時生徒として過ごされました塩田先生に昭和8年より13年までの間の思い出をお聞きしたいと思います。特に初代吉崎校長先生から松本校長先生に変わられた時分だと思いますがその辺のことで何か。

“えらかった松本校長”



塩田 初代校長から現在の校長までに全部の校長さんに接してものを云った経験のあるのは僕だけじゃと思う。初代校長が僕が1年の時に退職され松本校長に変わられた。それで歴代校長の思い出話をまとめようと考えているところなんです…。

吉崎校長には1年のときだけであったが修身を習った。校長の印象に残っているのは、高知駅の駅長がかぶるような帽子をかぶってきて朝礼台に立って敬礼をしていたあれが有名やった(笑い)、チャント工業の帽章をつけて、金モールは無いけど。

松本校長については、或時えらい方だなと思ったことは当時椿少佐という軍人精神の固まりのような配属将校がおりました。椿少佐を先生というたらおこりまして「先生」と名のつくのは吉田松陰先生以外おらんというような調子で…。昔は校内で行事があるときは先ず校庭に生徒は整列し訓辞を受けた後、解散という各級長が夫々教室へ連れていきよった。その並んだときに椿少佐が何か理由は忘れたが大変おこった。すると宮地豊喜先生が

「もう解散」と云った。
そしたら椿少佐が段上に上って
「解散はいかん」

宮地先生がまた

「お前らが悪いことはない解散」

それを5、6回2人が繰り返した。私は解散して教室へ行ってよいものかどうか、困りながら椿少佐と宮地先生が交互に段上に上るのを見ておった次第です(笑い)。

当時の配属将校が学校の中でどんな立場、地位にあったか、今の生徒にはわからん。まあ俄然生徒の中にゴリさん(宮地先生のシヨ名)の株が上がったんですがたいしたもんです。

ところが後で生徒の中へ一つの噂が流れてきました。松本校長が椿少佐に校長室で注意したげな怒ったげなと…。「生徒の前で先生が何とということをするか」と。僕はゴリさんが椿少佐と喧嘩したのもエライが、2人が居るところで注意した松本校長も大したもんじゃと感心したものです。(椿少佐はその後日支事変で上海で迫撃砲の直撃を受けて戦死された)。

松本校長はその後大分県の津久見工業の初代校長として転勤されましたが、休暇で高知工業へ来校され、そのときに機械工場に池田先生が居られてその人の話ですけれども、松本校長が機械実習室の敷居をまたがなかった、入口まで来て機械工場をのぞいて、池田先生が「校長さんどうぞどうぞ」というたち絶対に敷居をまたがなかったと…。

晩年は郷里の芸西村に帰られて居りましたが、丁度体格が西郷さんみたいにガッチリしておりなかなか気骨のある人でありました。

大島 「牛さん」といっていましたね。(笑)

“入試前に小学校で前調べ”



司会 大島先生は大東亜戦争に突入する前の頃に在学しておられましたね。

大島 昔の高知工業は田舎の学校から受験して願書を出したら、入試までに科長級の先生が前調べに小学校へ来た。私のところへは小林秀雄科長が来た。その時分土佐

中学がやっていた。

毛利 私が城東中学を受けるときに本山小へ図画の先生が来た。私等のときに筆記試験が廃止され下見をして口頭試問となった。

大島 学科試験の後で口頭試問は講堂で5人から10人位を受験番号順に並べて、形式的に校長と各科の科長級が並んで態度を見る。それから1人1人教室で口頭試問、それがたまたまビビって行ったら小林先生で「大島は僕がチェックしたから大丈夫もうよろしい」、と云われてほんとうに嬉しかった(笑い)。

私が入学したのは昭和11年で松本校長先生が一番長かった。当時は全国に工業学校がどんどんできた。森岡先生が鳥栖、中内先生が須崎工、長崎先生が和歌山、小林先生が広島と優秀な先生が校長として出て行かれた。

“面白おかしく修学旅行の報告会”

大畠 1年生の最初の遠足が1泊で田舎の子にとってはとてもじゃないが、宇佐まで行って北の山越えて旅館で1泊した。朝起きたら港の前は生きた鰹がピチピチと入ってくる。次の日は巡航船に乗って横浪三里をずうっと奥へ行き、また山越えて須崎の野見へ、山越えて巡航船で須崎港へ、そして須崎駅から車で帰った。そういうことが未だに忘れられない。

5年生になっての修学旅行が凄かった。4月1日に出発して4月12日に高知棧橋着だから、田舎もんで県外に行ったこともないような子供にとって破天荒なこと。高知駅を出て神戸、畝傍、奈良、鳥羽、宇治山田、名古屋、藤沢、鎌倉、東京、日光、上諏訪、京都それから船で高知への12日間の旅。全部夫々行き先で写真をとっている(写真屋が従って行っている)、榎原神宮へ参っている、畝傍の御陵へ行く等昔として大したことで、高知工業といったら金持の子は居ないし、昭和15年いうたらもう支那事変の真最中で百姓の子が金をどうやってかまえたろう、毎月積立てをしていたか。

修学旅行から帰ると講堂へ集まって下級生に修学旅行報告会をやった、面白おかしくホラ吹いてみたり、先生の普段わからないクセや、ちょぎらかした事等、マイクも無いのに下級生は楽しく聞きよった(笑い)。

塩田 僕るときは車で行って朝早く神戸駅に着いて、三菱かどこかの食堂の工員のどんぶり飯を食ったが、一膳飯で汁も具を採さんと無いような味噌汁で粗末なものだった。

大畠 私等ときは工場見学は無かった。

竹内 第1班が工場見学で第2班が都内見物となっていたが…。

大畠 ほんならそうかも知れん。

毛利 先生は遊ぶ方ばかり行っちゃせんか(笑い)。

塩田 僕等竹内明太郎先生の墓参りにも行った。



大畠 ガリ版で刷った予定表にちゃんと書いて父兄に渡していた。

“吉田首相の来校”



司会 宮田校長先生は新制高校の始めの方の卒業ですけど、その時分の生徒として一言どうぞ。

宮田 私は新制中学卒の第1号ですね。所謂6、3、3制の第1号です。当時は森岡校長でした。昭和28年の卒業で25年

4月の入学です。その当時のことで一番覚えているのは、学校は全部焼けてしまって何にも無くて、西を向いてみたら一軒家があった。全焼して都市計画で角度が回転して向う側三角だけで、西森製材のところを削られた。その隣りに今でもありますその家が一軒残っている、それからズーッと筆山まで一軒も家がなかった。こちらの1号館に木造の建物がありました。その後は丸太小屋の仕切り壁のない教室と教室が続いていて、黒板の上は空いていた。天井無しです。

大畠 私が昭和17年に初めてここへ来たときにすばらしい校舎を見せてもらった、2階の窓の上にもう一つこう窓があつてちょっと最新式の学校やなあ…、木造やけんど。校長室へ挨拶にも行った。この1回だけで次に来たときは焼野原であった。(感慨深げに)

宮田 2年生のときに小松生幹校長になった。当時戸髭元校長先生が電気科長、塩田先生が機械科長兼進路部長、化学科長には小松一夫先生、土木科長には村山先生、建築科長には坂本先生がおいでた。普通科には加賀野井先生をはじめ道願、岡林、池上、筒井、それから岡田清の各先生で、夫々錚々たるメンバーで殆んど後年校長になっている。

毛利 高知工業へどうしてそんな立派な先生が集まっていたろうねえ(大笑い)。

宮田 在学中特記することは吉田首相の来校でした。皆が1号館の前に集まりまして記念撮影をしました。現首相が来校したということで大きなイベントでした。

塩田 あの頃僕等下駄を履いて学校へ通ったけんど、天神橋を渡って学校へ真直ぐに歩いて来れた(笑い)。

宮田 丁度卒業するまでにここにあった講堂の基礎ですが、講堂は上家は建たずに、結局基礎だけで終わってしまいました。

毛利 工業の南は田んぼで家は無かった。ここへ来る途中では梅ヶ辻からこっちに家は無かった。

塩田 道路と学校の間溝があった。

宮田 今もその名残りはある。

大島 学校の門は道路に並行になっていなかった。

宮田 今残っている方向はこの前の自転車置場の方向です。

塩田 化学の北側の民家なんかたしか電気科の実験室の上に建っていた、「あれはしょうええねや」と皆いいよった。機械工場の上家は県造船の建物であった。

一同 いやー。まあすごいびっくりするようなことばかりで…。

“昼は全日、夜は定時で教える”



司会 これからは皆さんが先生なり、校長先生なりで、ご苦労されたところへ入ってゆきたいと思います。始めに中村先生は昭和35年から38年ですか、定時制の方にいらっしゃったようですが、その当時定時制はどんな様子だったんですか。

中村 中村高校からここへ転勤になりまして、最初立仙先生に木造の2階事務室へ案内されて靴履きのままで上ってみたら定時制には誰も居なくて1時頃でしたが、居らんから暫く中の様子を見て帰ろうと思ったら、大きな声で「気を付け」と後から云われましてね、びっくりして振り返ると、立仙先生が出てきていました(笑)。そこでダルマの上にあったお酒を飲まされ、また5時に出てくるというて退散しましたことです。35年、36年とおりまして、37年に国内留学で1年間大阪大学へ行きました。

司会 その時分定時制は生徒は可成り居ったでしょう…。

中村 ホーム主任を機械科でやっていたが全校で300人いた。なかなかいい生徒が集まっています勉強熱心でした。ここを出て先生になり、今須崎工で勤務している機械の平川、彼は放課後よく数学を聞きに来て熱心に勉強していた、授業のときも一番前にいた。

話しは変わりますが、当時の教頭さんが近森先生で、戸梶先生は休まれておりませんでした(病気休職)、私は定時制なもので、小松生幹先生が西校へ来いいうので、昼間西校へ行っていた、ところが恩師の高原先生に土佐女子への応援に来い、といわれて困りまして近森先生に相談したら、午前中は西校へ、午後は土佐女子へ、夜はここへと…ということになりました(笑)。

その後道願先生に全日制を手伝えと云われて全日の土木・建築と、西高校も半分やって土佐女子も昼だったので、帰ってきても疲れて保健室で5時まで休みました(笑)。

“あこがれの的の金線”

司会 戦後生徒の制帽に金線を巻いていたそうですが…。

大島 金線が勤労青少年のあこがれの的で金線を巻いて高知

工業へ行っているんだと…。

塩田 戦後のことですね。

宮田 そうです帽子へ巻いておりました。

塩田 偽工業生ができたり(笑)。

大島 金線は東京から直接購入した、どこへも売らないという事で…。

塩田 帽章が手軽に入ったろうき…。

司会 これは全定両方ですか？

大島 一緒ですね。

中村 そうです。

“高知工業に追いつき追い越せ”



司会 毛利先生が外からみた高知工業はどんなでしたか。

毛利 僕はまあ大体高知工業とは縁のない男でして、学校を卒業して美良布に居たら、高知工業へ来んかという話がチラッとあったけど、この腹の減る時

代に遠方へ通うていけるかと断った。その後浅井という先生が高知大学へ行くので、定時制の機械科長をされていたと思いますが、その後へ先生が要るので来んかという話があったので、まあ折角のことなので、定時制の職員室へ挨拶には来たのですが、もともと当時は交通もあまり便利じゃないし、まあ中学校に居るつもりでしたから来る気がなくて…。最後に校長としてここへご縁になったということです。

最初、東工業へ赴任したので、東工業が1つの僕の工業としての母校というイメージがあり、東工業へ戻って工業計測科も名前を変えて体制を整えんといかんあ、という気持ちもあったから、家も後免へ構えていたので変わるとすれば東工業へ…。高知工業というのはちょっと予想外でした。僕は東工業に居るときは、高知工業を僕の意識の中では追いつき、追い越そうと、競争意識の面から云うたら、高知工業を引き離すまでもなく、東工業を上へ持って来ようと、そのような学校にしたい気持ちがあったわけですけど…。

高知工業へ来た最初はちょっと違和感がありまして(笑)、いうたら競争相手のところへやってきたという感じがしましてね。

来たからには俺がこれを潰したら申し訳ないと、一生懸命やってリレーのバトンを受けとったからには、次のランナーに渡すときには、東工業が追いつけんように、もう一廻り位あらかしとおこうという気持ちで4年間やらせてもらいました。

司会 どうもありがとうございました。

“風が吹いたら天井から土”

司会 塩田先生は昭和22年から42年まで機械科の先生で、42

年から45年まで教頭先生、45年から49年まで校長先生と、一貫して戦後ずーと工業学校でご奉職になって、生字引のような感がありますが、その間戦後の学制改革に直面されましたし、或は教頭、校長先生として本格的な校舎の改築工事ということで、いろいろご苦労があったと思います。

塩田 私は校長として何ちゃしちらん(笑い)。最初にお話ししておきたいことは、45年に校長になった途端に生徒の死亡事故があり、48年に1人大怪我をさせてまことに申し訳なく思っております。この際おわびをしておきます。

ねー、まあ僕が22年に入ったときは、風が吹いたら天井から土が落ちてくる、機械工場は雨漏りがする杉皮ぶきで、暗いときは池田先生が「ノギスの目盛が見えんきにロウソクを持って来て」と、ロウソクは買わにゃいかんし、雨が降るときは機械科職員室から傘を持って行かにゃいかんようなことやったです。

1号館と2号館の木造校舎がやっと建って、そのときには工業校じゃ実習が先じゃいうことで、2号館の電気科の実習室が先ずできた。それから順々に建築が進んだ。

その建てるときに森岡校長先生が、じきじき校長室の床の上に紙を拡げて、膝をついて図面を引きよりました。夫々校長先生は面白いところがあって、森岡校長を見て皆教師が「しょう校長いうて忙しいのう図面を引いたりして」と。それから森岡校長が自腹も切りよつたらしい、PTAが気の毒ないうことで校長行動費という涉外費をつけました。ところが森岡先生が替って小松先生がなつたら、「しょう校長いうたら暇なのう、何ちゃあすることはないのう」となった。小松先生は小松先生でもうじーっと坐っておられて…。ま、それはそれで結構小松先生の統率力のある人柄じゃと思ったことですが…。

“配線工事は先生が夏休みに”

塩田 最初木造に改築したときの電気科の職員、製図室と普通教室が6つ位できたときに定時制ができた、そこが定時制の教室になって60ワットの裸電球を教室に6個位つけました、段ボール箱に入れちよいて、定時制の生徒が登校してきたら総務へ取りに来さしていたが、帰りには忘れて帰ったりしますきに、初代の定時制の生徒部長をしていた僕は机の上へ上って電球を一つ一つ外して段ボールの箱に集めて廻ったものです。

大島 定時制は23年にできているでしょう。

塩田 23年は第1回じゃきに土木と建築だけじゃ。24年に機械・電気・化学もできた。

大島 24年9月に木材工芸が一緒になった。

塩田 工芸高校の校長の水間先生が科長で工芸へ来た。そのときに機械科と工芸科とが一緒になって、工芸校の宿替えを手伝った。全部ダットサンで運んだ。それで木造の定時制の校舎つまり2号館よね、配線工事は戸髭電気科長が指揮して電気科

の教師が、夏休みに天井這うて全部やった。それを見て機械科の職員室と、隣の精密測定室、製図室、材料試験室、原動機実験室等の、天井裏の配線は機械科の僕等がやった。

中山正彦さん呼んできて碍子を打って、バインドを捲いて、こうやるのが講義を受けて、線をずーっと張って、ペンチとナイフで削ってスリーブを入れて、両方のペンチでやっておいて引っ張ってきて、夫々が実験室へ照明をつけた(笑い)。

私が引っ張りよつたところが、ペンチで振切って両方を引っ張ってきてやっ引きつけた。職員会で戸髭さんが「漏電したときは全部に火が出て火事になるぜよ」とおどかさされて、ええかと心配したけれど、すぐに工場の改装があつて配線工事を全部やりかえてくれてホッとした(笑い)。

大島 話があつちへこつちへ行つたりすごいね(笑い)。

塩田 24年頃は機械工場も大改装があつてね、又26、27年頃には機械類も産振が入ってきたしね。毎年機械を移動しよつた、据付もそりゃ全部を機械の教員でやったわね。基礎をコンクリートで固めたりしてね覚えたわね。夏休みになったら1週間全員が作業する、後で古鉄なんか売つたがで1杯やってそれでおしまいよ(笑い)。

大島 古鉄売って酒代になりよつたきねえ(笑い)。

“…結局木造で、鉄筋にせにゃ”

司会 木造の改築が終つて次の計画は…。

塩田 清水建設の手で校舎ができたですが、それも結局木造で、鉄筋にせにゃいかんということで、その頃に都市計画が進んで校舎の敷地の区画が30度位振って、現在のような恰好になるし…、改築期成同盟を作つたはずですよ。

期成同盟会長は同窓会長がなつて、当時寺尾豊さんが元気だったので頼んで運動をしてもらつた。そこらあたりから戸髭先生が鉄筋の計画を樹ててまあ僕は見よつたばあのことです。建築の苦労いうてあまり無いですが(謙遜されて)…。その中に講堂が無いというので同窓会、PTAが金を集めて今の体育館を造りました。それも欲張つて予算ぎりぎりに一ぱい建てて後から考えると設計上、構造上まずかつた点もあるし、また体育館の横へメタセコイヤを植えたもんですから、その落ち葉が戸樋をつめて水のため床が傷み全部張り替え、メタセコイヤは全部切りました。

他に校舎改築とからんで残念なのは、今となつてはできんですが、上履きにすれば校舎がうんときれいだったし、生徒の指導にもうんと楽じゃつたと思うですけど…。ただこれが難しかったんです。それに定時制との関係もありまして…。

司会 何時頃からなるわけですか。

塩田 鉄筋は42年頃からで、インテリア科が42年、44年第1号校舎、45年第2号校舎、46年本館と、又各実験実習室が次々完成昭和49年に校舎落成記念式典をした。



本校鳥観図

司会 塩田先生は校舎改築に2回かかわったですか。

塩田 そうです最初木造を森岡先生がやって完成して、それから今度その木造がボロになって建て直した。

司会 どうもご苦労さまでした。

“ストで気を使った教頭”

司会 大島先生は定時制の機械科の先生で40年から49年まで、教頭先生で53年まで、校長先生で55年から59年と、可成り永く経験されておりますが、特に定時制の教頭先生の頃ご苦労されていると思いますがその辺のことをどうぞ。

大島 私はほれ、若い頃に定時制をやった経験はないし、まさか定時制の教頭になるとは思いもよらざった。塩田先生が東工業へ行かれて田口校長が就任され、同時に今井教頭が仁淀の校長になられてその後へ突然、新聞をみたら「定時制主事兼教頭を命ず」となっちゃらあね。定時制主事の最後で、主事というたらそら校長よりもっと力のある位、全国の組織的に云ったらなかなか勤労学生の教育に対する熱を持った人が活躍しよたらしいですね。そんなところへ入り込んだものだから、いやこれは…。田口校長も高知工へ校長として初めて来られた。

一番先に思い出すのはあの頃はまだ先生のストがあった。1時間過ぎたらすつと帰るとか。

塩田 ストがようあったねえ。

大島 そしたら教育委員会の指令で、それをチェックして報告せにゃいかん。ストは4月から5月によくある、最初は新前でしょう顔を知らんし、校長さんも知らんわけよ、けれど校長が何時から来て下さい、いうて夕礼をやって点呼をとるそれを教頭がやる。名前を呼んで返事をしてくれという「ハイ」というてやりゆう、「返事をせえじやいうて失礼なことをいうな」という先生も居った。こちらはしてもらわんと新前でわからんきに、「返事せん者は欠にする」というたら、「ハイハイ」言

いよった。それで呼んだらそこに居ないのにねえ、田口校長があれば下で会うたというので、それ等は全部「出」になるわけよ。そうやって欠席者何名と報告したら、早くストに参加した者は処分の論告がくるわけよ。本人に直接ね。そしたら組合長等上の方の者5、6名が論告が来んわけよ。「どうして皆に論告して我々に来んぜよ」と校長のところへ来た。「おまん等居ったじゃないか」と、それがねえ校長が上ってくるときに、これからストに出て行こうとする者会ってる、職員室には居ないが校長と会うとき校長は「おるおる」というて上ってきた、だから欠席になっていないわ(笑い)。「われわれは居らんに論告をもら

わなかった」いうておこられてねえ。みょうなおこり方をしたもんじゃ(笑い)。まあ芝居みたようなのはええけれど差別しちゃうじゃ云うて(笑い)。それからは点呼は慎重にとったが、いろいろあったです。最近宮田先生もうないらう…。

毛利 中村校長のときはあったかね、僕の場合は1回あった。

塩田 年に3回位やりよった。

大島 教育委員会が厳しくて。1校だけでも乱れたら全部が崩れてゆくからねえ。

宮田 私等は全然やらなかった。

大島 一度自転車で行って行って又帰ってくる者がおらあね、それはここに居たら判らんからねえ、図書館の中で見たらあれが出て行ったなあ、とチェックしていたらすつと帰ってくるのがおる、それを欠席言うたら又おこられるきにねえ。組合長と話しをしてこれは出席ぜよとか気を使うてねえ。教頭さんが一番気を使ったねえ(笑い)。あの頃は一人一人に全部職務命令書をほら塩田先生がよく持って来たわ(笑い)。あれが苦労したわ、仲間同志でねえお互いに気心は判っているのに建前じゃないけど…。

毛利 職員室が一ぱいあるからねえ、正確に自信を持って確認できん。

大島 或学校の校長さんに聞いたら、職員室の黒板にちゃんと職務命令書を1枚はったら終りじゃったということもあるけどねえ…。

“活気のあった定時生”

大島 それから定時制でねえ、昭和49年の頃は優秀な生徒もおりましたが、要するに中が変わってきたですね。「働ながら学ぶ」から「学びながら働く」ような、ちょっと昼間は訓練所へ行ってみたり、ちょっと勉強しとって中退した子が来たり、だんだんそんなになった。49年ゆうたら、集団入学、岸之上工

務店のね、中学を卒業して、岸之上工務店へ採用になった子が、全員建築科へ入って集団で自転車で登校する…。このようなことは会社が中卒を採らなくなったから無くなった。

生徒としては非常に活気があってねえ、先生方は生徒のためには遅刻もできん、ちょっと遅刻して休講したら教頭のところへおこってくる、「折角会社は無理をして早めに帰してもらって来てみたら休講」と…。(笑い)

先生もええ加減なことは言えん、授業中を全部録音をとって「教頭先生これを一ぺん聞いて下さい、こうゆう授業をしますよ」、「英語の時間に数学の三角法を教えてください」、「こんな授業は聞かれません」とかジャンジャン言うてる、それだけまあ熱心じゃったねえ。

いろいろあるですよ。冬だんだん寒くなる、8時頃になるとくると玄関等は零度以下になってきよるね。けれども教室の中は密閉してあるので炭酸ガスも溜り、5時6時よりも3度位上っている。そんな密室で4時間も授業する、まあその健康のことを考えるとこれはいかんと、暖房暖房と言いついてねえ。

建築科の先生に聞いてみたが、そんなこと今更できるかと…。私は化学科の頃改築したときに、将来定時制のあるところに暖房設備をすべきと、理くつをつけて教育委員会に無理いって、床下へ孔を開けてもらって何時でもパイプが入るようにね。(笑い)まあそれも気休めよ(笑い)

“情報技術棟の建設”

司会 毛利先生は昭和59年から63年まで校長先生として初めて高知工へお出でられた。情報技術棟の落成したのは63年、定時制の軟式野球大会が決勝戦に進みましたが62年、吉崎七次郎先生の胸像の除幕式があったのが59年と年表に出ておりますが、特に先生は情報技術の方はご専門じゃと思いますのでその辺の思い出をどうぞ。

毛利 私は専門じゃないですが、学校は機械科でして戦争中

でろくに勉強せずに卒業してるので…。田舎へ帰って最近見よつたら電気を習ったノートが出てきて結構習うちよらと思ったが(笑い)、一つも覚えちゃせんなあ…。電気は留学の1年間電子工学、自動制御をやるからコンピューターの勉強とやりました、10年位前生徒部長になるまで勉強する時間があつたわけで、専門ということも無いですが、一時期集中してやりましたので、まあどうせにやいかんかと見通しだけは持っておりました。

高知工業の情報技術科は東工業より先にできています。がここへ来てみたらやっぱり現在の設備ではこれはいかんと、本校は歴史が古いので県外からの視察に見える、ちょっと恥ずかしいという気持ちがあつて、はやく建物を建ててジャンとしたものを作らんと時代遅れになると、若し工業学校が沈没したらいけませんので…。

僕はこの学校へ来た4月の時点で4年間居るとして、できる範囲で目標をいろいろ樹てましたが、その一つが情報科棟を建てろうということでした。

それからこの土地(工業跡地)を先ず確実に入手しようと、僕の代でできれば登記をしたいと思ってましたが、それはできなかったですけど、中内知事との約束で一応議会答弁を貰ったし、知事からも口頭で「おんしんくにする」と、これで大体もらえると思った。土地を貰ったら高知工へ早く体育館を建ててくれという約束は、教育委員会も金を出さにかいかんまでは、ハイハイと云いよりましたけれど、いざ中村校長になったらそれは簡単にはいかなかったと思います。苦勞がいったでしょうけれどもお陰で立派なものことができましたね。

“生徒の質はよい高知工業だが”

毛利 生徒指導上の問題です。高知工業へ来て僕がやっぱり伝統校だなあと思ったのは一つには同窓会という組織ですね。東工業も塩田先生の頃に同窓会ができたんですが、まだまだちゃんとした同窓会ではなかったですので、同窓会の組織、立派な

同窓生がおいでということ、何かのときはお頼みしやすいという条件でございます。生徒の質がやっぱり平均すればいいと、工業高校は県下に5校ございますけど高知工が一番いいと。同窓会の伝統の魅力と、生徒の質が他校に比べて格段に高いわけですので、そういう意味から、生徒の質を教員がきちんと育てているかどうか、又生徒も高知工へ入れたということで、いうたら東大へ入って全然勉強せん学生みたようなもんで…。高知工業へ入っただけで満足して、やらない生徒もいるし、中には高知工はめっそう勉強するによろばんぞ、という感じている子もあつて、生徒自身の問題も



ありますけれど。まあ教師自体もちょっと、子供の素質がありますので、それに少し頼りすぎている面がありませんか、こればあの素質ではいつて来たら、もっと立派な生徒になって出ていかにゃいかんと…。

同窓会で県外へ行きましても、先輩方は自分の昔のレベルで考えているのでそれは無理ですね。先輩方の質は雲泥の差ですから、まあそれにしても、もうちょっとレベルアップせにゃいかんと…。

中退者にしても、高知工も結構おるんですね。これはやっぱりこれ位のレベルで入ってきた生徒を中退するようなことではいかないと、僕のいる4年間の最後の年に中退者を3分の1に減らそうと、そのためにはこういう施策をやったんですね、結果として僕は大体数学で計算する方ですので、これをやったら2人減って、これをやったら3人減って、全部トータルして何人



減ってですね。最終的に僕が卒業するときに9人までの1桁の中退者にはせにゃいかんと、高知工業の全校全・定生徒でいった場合に、1パーセント以内には抑えんといかんじゃないか、という気持ちでやりました。

またスポーツには力を入れ勝負にはやっぱり勝たんといかんし、スポーツで威勢が上らないと学校も沈滞しますので、残念ながら全国優勝はあげることではできなかったですが、県体その外平均して成績は或る程度子供達もやってくれたと思っております。

ここの学校の場合はまだまだ優秀な子が入ってきているので、工業高校全体のレベルを維持するという面からも、高知工はより高く構えていないと、高知工が下ったら他はもっと下りますので、この学校はとに角頑張らんと、いうことだと在職中はできるだけその方向で来たんですが、4年間という期間もありまして、いろいろ伝統校のよきと同時に、長年のしがらみというものもありまして…。校長の仕事は建物を建てたりいろいろの仕事もありますけど、教員を育てるのが最大の仕事ですので、

その当りきびしく教師に問いかけたいと思ったわけですが、そのためには自分自身もきびしくいかんといかん、やっぱりこの4年間の高知工業は僕のサイドでいうと、大分俺の命を縮めたなあ、というような気持ちはありますけど…。やはり伝統の力というのはあるなあというような気持ちはです。伝統校の重みというものを感しました。

司会 どうも貴重な思い出やお気持ちをお聞かせ下さいましてありがとうございます。

初めて高知工業へ来られて大変ご苦労さまでした。

“基本姿勢として上履きに”

司会 中村先生は前に高知工業におられたので割合状況も判っておられたと存じますが、丁度工業試験場跡地の問題を毛利先生より引き継がれて大変ご努力され、また体育館の起工と、今年3月にお辞めになるまで御苦労されましたんですが感想をどうぞ。

中村 私昭和63年から平成4年までの4年間ですが、その前に工業学校の教頭として安芸工業、東工業と廻ったわけです。

東工業では校舎の全面改築をやったわけですが、一番心配したのは高知工業もそうなんですが、先生方の取り組みが一番難しかったんですが、上履きにするのに定時制から約1ヶ月2ヶ月と説得して、やっと図面書いて始まって、プレハブを借りて200万円かかりましたけど、やっぱり校舎を

こわしながらはできませんので、あれが一番苦労しました。生徒の学力が低下しはせんかと…。

ここへ来まして将来の改築にかかったわけですが、2年間先生方に図面書いてくれと、全・定集まったわけですが、けんけんがくがく仲々まとまりません。私も校長室で30か40の図面を書きました。いろんなことを書いたりして体育館もそうでしたが何とかいくように…。基本姿勢としては上履きにするということ、それから始まっていたのですが全・定はできるだけ隔離すること、確かに今だけをみてもいらないですけど、定時制の生徒に靴をはかすと、通路を別に分けないといけないと、教育委員会に強く話をして、県外では殆んど入口は別で中の産履設備は一緒になっている学校が多いわけですが、問題があればそういう風に考えにゃいかんと、平成3年度にできた将来の校舎の完成図ですね。基本設計ができ上がっていますけど…。

体育館が一番問題でして食堂の管理、後々の運営はどうなるかと心配ですが、その辺うまくやっていきたいと思うわけですが、いろいろありまして、全・定の問題もありますし、教育委

員会としょっちゅうけんかをしていまして、基本設計のことも困っていましたが、最後にやっと納得と言っても職員会にも何回もかけて…。校舎の改築というのはほんとうに難しい問題、その第1番は体育館でした。

もう一点は例の国旗国歌の問題です。それもからんで80周年と体育館もからみ、最後まで、職員会も10何回開きまして…。最後は強引に押し切りました。

何れにしても80周年の記念事業は並行して、会長さんが非常に温厚な人ですし、皆さんの総力をあげて校舎の改築ともども完成してもらいたいと思います。何さま4年間でしたけども、くくりつけられた以外の仕事も多く、そちらは教頭さん任せでやったこともありますし、皆さんにご迷惑をかけたと思います。

司会 上履きの問題というのは教室だけで。

中村 教室も他全部です。いまできている体育館をどうするか、上履きにしておいて土足にすることは易しいけれど、土足から上履きには絶対になりませんと大分いいました。全・定、上履きにすることは…。

毛利 東工業は開校当初土足やった。現在は上履きに、校舎を改装した機会に変わっている。上履きの方が埃はたたんしきれいなし。

中村 東工業をみまして授業にいても何というかケーキの古が教室の中にあるし、生徒が土足で蹴りながら行っているとか、紙が一ぱい散らばっているでしょう。授業が授業にならんです騒がしくて、生徒の気持ちもやっぱり…でしょう。これはいかんと思ひましてね、各職員室を廻って説得をして、各先生方定時制が難しかったけれど、だけど皆が応じてくれました。

“安全に力を入れた”

司会 私の不手際で遅くなりまして申し訳ございません。最後に宮田校長先生、ご自分の先生をやられておりました昭和37年から60年の間大変永く母校におられたわけですが、それと現在の学校の状況、将来の展望について、なかなか大きな問題ですので簡単にはいかんとは思いますがよろしくお願いします。

宮田 8代目の戸梶先生を最初の校長としてお仕えして以来、24年間に9代目の塩田校長、10代目の田口校長、11代目の大島校長、12代目の毛利校長、これだけの校長先生に仕えてきました。

昭和37年ぐらいまではまだ教科書が充分整理できてなく、教科書らしい教科書はそんなになかったと思います。その後1年間日本大学へ留学しまして、そのときは何を勉強したか、ほんとうに毎日実験室へ入ってもぐらみたいにやっていて、こんな



ことをしていて何になるだろうと思ったが、出てきてよく考えてみると、勉強というのはやっぱり一つの事を夢中になって深めているうちに、周りの事柄が見えてくることに気づきだしたのです。その後学校に帰りずっと生徒指導部へ入りまして丁度、塩田先生の頃でしたが、安全ということに一番私は力を入れました。それから40年代の後半になります。修学旅行に行くにしても例えば車の乗り降りについてわざわざ県交通からバスを借りてきて乗り方の指導をし、廊下や通路には真中に白線を入れてそしてきちっと両側を対面交通で行ける習慣づけさしたり、また学校の正門には、生徒から募集した交通安全標語を今でも掲げてあります。というように生徒指導に携わっている期間が非常に長かった。

“研究機関としての役割を果たす”

宮田 40年代の後半から50年代の前半にかけては高知県の研究施設が現在のように十分に完備されてなくて学校全体が試験研究所的な役割を果たしていた。丁度私達がコンクリートの試験に携わっていた頃は生コンの会社がきて内の土木科の実験室はその基礎データを得るための試験室になっていた。テストピースが沢山できましたし勿論学校でも沢山の作りましたが外から多くの試料が提供されたので、お陰でこちらも勉強できました。土木・建築の面の例えば鉄筋なんかの引張強度、曲げ強度などの試験ができ、生徒の課外研究や卒業研究の題材となっていた。

こうした技術を身につけた卒業生は、中堅技術者として、県内外で活躍し、各企業の中核となっている。

丁度この頃は、2度にわたる石油危機による省資源型の技術集約型産業のウェイトが高まり、マイクロ・エレクトロニクスを中心とする技術革新の時代へ入ったときのことで。

“中堅技術者から実践的技術者へ”

宮田 私たちがこれまで用いていた中堅技術者という言葉が

50年代前半で消え、平成元年度から指導要領では実践的技術者と変わってきた。この実践的技術者とは、技術推進の中核をなすべき技術者という意味にとればよいと思いますが現場で中心になって実践されている技術者ともいえないでしょうか。

中教審答申には、職業高校が今まで果たしてきた実績に対する評価や技術教育が、生徒の人格形成にとって極めて重要であることがうたわれ、日本の幅広い技術力を担ってきた職業高校が評価されているところです。

高等学校の生徒減少期を迎え、社会の枠組みや価値観が大きく変動しつつあるとき、本校では、伝統に甘んずることなく「量的拡大から質的充実へ」と一層の努力が必要になってきた。それには、学科再編成、選択科目幅の拡大、複合型の類型、現場実習の導入などが新しい課題になっている。

“進路指導の徹底”

宮田 1年次から自己の生き方を考えさせる。学習や体験を通して、望ましい職業観を育てるようにする。それには、学校本来進路指導はもちろんのこと、産業界から社会人講師を招いたり、体験入社などを広げていくことも考えている。

また、継続教育として、大学進学希望者に対応する教育課程の編成が急がれること。現在、運動していることは、大学へ働きかけ、新しい学力観のもとに評価尺度の多元化の導入や、入学選抜の特別枠の設置などの改善について要望しているところでは。

一方、定時制教育については、生涯学習の視点からも定時制の果たす役割は極めて大きい。この課程には多彩な生徒を受け入れているが、その教育活動を円滑に進めていくためには、1日も早く学習環境を整備していく必要があり、早期に定時制独立校舎の建設が急がれる。

現在の各科をベースとした専修コースの設置と共に、新たな発想のもとで、おもいきった学科再編成を行い、学習内容を大きな系にまとめ、自分の進路にふさわしい科目を選択履修できるようにすることも考えられる。

しっかりした目的意識を持たせるためにも資格取得に関する学習に力を入れ、公的職業資格を学習の成果として位置づけ、資格社会の新たな構築が、定時制課程を魅力化する手立てだと思っている。

司会 どうもありがとうございました。今後の抱負、課題について実りあるようにご期待申し上げます。

本日は長時間にわたり各先生の貴重な体験なり、ご意見をいただきましてありがとうございました。

早大便り

森 岡 貞 篤 (大6機卒) (旧職員)

早稲田大學は學問の獨立を全ふし學問の活用を效し模範國民を造就するを以て建學の本旨と爲す

早稲田大學は學問の獨立を本旨と爲すを以て之が自由討究を主とし常に獨創の研鑽に力め以て世界の學問に裨補せんことを期す

早稲田大學は學問の活用を本旨と爲すを以て學理を學理として研究すると共に之を實際に應用するの道を講じ以て時世の進運に資せん事を期す

早稲田大學は模範國民の造就を本旨と爲すを以て立憲帝國の忠良なる臣民として個性を尊重し身家を發達し國家社会を利濟し併せて世界に活動すべき人格を養成せんことを期す

是が早稲田大學の教育の趣旨で併も實際行はれて居るところであります

私が本校に入學する前の事でありましたが或は『學生の自由を尊ぶ』とか『早稲田スピリット』など云ふ語を耳にして早くも放縱な不規律極まる學校ではないだらうかと云ふ不安の念を抱いたことでありました併し此の不安は全々間違つたものであります早稲田大學の状況を知らぬ人々はよく此の『自由』を誤解するのでありまして一度ノート片手に稻門をくゞつた人は誰でも幾何も無く其の意義の深い處に氣が付くのであります決して我儘勝手を許すのではなく自由の中にきちんとした規律が自制的に守られてをるのであります

更に教育のやり方が總て進取的研究の精神を養ふ様になつておりますから進んで研究すると云ふ習慣を得るのでありますそれで一般學生の熱心さは實際驚く程で自然それが授業に表はれてをるのであります又午後になつて放課時刻になるとあの2階建ての大きな圖書館はいつでも殆んど満員と云ふ有様で實に盛んなものであります

唯だ一口に早稲田大學と云ひましても其の中には理工科文科政治經濟科法科商科の5科を有し更に理工科を別つて機械科電氣科採鑛冶金科應用化學科建築科の5科を置いてあります恩賜紀念館の裏手に聳え立つて居る3層樓のビルヂングが理工科の本館で其の左手の前の方に高い煙突のある工場が機械科及び電氣科の實驗室で其の裏の2棟は機械科の實習場で木工場と鑄物工場と機械仕上工場であります一方本館の右にあるは採鑛冶金科の實驗室で裏手のグラウンドの方に今度出來た赤い2階建ては應用化學の教室及び實驗室であります

總て工場及び實驗室の諸機械及び器具は最も新しいものを用ひ學理と相待つて理想的の教育を施さる云ふ運動は殆んど網羅し盡して居ると云つてよいであります殊に春秋2回の水陸大運動會の盛況は到底想像の及ばないところであります

斯くして當大學は學理に實地に体育に眞に理想的の大學園と成り益々盛大に趣きつゝあるのであります

昭和三十一年三月一日
森岡貞篤
人になりた
い
敬愛され
る
信賴せられ

終りに本大學の校歌を書きまじやう

都の西北早稲田の森に

そびゆる薨は我等が母校

我等が日頃の抱負を知るや

進取の精神學の獨立

現世を忘れぬ久遠の理想

輝く我等が行手を見ずや

わせた わせた わせた わせた

わせた わせた わせた

東西古今の文化の潮

一つにうづまく大嶋國の

大なる使命を擔ひて立てる

我等が行く手は極まり知らず

やがて久遠の理想の影は

あまねく天下に輝きしかん

わせた わせた わせた わせた

わせた わせた わせた

あれ見よかしこの常盤の森は

心のふるさと我等が母校

集り散じて人は變れど

仰ぐは同じき理想の光

いざ聲そろえて空もとどろに

我等が母校の名をばたゝへん

わせた わせた わせた わせた

わせた わせた わせた

何かの會合とか他校との競技の際の應援とかにはきつと此の校歌が宛然天を揺り山を動かす様な勢で歌ひ出されるさあそうすると唯だ何とも名状することの出來ない意氣込みを加へ『何をくそ』と云ふ精神が全身に流れるのであります(会誌4号より)

長崎より

河 井 正 身 (大7機卒)

三菱造船所の概況と小生等の勤務状態を極く簡単に書いて見ませう。

さて當造船所は名も高き長崎港(別名鶴の港)内市街と一葦帶水を隔てた西岸水浦飽の浦立神に再び南北約半里周圍約2里近くの廣大な地所を占め役員2千余名職工1萬5千人を使用し内外船舶軍艦の建造修理陸上機關の製造を主として居る。本社

及設計所は造船所の北端水浦にあって壯大な3階白亞館で當所の玄関をなして居る數間をへだてた港には三菱棧橋設けられランチモーターボートの往復が忙しい。

工場は飽浦と立神にある前者は造機工場で後者は造船工場である飽浦工場は本社と續き造船所の北部にあって鉄骨頑丈な工場は10幾棟空高く巍然としてそびへ10數臺の煙突よりは黒煙渦巻き百廿噸チャイアントクレーンは長崎港を睥睨するが如く偉大なる雄姿を空高く聳やかし時々刻々廻轉の工場より船に機械を積入れて居る此工場では製罐鑄物木型仕上鍛冶電機は各工場を主とし之に附屬せる銲接工場其他各試験場がある製作せらるる物は船艦用各種ボイラー煙突スチームエンヂンタービンポンプコンデンサーバルブプロペラマリンエンヂン一切モーターダイナモトランスホーマー等の電機其他陸用エンジンボイラーポンプ等である内火機關は作つて居ない。

立神工場は造船所南端にあつて船体の建造をなし木工場が主で大は數萬噸の軍艦商船より小はランチボートに至るまで建造して居る此處にはガントリークレーン轟々として天を摩し船台には軍艦商船數隻も横たはり鐵板を打つ音りベッチングコーキングの音天地を振動し海波爲に騒ぐ状況である船は此處にて外板を張られ船室を作り甲板を敷かれ黒赤に御化粧し始めて孤々の聲を揚げ進水し長崎港で産湯を使ひ引かれて飽浦造機工場チャイアントクレーン下に来て艤装し始めて完全なる船となるのである。ドックは3つあつて第1ドックは立神第2は飽浦第3は八軒屋にある何れもドライドックで第1第2が2萬噸級の商船をゆつくりと入れる第3は3千噸級位の船を入れる事が出来る中でも第1ドックの石壁には恐多くも菊の御紋章が刻まれてある如何に當所が國家のために貢獻せるかがわかるであらう。

各工場の動力は全部電力で火力発電所が飽浦にあつてモートル電氣銲接電燈等自家供給である

工場内交通機關はと云ふと水浦本社前より飽浦工場を経て各ドックを通り立神工場に至る約18時間復軌の汽車があつて終始往復し客車3輛を率き従業員を運んで居る工場内に長いトンネルが2箇所ある以て當造船所の廣大なのがうなづかれるのであらう是を幹線として各工場の隅々まで分岐線が敷かれロコモチープ二輛あり其他トロッコが澤山走つて居る海には幾隻もランチが航し交通の便を計つて居る。

さて設計課は造船部と造機部と電氣部に分れ各軍艦設計課と商船設計課とあり別に補機設計課と云ふものがある所で橋本貞衛君と小生は造機部軍艦設計課で田所南海男君と矢野伸樹君は補機設計課に居る森田君は電氣工場の現場に居るのである。

小生等の仕事としては軍艦のエンヂンやボイラールームに備へ附くべき各種の機械の設計製圖で参考圖やポケットブック引出し頭ひねくつて製圖をし技師に訂正してもらい寫圖手にトレースさし或は自分にて自己の引ける圖をクロスにツレースし最後に當所に駐在して居る海軍監督官の認可を経て工場に圖を

まはし製作に掛るのである此外の仕事はボイラー等の水壓試験に工場に行くこともある又軍艦進水の試運轉の時は作業服着て數日間エンヂンルームやボイラールームで汗をたらして試験成績のレポートを書く勿論船は外海を走つて居るのである之の試運轉が興味あり又苦しい併し船に強い者は暈はないから苦しいことはなく面白いのである。

附記

目下當造船所にては巡洋艦2隻(多摩木曾)1等駆逐艦(秋風夕風)其他大商船3隻建造中で近々着手せらるべき努級戦艦「土佐」(40,000噸)は目下軍艦部に設計致し居ります。(会誌5号より)

朝倉聯隊より

田内遊龜万(大8電卒)

昨年は西伯利亞の野にありて會誌を頂戴し諸兄に拜顔した様な氣がいたしました。勿論投稿はいたしませんで濟まん事をいたしました。故に兵隊として校友会に通信するのも是が最初の最後と存じますので一生懸命頭の底を振つて軍隊のお話をせんかと思ひまして色々考へて見ましたが何分先輩が随分詳しく記述されましたので今更私が書く材料がなくなりました。兎角軍隊といふ所は勅諭にも『長上の命令は其の事の如何を問はず直ちに之れに服従し』といふ事がありますから學校時代の腕白は通用いたしません。而し此の様な眞四角な軍隊にも次の様な面白い歌がありますから御紹介いたします。

四季の歌

- 1、春はいやだよ風紀衛兵歩哨に立てば花見歸りの女學生、それに見とれて缺禮し、ちよいと3日の重營倉
- 2、夏はいやだよ梅檀木影で、銃劍術や、午後は午睡で床に就く、起きよの喇叭が鳴たなら、ちよいと行てこうか入浴に
- 3、秋はいやだよ聯隊揃うて屋外の演習、帽に白帶假設敵、山の麓に散開も、ちよいと着劍突撃に
- 四、冬はうれしや待ちに待つたる古兵の滿期、永々お世話になりました、何うせ御禮は豫備の時、ちよいと別れの水筒酒 (会誌8号より)

秋風の山

大西賢吉(大10化卒)

路は2つに岐れた、丁度此の山を抱き込んでゐる様に、山腹に沿うて右に曲つたのと、密林の中を山頂へ通ずる可成険しい小徑とに。

先頭を見失つた自分等は少しの間迷つた、多くの者は、道を密林の中へ採つた。

左手には少々背の高い杉の木が鬱然と毬形の様にムクムクと深く生ひ茂つて、少しの木の葉の戦ぎもなく夏の様な明るみも

なく、何とも云えない静けさが心の中に襲ってきた。

傍の冷めたような古い昔の洞は水蒸気が立ち籠つて薄く不透明な色が漲つて、神秘的なもの様に思はれた。

自分等はジメジメした、赭土の路を踏みしめつゝ狭い狭い谷間の徑を歩んだ、靴底には粘々しい土が附着いて、其の趾は痘痕の様になる。

あたりの林は益々繁つて、云ひ難い静寂の氣は犇々と迫ってくる、そして自分等の精神は澄みきつて、鋭敏になり、全ての微かな音響も鋭く感ずる程になつた

徑が次第によくなり鈍い日光が木々の隙間から差し込み出した時、其處には思ひがけない芝生があり、さゝやかな祠の邊には、多くの者が力なさそうに寝ねべつてゐた。

目の前には鷲尾山が威壓する様に迫り、煮え切らない海は日光を受けた部分が透通つて、赤くボンヤリとしてゐる、入江の水は柔い、鈍い銀色を湛へ、静かに朝の沈黙を守つてゐる。

一同は再び傾斜の急な下り徑を進み出した、もう太陽は灰色の雲を離れ強い日光はジリジリと照り始めた徑は愈々鷲尾にかゝり、又々上り坂となつた、一同は山頂を目がけて一途に枯野の中を進んだ。

喘き喘き頂上についた時、爽かな風、秋の風が吹き上げて來た。

(会誌6号より)

高知工業学校の歌

機械三年 井上正喜作

| | |
|---|--|
| <p>一、 次水兩翼綠江の 四百の健兒朝夕に 文化の粹を吹き送る 受くる教へは信と義と</p> <p>二、 山に陰るる鐵を 術の光に外國も 千變万化電氣學 理想の駒に鞭打たん</p> <p>三、 清き流れはアルペンの 嗚々南國の青年の 世界の光明求めんと 扉開かむ鍵掘る</p> | <p>我旗の光燦として 螢雲つむや五星霜 獨立自尊の旗風に 我工業の大抱負</p> <p>君の稜威を仰ぐ迄 應用化學と智を磨き 凱歌を高く擧ぐる迄 深き谷より出づとかや</p> <p>旋て咲くき春は何時 文明開化の寶藏の 偉人の雄圖誰知るぞ</p> |
|---|--|

行啓記念

(大正11年11月27日)

11月27日 此日は是れ我叡智至徳なる 皇太子殿下の本校へ行啓あらせらるゝ當日なり、此光榮を永久に記念すべき當日なり、午前10時45分小幡本縣知事の御先導にて本校御着となり、一聲のサイレンは御着を傳へて校内に響き渡るや、豫より歡喜に浪立ちし人々の胸は忽ち森嚴敬虔の態度となり、此空前の光榮に一つの遺漏どもあらしめずと、緊張の氣漂ひぬ、殿下は玄關前にて玉歩を自動車より移させ給ひ、吉崎校長御先導申上げ、機械工場より鑄物場、木型場、電氣工場、應用化學工場と、順

次生徒の實習作校を嚮はせ給ひ、時々吉崎校長に御下問あらせられ、校長は身に餘る光榮に恐懼して、詳細御説明申上げ、殿下は久邇宮若宮殿下と御興深く御物語などありて、校庭に出でさせられ、設けの御座所に上らせられ、市内各小學校兒童並に女學校生徒の体操を御熱心に台覽あり、それより本校玄關前に若松の御手植を賜ひ、11時20分供奉員を従へさせて御發あり、市役所樓上にて御晝食の後、小學校女學校生徒の旗行列を台覽ありて、零時御發駕須崎御歸艦の途に上らせ給ひぬ。

此日殿下は本校へ成らせらるゝ前、城東中學校へ行啓ある御定なりければ、定刻本校生徒総代は城東中學校門にて奉迎申上げ、殿下は校内にて各中等學校長に拜謁を賜ひ、各校長よりは各學長要覽を奉呈し、各中等學校男女生徒並に郡市各小學校兒童の成績品を台覽ありて、同校庭にて各中等學校生徒の角力技擊劍等をみそなはせられたり。

行啓當日工場生徒實習作業順序

第1 機械工場

- | | | |
|--------|---|--------|
| 1、製圖 | 給水ポンプ | 機械科5年生 |
| 2、機械仕上 | 30馬力10馬力船用 石油機關附屬品。 | 機械科5年生 |
| 3、手仕上 | 全上附屬品 | 機械科4年生 |
| 4、鑄型 | 10馬力スクリュー プロペラー船用 機關附屬品及び 6呎旋盤附屬品並 機械科電氣科にサナ等 | 機械科3年生 |

第2 電氣工場

- | | |
|----------------|--------|
| 1、3相誘導電動機ノ荷重試験 | 電氣科5年生 |
| 2、變壓器ノ銅損失測定 | 全 |
| 3、抵抗ノ測定 | 全 4年生 |
| 4、直流直捲電動機ノ能率測定 | 全 5年生 |
| 5、電熱湯沸器ノ能率測定 | 全 4年生 |
| 6、電球ノ試験 | 全 4年生 |
| 7、製圖(變壓器) | 全 5年生 |

第3 應用化學工場

- | | |
|----------|-------|
| 1、石鹼製造 | 應化5年生 |
| 2、定性分析 | 全 3年生 |
| 3、容量分析 | 全 4年生 |
| 4、一般工業分析 | 全 5年生 |

城東中學校に於ける成績品台覽所へ本校より出品せる氏名

- | | |
|------|--|
| 1、製圖 | 機5、吉本一 機5、池澤之雄 機5、井上眞次郎 電5、大石良克 電4、新谷鹿次郎 |
| 2、圖畫 | 機3、長谷川濟 化3、西原元晴 2年、岡田徳藏 1年、弘瀬福次 |

3、習字 3年、弘松繁枝 3年、濱崎南海
 全、吉井眞一 全、池野亮當
 全、入交五郎 全、岡林 續
 2年、日川 英 2年、末永五十一
 全、高橋 保 全、北村重行
 全、岡野品吉 全、門崎 究
 全、岡林敏喜 全、岡林 勝
 全、松岡茂喜 1年、磯部季廣
 1年、弘瀬福次 全、北村茂喜
 全、野村 渡 全、楠瀬良吉
 全、寺尾忠夫 全、松木惣市
 全、川村太郎 全、別役道雄

全上台覽の榮を得し相撲選手

山中 勝亀 平石 武市 藤原 正利
 水田 守道 山本 下學

全上撃劍野試合選手

小松 益喜 久保田秀樹 大平 一豊
 岡村 三郎 西川南海夫 鎌田 正隆
 武市 可康 國乘 勳 村山 方任
 上村權之丞 (会誌9号より)

工場開放

南國の櫻花將に蕾を開かんとする陽春3月21日は高知市名代の一つとなつてゐる我が高知工業の工場開設の日であつた。表門には大國旗が交叉され春風に威勢よく翻つてゐる。門前には當日の人出を見越し澤山の掛店が朝から相並んでゐる。門を這入れば眞砂の通路その兩側の卒業記念木たる松柏は愈青々として枝を擴げ如何にも清々しく今日の榮ある日を祝いてゐるやうである。

入口は中舎の東端で第1室はこゝな階下から始まる。入口から廊下、室内まで悉く裝飾が施され日も眩い。第1室、第2室、第3室は縣下小學校の圖書成績品でその逸品を網羅し鉛筆書あ



ナイアガラ湿布

りクレオン書あり水彩書あり各々兒童の個性を遺憾なく發揮し千紫万紅一時に咲き出した感がある。我校の製圖もその一隅に陳列されてゐたが他と趣を異にし微に入り細を穿ち見る者は皆その緻密なことに驚嘆してゐた。かゝる催は縣下では稀で初等教育圖書界に功獻するところ尠からずとはその手の人々の評であつた。此處では尚衛生展覽會メートル法宣傳もあり人々の注意を喚起した。

こゝを出づれば次は機械科の第1室で10數台の機械は威勢よく廻轉し生徒は秩序整然と仕事に従事してをる、そして室の所々には趣向が設けられ見物人は黒山の如く集つてをる。地球に擬へた一大鉢球が快速力を以て廻轉してをる上を模型自動車が走つてをるのに車が矢張り同一の位置にある。人をして懷疑の眼を見張らせる。その第2室には依光の銑接實習、化物屋敷、高橋自轉車店の新式モーターサイクルの出品があり、その第3室は和蘭の風景で風力を利用して水を吸ひ上げ米を搗いてゐる模型である。小高き丘の洋館、牧場の牛和蘭ソツクリで風車は旋風機を利用して實際に廻轉さし米搗場の杵も實際に上下してゐる。

機械科室はこゝで終り次は電氣科の領分、其の第1室は活動寫真いつも満員の大景氣。間には印度虎豹の趣向、生徒製作のライオンは威風堂々、時々吼哮する聲は眞に百獸を摺伏させるには十分である。星はサイレンの作用。柱間の点滅器は流石お手の物。次の室は電氣科の本館ともいふべき平素は薄暗きこの室も今日は暗き迄電燈を点じ明るいことは此上ない。水力發電所の模型、電車の模型皆本物の如く活動してをる。雷磁石あり、水中に電流を通じその中の金魚を捕へさず仕掛あり、電氣鍍金をなす處あり、何處も彼處も大人氣であるが鍍金のお客は主に女學生で、銀や銅のメタルが金に早變りするので彼女を喜ばすこと甚しい。

次が應用化學の室、入口北側の石鹼製作は高知では珍らしく見る者堵の如しと漢文なら形容する處である。生徒製作の臥牛は眞に迫り時々大聲を發して啼く。次が化學分析室生徒は種々の分析をしてをる。

石鹼製作所と相對して本校製作品販賣部がある。石鹼、牛鍋、火箸等山なす製品も片つ端から賣れ係員は目がまふ程忙しい。校庭では堀詰鈴木時計店寄附の高聲蓄音器を鳴らし休憩の人々を喜ばしてゐる。午後には少雨となりしも大盛況を以て第1日は終り22日も亦一般の縦覽を許した。

來賓は知事を始として縣會議員、學校長等で一般の入場者は万を以て數ふべく、人々の工業思想を啓發し、學校の内容を世間に紹介し一大成功を以て閉會の幕はおろされた。

(会誌10号より)

昭和元年頃の学校（回想60年より）

高本 薫 明（昭5機卒）

学校敷地は3千坪程度で、校庭で教練や測量等の授業や野球等の競技は出来ず、専ら公園の迂り山の下の広場を利用していた。

当時の学校は広い敷地では無かったが、合理的に配置された校舎や実習工場、木造であったが安定した茶黒色の建物、正門を入った砂利道、左右の緑の芝生、枝振りの良い松等の樹々、焼き丸太の杭に棕櫚縄を通して張った柵、芝生には白ペンキで塗った板に、KEEP OFF THE GRASSと書かれた制札が立ち、他校には見られない美しさと静かな雰囲気に包まれていた。

私達が入学した時は私立当時の校主竹内明太郎先生（父綱先生は大正11年11月9日84才で没す）依り、学校の敷地、校舎、施設一切が無償で県に寄付された3年目で、4、5年生は私立当時入学した生徒でした。

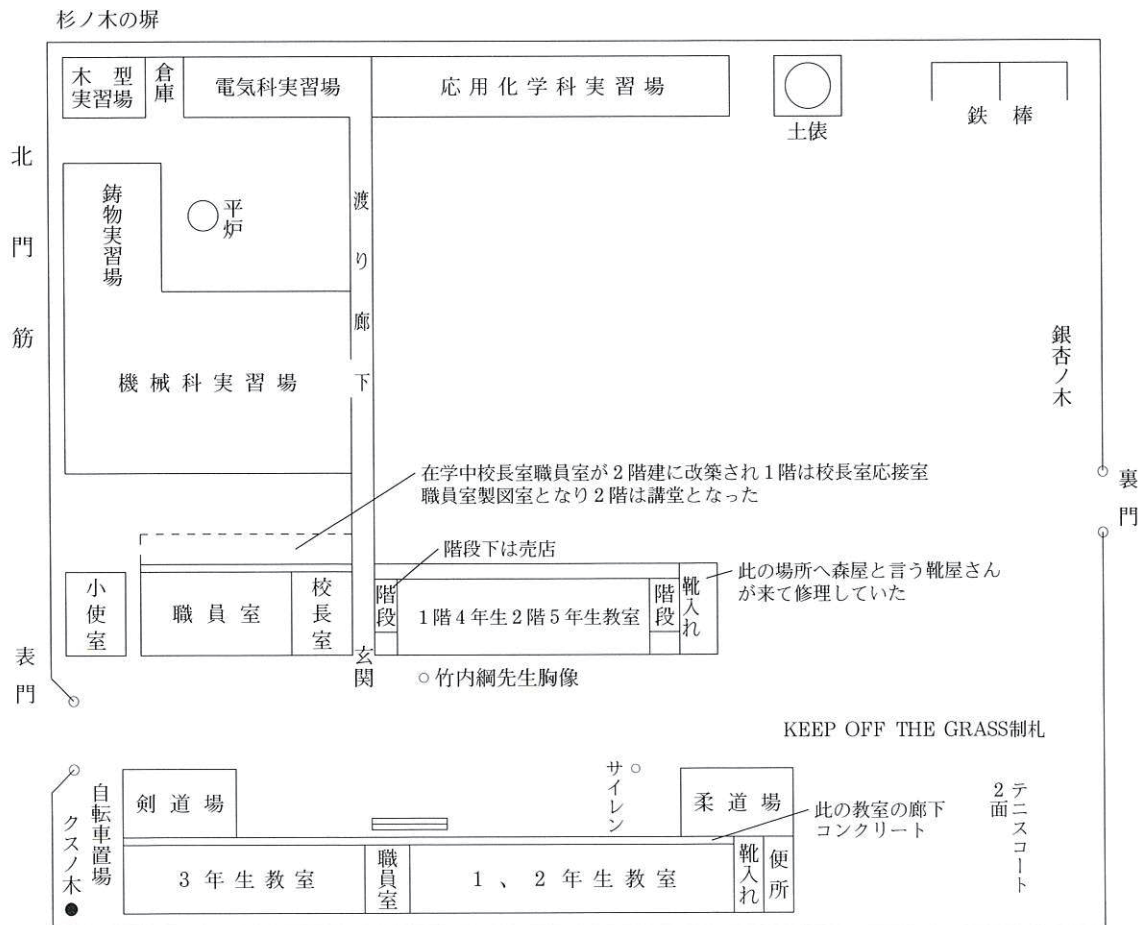
特に吉崎七次郎校長先生以下創立当時の先生が在職し、又先生の中に母校卒業生の多数の先生が居た事で、創立者竹内綱、明太郎両先生の建学の精神が其のまま遺り、生徒に対する授業も夫々の先生の個性が強く生かされていた。

竹内 綱先生は自由民権運動に身を投じ、自由党々首板垣退助の領しゅうとして、薩長藩閥政府と闘った「自由を重んじた精神」は学校では教師や生徒の人格を重んずることにあったであろう。

当時中等学校や女学校は映画館への入場や、夜間の外出は禁止されていた。然し高知工業学校のみは土曜、日曜日の昼間は映画館の入場が許され又夏休み中夜間10時迄外出が許されていた。作家菊地 寛の全盛時代で、彼の作品「結婚二重奏」や「第二の接吻」等が岡田時彦（岡田茉莉子の父）夏川静江主演で制作され、世界館で上映されたのを観た思い出がある。

学校は県教育課の指導、監督の許に在り乍ら、私立当時からのこれらの行動が許されていたのは、創立者の偉大さと共に、吉崎校長先生を始め諸先生方の人格、理解並びに学校運営の妙を得たことにあったと思われる。

青年期を迎える迄の多感な五年間、此の様な学校で、学業以外に種々な人生勉強が出来得た事は、80年近い人生を振り返りて真に有難く今まぶたを閉じれば、在りし日の北門筋の学舎、恩師や学友の姿など走馬灯の如く巡り思い出は尽きない。



周囲の塀の大部分は土盛の上に花が植えられていた現在県立高知女子大となっているが土盛の上に異なった木が植えられている。

学校の思い出

戸 梶 徳 喜（昭2電卒）

卒業以来今日（11月）で58年8ヶ月を経過しました。年月のたつ早さに驚くこの頃です。同期の皆様にも御無沙汰ばかり、

御元氣のことと拝察しています。大正11年4月、私立高知工業学校に入学したのは機械、電気、応用化学の三科で100名であったと記憶しています。そして翌大正12年4月県立となり、昭和2年3月同時に卒業したのは66名でした。名簿によれば現存者

は36名ようです。お互に自重自愛元気に過しましょう。

この頃昔のことを時々思い出しますが、当時学校は北与力町にあり、前には高知県立高等女学校（現丸の内高等学校）、横には私立高坂高等女学校がありました。その時代は男女交際は厳禁で、論語にある「男女七才にして席を同じゅうせず」の文字どおりでした。現在の男女共学、交際自由のあり方とは雲泥の差を感じます。

その後、昭和17年棧橋通に移転し、昭和23年学制改革により高知工業高等学校と呼称し現在に至っていますが、この間数多くの人材を送り出し、我国工業技術界に大きな貢献をしたと自負しています。これらは当時の先生方の適切な御指導と、在学生それぞれの自覚による結果と思われま

す。次に、私の在学中のことを現在と比較して述べてみたいと思います。それは学校の規則についてであります。ある新聞の投稿欄であったと思いますが、校則の中の服装について規制がきびし過ぎて全く自由がなく、この点についての規則は不用であるかのような意見を何回か見ました。私はこの校則不要論には生徒諸君のために全く反対です。私どもの在学中を振り返ってみますと、先ず制服がありました。現在も制服のあることは承知していますが、違うところは着用の状態です。私達は外出の際には制服制帽をきちんと身につけましたが、これは社会人となった場合、時と場所に応じ服装に留意するという習性をつける一つの躰けであると同時に、教室においては先生に対する礼儀と考えていましたので現在との違いを痛感しています。尚夜間外出、飲食店出入は男女交際とともに厳禁でしたが、映画見物については高知工業学校のみ土曜、日曜の昼間は自由で、他の学校は禁止されていたと記憶しています。当時として進歩的であったと思います。60年昔と今と全く同様な校則は勿論妥当でなく、時代の変転に応じ生徒の発達段階に応じた校則が必要だと考えられます。

私どもの在学中も、現在の生徒指導部と同様な役割をするものに監督室があったのを御記憶の同窓は多いと思います。私どもにとって監督室に呼ばれるのは怖かった反面この先生方に敬愛の念を持ったのも事実です。詳しいことは述べませんが、当時上級生の極く一部に下級生に対し、いやがらせをする傾向が若干ありました。現今ニュース等で報道されるような陰湿さはなかったのですが、下級生にとっては矢張り負担でした。それを知ってうまく指導し、そのようなことを無くしてくれたのが監督室の先生方でした。今でもその先生方のことは実名よりも、あだ名で懐かしく思い出し、年をとるにつれ敬愛の念は一層深まります。

以上憶い出の一部を書き綴りました。同期の皆さんも御記憶のことと思います。母校の発展と同窓の皆様のお健をお祈りいたします。（会報No.25より）

かえり み 想 出

石 本 鹿寿男（昭3機卒）

母校が来年で創立80周年、私が今年81才、まるで母校と共に暮して来たようなものです。

明治、大正、昭和、平成、と4代に亘りよくぞ堪えられてきたものと、感慨深いものがあります。

大正12年関東大震災の年に入学し、昭和3年3月9日に卒業しました。

当時浜口内閣の不景気な時代で就職もむつかしい時でしたが、校長先生始め担任の先生のお蔭様で大阪の藤永田造船所に就職することが出来ました。

当時は高知で就職すると云っても、県内での企業は土佐セメント会社と土佐電鉄会社に配電会社位で、採用人員も少ないものでした。さて赴任となるとこれが又大変でした。

飛行機は勿論無く、土讃線も開通しておらず（土讃線の開通は、昭和10年11月でした）唯一の交通機関は海上でして、今の棧五の電車終点の処から出ている汽船だけでした。

午後4時出航し翌日午前7時天保山棧橋着の800吨位の船でした。

3月26日同僚の杉本君と2人で上阪したのですが、不案内のため当初杉本君の叔母さんの家に厄介になることになりました。棧橋の近くとは聞いていましたが、なにしろ東京へ修学旅行に一度行ったきりで大阪も未知なものだから、船からおりと直ぐ棧橋で客待ちしていた人力車（人間一人を乗せて一人で曳いてゆく不経済な車）、自分達の荷物（柳行李）二個を積み込んで自分は一緒に歩いてついて行ったのでした。（当時ハイヤーは大阪にも少なく客待は殆んど人力車でした）

ところがなんとハイここですと着いた所は棧橋から200米位の所でした。

叔母さんから、あれだけ近いと云ってあるのにと、叱られたり笑われたりしたものです。

会社は木津川運河の電車の終点の向岸の住吉区にあり、会社のランチで迎えに来てくれますが、最終便が午前7時なものでから天保山から通うには毎朝五時起きで大変でした。そして朝5時から7時迄の市電の早朝割引、往復9銭を利用して通勤したのです。

日給は1円40銭でしたが、大阪は市営の食堂が発達していて朝食拾銭（大盛12銭）、昼は会社でパン（5銭）、夕食は拾五銭（大盛18銭）で結構暮せました。休日には時々散財したものです。

当時藤永田造船所は海軍の指定工場で、一年中駆逐艦ばかり造ってしまっていて、私達が入所して1週間目に駆逐艦むらくも叢雲の進水式がありました。生れて初めて見る進水式は感無量でした。又別に車輛部があり、大阪市電その他各社からの受託品を造っていましたが、勿論空気制動式で当時の高知のような鶴首式の

レーキではありませんでした。私はその車輛部に配属されて、1番最初の仕事は車輛設計図のトレースでした。

それから毎日毎日先輩のトレースばかりでしたが、6ヶ月程して、初めてプレーキ廻りの見取図を書かされた時は本当にうれしかったものです。

世の中が不景気で受注が少なくなり（造船部は年中駆逐艦専門に造っているので問題はない）、段々に人がやめてゆくので不安になっていた所、郷里の父母は長男の事だから県内での就職を希望していた所、丁度県庁に欠員があるから帰って来い、と云うのでこれ幸いと昭和4年4月18日退社し、翌々日20日に県庁に入り、昭和31年迄県にお世話になりましたが、現在は悠々自適、楽隠居になっています。



(顧問・技術研究部員とエアカー)

技術研究部

浜口身幸(昭3技機卒)(旧職員)

本校の技術研究部は昭和25年に始まり、モーターボートや蒸気機関車など動くものを多く製作した。高等学校産業教育生徒発表会には実業校始め普通校からも参加した。

弘岡農業高校の会場では「船外機の製作について」と題して発表をおこなった。設計についての計算式から製図工作と発表の後実演に移り、エンジンを始動し、スクリューの高速回転を見て、全員の拍手を浴びた。大方商業高校の会場では、ウインチの製作発表とWを吊っての実演、室戸水産高校では、エアカーの製作発表と実演をおこなった。演題の前に80キログラム以上あるエアカーを持ち込み接地面積から空気圧、原動機の馬力計算、製作についての苦心談まで発表をおこなった。実演となり発表者であり、部長であった梅原君が操縦しエンジンが快調に廻り始めると、暴音とプロペラーの音で講堂が裂けんばかりの音響となり参加者は総立ちとなった。その間を縫って滑るように走った。エンジンが停止して静まると共に拍手が沸き起こった。参加したどこの会場でも栄誉ある賞を受け、部員の足取りも軽く帰校した。

笑い話であるが、文化祭の前に生徒会より技研の方にエアカーで宣伝の為に街を走ってくれとの相談があった。警察は許可しないだろうと思ったが顧問の私が電話で話をした。警察はエアカーと云ったら自動車みたいなものかと聞くので、車でなくてプロペラーで胴体を浮かして走りますと答えると、それなら飛

行機みたいなものじゃのと云いますから、飛行機でもありませんと言うとそれならなぜよと又聞きます。私はエアカーですと答えましたら、そんなお化けみたいなものは街へ出されんとの答えでした。後で部員一同大笑い。(会報No.22より)

甲子園遠征記

富永豪夫(昭4化卒)

高知縣下にて覇を握りし我々野球部選手一同は東洋隨一を誇る甲子園にて南關東中學と戦ふ経過次の如し

高知工業先攻 第1回工業福田遊匍失に生き佐久間3壘前に絶好のバンドをすれば3壘手取つて2壘に投じたれど兩者生く別府遊飛すればグラウンド不なれの爲福田球を見誤り3壘に走つて重封され2死されど小笠原3遊間を抜く安打を放ち佐久間2進續く西村第1球を快打すれば中右間を抜き外野壁に達しホームランに償する大3壘打となり2者生還平井又遊匍失に生きて西村もかへり1擧3點を先取せり塩田遊匍して平井2壘に封殺さる

關中小林遊匍失に生き大塚の三振する間に2盜櫻井の3壘右の弱打は壘手バックして安打とし小林3進櫻井盜長島バンドして小林かへり櫻井3壘をオーバーランして3本壘間に挟まれしも捕手3壘に悪投し又その球を中堅手取りて本壘に高投しその間に櫻井長島長驅して本壘に入る倉田左飛和田右直失に生き海緑四球を撰びしも新山三振 兩軍3

第2回工業坂本2匍富永三振福田四球に出でしも2盜ならず關中小林(操)左飛小林遊匍大塚左飛 兩軍零

第3回工業佐久間1直失に生き別府の遊匍に2壘に刺されしも2壘手1壘に高投し別府2進小笠原遊飛して2死西村四球にて出でしも平井3匍す

關中櫻井中前テキサス2盜2壘失に生く長島の右翼大飛球に3進3壘高投に生還倉田3壘後テキサス和田左中間に本壘打し2者生還又3點を取らる海緑四球に出でしも2盜ならず新山遊匍 高工0關中3

第4回高工塩田三振坂本2遊間に安打富永3匍失に坂本2進福田の遊匍に坂本3壘に刺さる2死佐久間3遊間に安打し富永生還壘手の本壘悪投に福田長驅本壘をついて寸前に刺さる

關中小林(操)左中間3壘打されど別府の好投に小林三振大塚投匍櫻井飛して終る 高工1關中0

第5回工業別府遊飛後小笠原の3遊間抜き強打は左翼手トンネルして小笠原生還し1點を返す西村亦中前に安打し平井の遊匍失に兩者生き捕手の2壘悪投に走者3、2壘による然るに塩田三振坂本遊匍して好機を逸す

關中長島三振倉田投匍和田3飛 高工1關中0

第6回高工富永3壘後に安打福田1飛佐久間3振別府の3匍は壘手ハンプルして占めたと思はれしが球が走者に觸れ無爲

關中海緑三振新山遊飛小林四球小林中飛

| | | | |
|----|---|----|---|
| 關 | 中 | 高 | 工 |
| 4 | 小 | 8 | 福 |
| 5 | 大 | 9 | 佐 |
| 6 | 櫻 | 1 | 別 |
| 2 | 長 | 6 | 小 |
| 8 | 倉 | 2 | 西 |
| 1 | 和 | 5 | 平 |
| 9 | 海 | 7 | 鹽 |
| 3 | 新 | 4 | 坂 |
| 7 | 小 | 3 | 富 |
| 22 | 打 | 32 | |
| 4 | 安 | 8 | |
| 3 | 四 | 2 | |
| 5 | 三 | 4 | |
| 2 | 盜 | 1 | |
| 1 | 籠 | 0 | |

第7回愈々最後の攻撃に入る
 小笠原遊飛西村左翼右に痛打せ
 しが野手の好捕に倒れ平井遊匍
 失に生きしも塩田遊匍して平井
 2壘に封殺され万事休す6A對
 5遂に涙を呑む 時間の關係上
 規定により7回ゲームなり若し
 9回まで我々に戦はしめたなら
 ば……と思ふけれど是非なし
 兩軍のメンバー左の如し我々は

高知縣代表とし甲子園に出場しもちろんも豫選に敗れたのは我々が練習の至らざる所と深く自責の念に耐へない所である 願はくば之より後の選手達は一層勉勵せられまして高知縣下のみならず全日本の霸王となられん事を。 TheEnd

思い出の同窓生たち

坂本 龍雄(昭4電卒)

わが母校は明治45年5月4日に創立されたので今年はその80周年に当たるという誠にお目出度く思います。実は小生はその明治45年3月15日に高知市菜園場街で生まれましたので年を同じくするわけであります。実際は大正13年4月1日に県立となって間もない高知工業学校に入学し、昭和4年3月9日に卒業しましたので母校のお世話になってからは68年ということになりました。母校の思い出はご存知の方もあろうかと思いますが昨年亡くなられた澤本豊(昭4・機)さんの肝煎りで昭和4年卒業の同期の人々が寄せ書きした『回顧60年』という小誌に書きましたので今回は卒業後日本電力に入社し、その後日本発電電・関西電力を経て第2の人生を関西電気保安協会で過した時やその間1ヶ年の幹部候補生や支那事変・大東亞戦争と2回の応召の軍隊生活の中で出会った同窓生たちを思い出し偲びながらお話してみたいと思います。

昭和4年の春電気科を卒業し大阪の日本電力株式会社に入社しましたが、その前に行われた入社試験の時や入社後もいろいろお世話になったのは第1回卒業の岡崎(旧姓弘田)琢治(大6・電)さんでありました。またお宅が小生の下宿から近くであったので時々お伺いしてご指導頂きましたが同窓の先輩の有難さをつくづく感じました。岡崎さんは後年北陸の神通川水系の亀谷発電所長をなさっている時お休みの日にたまたま魚釣りに出かけられて川に滑り落ち不慮の死をとげられたとお伺いし大へん残念に思いました。

また当時野崎清寿(大13・電)さんは神戸変電所におられました。が或る日お会いしたとき『君たち後輩が入社してくることは大いに歓迎するがいずれ順番がくればこちらが追い出されるかと思うとまた違った感慨を覚える』といわれた言葉は後年小生もその年になってつくづく思い出されました。

そもそも日本電力は日本5大電力会社の一つでありましたが宇治川電気から分かれてできた会社で当時の大阪商船ビル(今の大阪ビル)の四階に宇治川電気、7階に日本電力と同居していました。宇治川電気には大元政一郎(電気科教諭・大6~大9)先生を始め松村幸兵衛(大6・電)、川久保友一(大15・電)、松岡茂喜(大15・電)、坂本重雄(昭2・電)さんなど多数の同窓生がおられました。とくに昭和6年4月からは愚弟龍市(昭6・電)が宇治川電気にご厄介になったこともありいろいろのお付き合ひがありました。或る日港区にあった大元先生のお宅にお伺いいたしました。これは野崎利光先生(工業学校には直接関係はありませんが小生の第三尋常小学校のときの恩師)のはからいで大元先生の縁者の娘さんとの見合いであったようではありますが、田舎者の小生は見事不合格でありました。

愚弟龍市は戦前は松村幸兵衛さん宅に下宿させて頂いておりましたし、昭和15年には支那事変の中支から帰り召集解除後松村さんの親戚の娘さんと結婚しました。しかし再び大東亞戦争に応召後昭和19年10月1日にブーゲンビル島のエレバンタで敵機の銃撃を受け戦死しました。後でもお話いたしますが小生はその当時はルソン島のマニラにいて毎日の空襲を受けており大東亞戦争の第一線は既にソロモン諸島から比島に移っていたのにと復員後戦死の模様を知らされ悔まれました。また小生は川久保友一さんに工業学校の1・2年生のときに野球部でしごかれましたが、愚弟龍市も同じ野球部で小生と同期の別府善治(昭4・電)さんにしこまれたようであります。

昭和5年10月に名古屋市の中川区にある熱田変電所へ轉勤となりました。柳行李一つを持って名古屋駅に着きますと田中重美(大15・電)さんが出迎えてくれました。田中さんは頭腦明晰なうえ大の勉強家で電検第二種もとられていましたがまたスポーツマンでありテニスを教えて頂きました。ご承知のように変電所勤務は3直交代制であり昼間に時間的余裕があるのでテニスなどは最適のスポーツでありました。軟式テニスでありながら田中さんはラケットのグリップをイースタンに握って剛速球を打たれていました。

昭和9年にこの熱田変電所に横田保徳(昭5・電)さんが轉勤してこられました。しばらくは同じ社宅で一緒に暮していましたが小生は間もなく岐阜変電所を経て大阪変電所に轉じました。それから1年半後の昭和12年8月に横田さんが支那事変に応召されましたので急遽小生にお鉢が廻り再び熱田変電所に戻りました。しかし引越荷物を全部取り解く間もなく26日目に今度は小生が朝倉歩兵第44連隊に召集されることになりました。

ここで軍隊生活における同窓生との出会いを振りかえってみます。小生は昭和7年12月から1ヶ年間納金制度最後の幹部候補生として朝倉歩兵第44連隊で暮しました。昭和11年3月在郷のまま歩兵少尉に任官した後さきにお話しました昭和13年9月に応召しそれから3ヶ年半満洲に駐屯しました。昭和17年1月

召集解除後電力会社は既に日本電力から日本発送電に変わりましたが名古屋の岩倉変電所を経て豊橋の玉川変電所に在勤中の昭和18年12月再び大東亞戦争のため広島船舶通信連隊に召集されました。それからニューブリテン島のラバウルに単身赴任する途中西カロリン諸島のパラオ島沖で海没して内地に引き返したり、再び渡ったルソン島の山の中で敵砲火をくぐりながら薩摩芋捜しをしましたが最後は山下奉文隷下の軍通信隊で終戦を迎え1年後の昭和21年8月末に比島から復員しました。

昭和7年12月に歩兵第四四連隊に幹部候補生として入隊した同窓生は古田正敏(昭5・電)、近藤豊春(昭5・化)、山本猛猪(昭6・機)、溝渕健吉(昭6・機)、朝山忠(昭6・機)さんと小生の六名でありましたがいずれも優秀な人々でありましたので全員昭和11年に少尉に任官しました。このことが良かったか悪かったかは別としても朝山・溝渕両少尉は昭和12年8月の上海上陸作戦で戦死し、山本中尉は昭和19年南方への轉進中に戦死されました。また近藤少尉と古田中尉は戦後他界されたので現在生き残っているのは小生一人であります。なお山中喜久雄(昭4・機)さんは昭和10年5月に朝倉兵營と一緒に見習士官教育を受けた戦友ですがその後軍隊生活を共にすることはありませんでした。また昭和13年9月からの満洲駐屯の歩兵第44連隊には前記の山本・古田中尉の他に永野(旧姓品原)要吉(昭6・電)中尉と船谷速雄(昭7・電)、野



同窓会(昭54. 3. 9)

村(旧姓正木)彰(昭8・化)少尉がおられました。とくに古田中尉とは同じ通信中隊にあって奉天・東安・虎林・虎頭と3年半にわたって苦楽を共にした仲であります。

昭和18年12月から2年にわたる船舶通信連隊応召中では部隊自体が全国大の特殊部隊であったためか同窓生との出会いは1人もなく、また終戦後1ケ年に及ぶP・W(戦争捕虜)生活においても同窓生に出会うことはありませんでした。

昭和21年8月に復員し日本発送電会社の玉川変電所に勤務しました。その後玉川給電所に在勤中の昭和24年1月に四日市の三重変電所長を命ぜられましたがこれは前所長の西村義雄(昭2・電)さんがご都合により郷里の土佐へお帰りになったための後任でありました。

この三重変電所が日本発送電の最後の勤務個所となり昭和26年5月からは電力再編成によってできた関西電力の東海支社へ移りここで藤本作重(昭11・土)さんと一緒になりました。もともと藤本さんも日本電力・日本発送電そして関西電力と小生と同じ経歴をたどってきたのでありますが、職場が土木と電気

の違いとそれに小生はこの間7ケ年の軍隊生活にあったためついでにお会いすることがなかったわけでありました。この東海支社で小生が給電課業務係長をしていたとき隣の電力課工事係長に筒井幸男(昭16・電)さんがやってきました。役職会議などには一緒に出席していましたが昭和33年春に小生が胸を患い自宅療養中に見舞にきて呉れて頂いた瀬戸焼の銚子一対は今も愛用しています。それから10数年後小生は電力利用合理化の診断指導のため各所を廻っていましたが或る日京都支店長となっていた筒井さんにお目にかかったのが最後となりました。その後東京の電気事業連合会に向向されていましたが病のため亡くなられたとのことで誠に惜しい人を失ったものであります。

昭和42年3月に関西電力を停年退職しそれからは以前から出向していた関西電気保安協会に引続き勤務することになりました。ご承知のように電気事業法では自家用電気工作物の維持運用などのためには電気主任技術者を選任しなければならない定めとなっていますが1000キロワット未満の中小企業においてはその経済負担を軽くするため電気保安協会(組織)とか電気管理技術者(個人)に委託する場合は電気主任技術者を選任しな

くてもよいことになっています。この保安協会にいたるときにお会いした同窓生は小牧信猪(昭2・電)、伊藤津(昭3・電)、堀武重(昭3・電)、横井忠義(昭20・電)さんであります。これらの人々は第二の人生の仕事として自家用電気設備の保安

業務を選んだものでありますがそのためにはまず保安協会に入りそこで保安業務の実際を習得しそれからは電気管理技術者として自立していったものであります。ただ1人中内雅夫(昭17・第2本科)さんは今も現役で関西電気保安協会にて点検係主任として活躍しています。

電力利用合理化の診断指導に廻っているときに訪れた奈良レース会社の社長は高田(旧姓山崎)健次郎(昭7・化)さんでありましたし、労働安全コンサルタントとして堺市で電気安全について講演したときにお会いした野村渡(昭2・電)さんも思い出の同窓生であります。

最後に同窓会支部の総会で出会った同窓生たちを思い出します。まず東海支部であります。小生は東海地方には前後7回出入りし通算12年も在住しましたので思い出の人々も多いのであります。東海支部は前田治郎(大8・電)さんを大将に中部電力勢が主軸でありましたが高橋収司(大14・電)、橋本茂樹(昭3・電)、土居(旧姓小松)健作(昭4・機)、高西正男(昭4・電)、辻久良(昭12・電)さんなどが思い出され、そ

の他の会社では安岡要（昭4・機）、森木丈夫（昭4・電）さんであります。

大阪支部では戦前は最初にお話しました宇治川電気が主体であり松村幸兵衛、川久保友一、松岡茂喜、坂本重雄さんらがおられその他の会社では大浜芳之助（大13・電）、北村連（大14・機）、衣斐勝（大15・機）、津田（旧姓多田）五郎（昭3・機）、藤戸増照（昭3・電）、川村陸（昭5・電）さんなどでありませす。また同期（昭4）の人も多く枝重（旧姓岡本）定（電）、西村忠雄（電）、米沢実（電）、山中寿（電）さんらがおられ母校在学中の話に花を咲かせたものであります。現在は吉岡利雄（昭24・機）支部長の元で山本延美（昭4・化）、安岡一郎（昭5・化）さんたちと年1回の同窓会総会の集りを楽しみにしています。

人は生きるのではなく生かされているのだとよくいわれますが振り返って先輩・同僚そして後輩の人々のご指導、ご援助によって今日の自分があると思えば数多くの同窓生が思い出され、またその時々^の出来事も懐かしく偲ばれ敢えて拙文を母校80周年の記念誌に投稿する次第であります。



戦時中の思い出

永瀬 邦 男（昭5電卒）（旧職員）

私は昭和13年から昭和19年迄母校に奉職した。当時市内の田園を流れる清流久万川で蝦^{えび}を釣っていたのを松本政良先生に見つけた。「学校へ遊びに来んか」と云われて思わず「はい」と返事したのが私を母校の教壇^{えん}に結びつける縁となった。これより先、私は海軍の燃料研究プラント建設の1年近い突貫工事に働いた過労が災いして東京で長期療養し、その頃は健康を殆ど回復した状態にあった。

^{ていしん}逋信大臣から許可された東京の私設無線実験局を移して高知県で最初の実験局J 3 G Yを設備した。晴天には魚釣、雨天では自宅の2階で無線の実験をしていた。同期の八百川長作君が毎日新聞の「ニッポン号」に同乗して長途決行の際アマチュア無線と航空無線とは周波数帯域が全然異なるにも拘らず「長さん頑張れ」とか書いて写真入りで新聞に掲載されたり、愛国無線通信隊の一翼として、大阪（師団司令部内）、和歌山、高知の連絡三角網をつくったのもその頃である。

やがてなつかしい北門筋の校舎で奉職し始めた。共通学科の

恩師は宮地豊喜先生始め殆ど御健在でした。辞令を戴いた当初からこの恩師達から「永瀬先生」と呼ばれて本当に恐縮したものである。生徒は出身小学校の優秀な人材のみ志願し、しかも3倍近い志願率であったので理解力も強く教える側は楽であった。

最初は数学や物理を担当したが、次第に電気関係が占めるようになった。

物理担当の頃旧制高知高校教授が視学官として来校視察された。相対速度の講義の際に教科書の挿図の誤りをついでに指摘して置いた。

後で全般講評の際これを特に評価された。これが同教授の御面識を得て、中等教員による高知物理化学学会創立のきっかけとなった。

その後今はどうなったのかと思う。

若輩の私は講義の内容を正しい理論で判り易くを理想と考え、思考努力した。私は落第点を付けるのが嫌いであった。勿論その生徒にも反省すべき点もあろうが、殆ど教師に責任があると信じて居たからである。例えば三相送電でも電力は電線が二本あれば充分なのにわざわざ3本にして、しかもこれが経済的であることを解説するのに種々な方法が考えられるであろう。共通学科の数学の進度を睨みながら考える必要もある。数学は工業学校では中学5年程度を4年で終了し、5年になると旧制高校1年の微積分初歩位迄つまり5年間に6年分を教える必要があった。

他方大陸戦線は否応無しに拡張されていた。それに伴い工業技術者の要求は急増した。

第2部として機械科（中学卒を入学資格）が1年制で創られた。やがて高小卒を入学資格とする所謂乙種工業が第2本科として先づ電気と化学が増設された。第2部は廃止されたが、第二本科は更に機械が増設するなど長く続いた。私は授業を持たないその電気科の主任を命ぜられた。そのクラスと私が接触するのは毎月1回神社への行軍参拜の時である。彼等は2年の短時日で一通りの工業実科を習得する爲可成り努力しなければならず、又一面遊びたい盛りでもある。当時は校内のどのクラスでも若干の学科落第生があり、各期末職員会議で合評検討することになっていた。私のクラスでの一学期末若干の落第点者が通報されていた。通知簿を渡した後、1人宛別室に呼んで夏休40日間を如何に過すべきか、この40日間が如何に重要なのか訓えた。

遠隔地出身者が居たので休み中の家庭の状況も聴く必要があった。「今度は必ず頑張ります」と涙を流す子も居れば、突然土下座して「済みませんでした」と謝まる子も居た。私は次の学期末を待ち望んだ。「努力と団結」を行軍の時の合言葉にした。お互が教え合って実力をつけよう。これが私の願いでした。

2学期末の職員会議で私のクラスの番になって「1名も欠点

者無し」と報告すると宮地豊喜先生がスックと立って例の眼をクルクルさせて「私は本校に長く奉職するがこの様な例は珍らしい」と過分のお誉めを戴いた。私は嬉しかった。「クラスの皆よ。君達の毎日の仲良き努力が報いられた。第2本科の君達が頑張って学校1のクラスになった。」私は心の中でこう叫んだ。教師の冥利である。このクラスは対抗行軍競争でも優秀な成績を取り卒業後更に本科に編入された者数名あり、更に進んで上級専門校に学んだ者も出た。自分の人生の大切さを自覚したからであろう。

校舎は狭隘を極め、現在の棧橋通りに新設拡張され、やがて新校舎への引越が始まった。

机や椅子の如き軽量ものは生徒自身で運んだ。工作機械やモートルの如き重量物の持ち出しには附設工業青年学校の生徒が小人数ながら頼みしい存在であった。全く新粧の校舎や工場。野球もできる校庭。3倍程に拡張の敷地。生徒は希望に燃えた。しかし大講堂は設計図のみに終わった。戦後撤去されたが神社型式の建物が各地の役場や学校に新築されたが、この講堂の予算は削られた。運動場の砂場の砂は海浜へ行軍して生徒各自のランドセルに入れて運んだものである。

戦況は更に激烈となり、大陸に海洋に延び切っていた。生徒による麦刈奉仕が始まった。これは農校生徒に最適のテーマである。婦人部隊でも良い。しかし赤い袴の愛国婦人会と白い袴の国防婦人会に日本は二分されていた。總裁や会長の名前や肩書きを見て歴史で学んだ公卿政治と武家政治が脳裏をかすめた。何故日本婦人会として団結できないのか悩んだ。

麦刈が終るとこんどは田圃の泥んこ工事である。元來6年分を5年間に圧縮している工業課程を突然卒業を3ヶ月短縮せよと云う。何の爲の工業教育か？更に世間では大学の学徒動員が始まった。国民は員数化され始めた。特技無視の政治に思えた。工業技術者は工場を、農業者は農地を、本職の軍人は戦線を合理化して皇国を死守すべきでは無いかと思った。

かねてから私は大阪大学に転任している恩師から戦時研究としての電磁波回路研究を手伝って欲しいと再三懇望されていた。戦況はここで私に再び軍事研究に頑張る決心をさせたのである。後髪を引かれる思いもあったが、森本校長に辞職願をやっと提出して単身赴任した。再び残業に次ぐ残業の今度は一技術戦士としての生活が始まった。私は最早や命懸けの生活であった。負けたくなかったのである。

開校80周年に寄せて

吉本 修(昭8機卒)

振り返ると突っ走って生きて来た過ぎし日が此の間のように思はれますが卒業してからもう半世紀を越えました。

在学の頃の思い出の糸を手繰ってみることにいたします。旧校歌の一部。

鯨鯢吼ゆる南溟の

怒濤逆巻く快天地

万岳の翠北に負ひ

ここに生れし健男児

雄、雌の鯨のラブシーンに躍動を覚えます。「男、女、7才にして席を同じくせず」の風潮の余韻の中の時代を背景にして想うとよく思い切った表現をしたものと感服……………「ここに生れし健男児」痛快極まる次第。

剣道の先生に川崎善三郎範士がいた。耳が遠く髪の毛が一本もなくつるつる頭が鏡のように光っていた。70才をとっくに過ぎてかくしゃく嬰鑠としていた。

打込むと柳の枝のように受け流され一向に手応えなく暫時に疲れてしまいました。先生は明治、大正、昭和の3代にわたる名剣士、三郎三傑士の一人です(高野佐三郎、高橋超太郎)。

昭和7年、5年生のとき京都の武徳殿で試合があって出かけた。祇園祭の最中で街の賑いみやび雅やかな鉦をみて驚きました。京極で武徳と書かれた黒塗の扇子を買い持っていますが開ける度に往時が偲べれます。

試合は初戦を3対2で勝ち2回戦は2対3で負けました。相手校は福岡県下で優勝した学校だと後からききましたが校名は忘れしました。

メンバーは先峰から順に、北岡厚(化)、野中進(機)、佃博(電)、永森成男(化)、吉本修(機)の五名に補欠に松岡勝猪(機)と記憶しています。坂本土佐海先生が薙刀の講習会で御見えになっていてよくやったと慰めてくれました。私は幸にも2回戦共勝ちました。

旅館で川崎先生と対座して倒してみよと言はれ胸を思い切り突きましたが微動もしなかったことを覚えています。次の一瞬に私の体が浮いて足が天井に向いていました。1回限りとどうしても受付けてくれませんでした。

あるとき道場で「リス」の話がありました。某師が自分の後を継がせるとき優劣きめ難い2人の高弟がいた。目の前で「リス」が遊んでいるのを見て2人を呼び掴まえた者に継がせたいと提案、誰れが継ぐことになっても争ふのではない、互に助け合って仲よく暮らすことを誓はせた。1人は抜刀して追いかけたが、……1人は静かに近づき手に乗り移った「リス」を師の前に差出したと……吠えない犬でも心次第で吠えるものだとも言はれました。更に

憎しとて 打つにはあらず 笹の雪

春が到来すれば踏みつぶされていた笹は太陽の暖かい光で雪が消えてもとの姿にもどるものだと……

切り結ぶ 大刀の下こそ 地獄なれ

踏込み見れば 後は極楽

この31文字については理解するのに難つかしいと思はれたかどうか判りませんが覚えておくことだと申されました。「後は

極楽」深い意味がありそうです。生死一如の境地か……種々の受取り方があるかと想はれますが、凡夫の言ふものでなく懼れる。又剣は裾で使えとか……含みのある御教の言葉が印象に残っています。

昭和20年の記録

樋口 晃 一 (昭8電卒)

昭和20年8月大日本帝国ポツダム宣言受諾。私はその時関東軍直属の築城部隊の一員として南新京に居たが、ソ連参戦と同時に朝鮮近くの虎林まで退却しその地で終戦を迎えた。どうなることかと思っていたが、運よく最初でそして最後の軍用列車が出ると云うのでそれに乗った。目的地の奉天は暴動があったと云うことで治安が悪く、家族の居る撫順駅から1里余り手前の撫順城駅で止まってしまった。皆疲れており列車が動き出す迄駅で寝ようと云う者が多かったが、この附近にもソ連軍や八路軍の近づく気配が感じられ、私は歩いて帰ることを主張し1人で歩き出した。他の者もそれを見て決心したようにそれぞれ家族の居る方向に歩き始めた。私は数人の仲間と撫順まで行き、たまたま駅前にいた馬車に乗って自宅にたどり着いた。家族達はまるで奇跡でも見るような顔で私を迎えた。

ほっとする間もなくソ連兵が撫順にもやって来て、朝鮮人の小学校と日本憲兵隊とに駐屯した。この頃は各地で相次いで中国人満人の手による暴動が起き8月22日には我々の町も暴民に取り囲まれた。2、3日前までは日本の警察が健在で自力で暴民を追い払った町もあったが、日本人にそのような余力が残っていることを知ったソ連軍は「日本人の手で取り鎮めよ」と言っておきながら、日本人警察即時解散を命じ我々を暴民のなすがままにさせたのだった。彼等の掠奪が始まってから隣組13家族は私の家の前に座り込んで、ただ呆然として成行きを見守っているだけであった。夕方になると暴動も静まり皆で公会堂に避難したが、町は台風の後のようにただ紙屑が散らばっているばかりで人影も無く静まり返っていた。

それから約10ヶ月にわたり家族や、行動を共にする数人の者達と暴動にあわなかった友人の家を訪れたり、暴動で壊された家や倉庫の2階等転々とし、最後は本願寺の本堂に落着いた。

その頃には銃を持った八路軍の兵士が意味もなく家の中に入ってきて来たり、ソ連兵に呼び出され何か云えば銃殺するぞと脅かされる毎日が続いた。中にはソ連兵に呼び出されたまま帰って来ない人達も居た。そして又2度目の暴動に見舞われ友達からもらった僅かばかりの物まで奪われた。当時衛生環境是最悪であり妻と子供1人を除き次々に発疹チフスで倒れた。手足に力が入らず高熱にうなされ皆意味不明のことを口走るばかりであった。十分な手当もないまま全員が回復出来たことは奇跡としか思えない。私が元気だった頃は電気の配線工事のような仕事を見つけ、僅かながらも収入を得ることもあったが、病気で倒れ

てからは仕事も出来ず又そのような仕事も少なくなってきた。

翌年の春を迎える頃には、今年もまた冬を越さなければならぬようなら、皆で水遊びをしたあの運河に家族共々身を沈めようと覚悟を決めたことだった。同郷の者からもらったオーバー等、もう2度と使うことのない冬物を売っては毎日を通した。人間が安住の地を求める心がこれ程までに強いものだと言うことをこの時初めて痛感し、同胞の受けた不幸や屈辱さえ我が事のように感じるあの連带的苦痛、あの精神的圧迫感は忘れることが出来ない。

結局はその年21年6月12日第2回の引き揚げで故郷に帰ることが出来た。当時を振り返りあの惨状の中で取り乱すこともなく、時には笑い声さえ聞かれるゆとりもあったことを思うにつけ、あの戦争であらゆる物を失なったが、日本人としての誇りを失なわなかったと云うことが窮地を切り抜ける力の源であったと思う。

この記録は今年3回忌を迎える妻(寿枝)の書き残したものに拠っている。

記念誌に寄せて

尾崎 晴 光 (昭8土卒)

昭和3年、当時の日本は未だ世界の弱小国であり不況に喘いでゐた。小学校を卒業し、中等学校へ進学出来ることは有難いことであった。

高知工業学校に新しく土木科・建築科が加わって生徒募集があった。偶々「時局匡救事業」と云ふ名目で近くの鏡川堤防工事が施行中であって不況の時に困らないとの父の意見に従って土木科を受験し、合格出来た。

当時の高知工業学校は北門筋(現高知女子大の位置)にあり、5年制甲種の工業校として全国的にも優秀校とのことであった。

学制は1・2年生は普通科目で全生徒混合で3クラス編成、3年生になると専門課程へ入る。振返ってみると1・2年生時代の仲間意識が良い結果となり、科別の狭い枠を越えて生涯交友を深めることが出来たと思う。

入学して面喰ったのは半分位の生徒が年長で高等小学校を経た者であり「オンチャン」に近い感じがした。他の課目はさして遜色は感じなかったが、英語の時間に小学校では全然習ったことがないのに「オンチャン組」が黒板にサラサラと横文字を書くのに啞然として驚ろきと焦りさえ覚えた。当座は英語が最苦手であった。

土木・建築科は第1回生と云ふ訳で「吉崎七次郎校長先生より特別の訓示があり、在学中も屢々全様の意味で激動を受けた。

工業学校は卒業と共に就職する為在学中の成績より以上に「皆勤」をするよう指導があった。同じクラスの樋口兄の下宿が上町1丁目にあり、体の小さい私が旭から歩いて途中で寄り一緒に通学したものだだったが、よく遅刻もせず、他に取柄もな

い私は只管眞面目に通って「皆勤賞」を貰った。蟻の如く生涯を働きとおした素地がここにあった？

卒業して当時は職を外地（主として朝鮮・満州）に求める者も多かった。私もあとから朝鮮に赴任したが直ぐ兵隊にとられ、再度の応召を含め足掛け8年間外地に転戦し、終戦後1年経って漸く帰還することが出来た。

長い従軍での「マラリヤ」養生のためブラブラして居たところ、12月21日の暁に「南海大地震」が発生した為に戦災を含めての郷土復興の仕事に従事出来る機会を得て、高知県土木部に任用された。

戦後は御互に自身の子育てやら仕事に追われる毎日で昭和30年代は特に慌しく過ぎていった。

昭和40年を過ぎた頃か、有志の呼び掛けで高知工業同期会が発足し、卒業年次に因で「八会」と名付け会長に電気科卒で光電機社長の樋口晃一氏になって貰った。

爾来毎年1回集って旧交を温めている。

我々の年代は青年期に支那事変・大東亜戦争と続いた為仲間にも多くの犠牲者が出たこともあり生き残りが少ない。何故か比較的優秀な者ばかり死んでいった。

数年前の「八会」では北門筋の懐しい学校の跡・辻り山など徘徊して昔を偲んだ。夫々風格のあった恩師の面影・狭い校舎・運動場、想い出は盡きなかった。

母校が80周年を迎える時、恰も我々「八会」のメンバーも80才に近くなってしまった。折角生き伸びた割には左程お役に立ってず恥しい想がする。

最後に母校の益々の発展と皆々様の御多幸を祈って稿を終える。

「前代未聞」教室での胴上げで右足首を骨折された私の運命！

池上 実(昭9機卒)

それは、忘れもしない、昭和8年2月27日の朝、その日は雨だった。

「お早う」と教室には入った途端、パッと黒いマントが私の顔にかぶせられた。当時5年生は試験も終り、3月9日の卒業式迄、登校して来ない、いわゆる最上級生として、我等4年生の天下「若人の意気の解放」とかで休み時間には、よく此の胴上げが行われていたものでした。断っておきますが、当時の私は、こんな胴上げには1回も加わった事も無く、おとなしい、唯、「むくり」眞面目一点張りの優等生でした。

その私の身体が、教室の天井

近く迄、何回も何回も放り上げられている内、嗚呼！何たる事ぞ！「コラッ！」と云う大きな怒声と共に（後記）床に、たたき落されたのであります、その瞬間、「ポキン」と云う、自分にも分る、にぶい音と共に、身にしむ激痛！、「いかん、骨が折れた！」と右足首をかかえてしゃがみ込んだ私に「何？骨が折れた、阿呆云え、俺が治しちゃう」と私の右足首を両脚にはさみ込んで引張る柔道部のA君も、余りにも「眞」に迫った私の悲鳴に「こりゃ、いかん、おうごとじゃ、折れちゃうぞ！早よう先生所じゃ！」と学校から程遠くない「M先生宅」（昨年迄、私達工業の柔道の先生をして居られたお方で、師範学校に轉ぜられ、お宅で骨折の治療をもされていた）えと、小雨降る中、級友に背負われて、くぐった先生の御宅、玄関脇の雨に濡れた満開の白い梅の花が、印象的でした。

「一体、どうしたんだい、池上君とも有らうもんが」といぶかる先生に、「それがそのう、皆が勝手に僕を胴上げて、放り落されて…」とはどうして云えましょう、「若し胴上げて」と学校側に知れたら、多くの級友は処罰（停学、謹慎？）嗚噫！

私は既に、級友達の説得で「教壇からこけた！」と云う事にさせられていたのであります。

「まあまあ運の悪い時にはねえ、あんな低い教壇から、それにしても池上さんは、よっぽど人望がお有りで、こんなに多勢の御見舞ひ、ふだんなら、級友さん1人か2人位しか付いて来られませんがにねえ」としきりに慰め下さる奥さんの御言葉にも、何か割り切れない思いの私でした。こんなわけで私は先生の御宅に入院と云っても下宿、むしろ、先生の御家族の一員と云った感じの約50日間を送る事になったのであります。

朝夕の登下校は、級友の背に負われて（今なら車椅子か）当時、北与力町の母校の正門は、県立第一高女（紺のスカートの裾に、白線の1本は入った県下第一の名門校、通稱、「ワン」現、丸ノ内高校）と向い合せに有り、右足首は包帯で眞白、級友の背に、騎馬戦の「どん馬」の格好で通学する私の姿は、女学生達の注目の的であった事とごさいます。

当時、先生の御宅には、その名門、第一高女の3年生、1人娘のお嬢さんが居られ、度々、奥さんに代ってお膳を運んで下さるその慎しまやかな彼女と、妹を持たない私との、「淡き想いを知り初めて」いわゆる一生一代、初恋の花咲く「ロマン

ス」「プラトニック・ラブ」は卒業後も、続いて！之も又偏へに骨折のお陰げでもありました。

「註」、級友の皆が思わず手を放したのは、他意は無かった。当時私達生徒間で1番、恐れられていたゴリの宮地先生（体操、風紀担当）の声色で、後からは入って来た級友の1人が「コラッ！」



と、どなった大声に驚いて手を放したのが原因で有ったとの級友の告白を今も尚、信じて居ります私なので有ります。

それにしても、「此の世に、神も佛も！」と一時は嘆き悔んだ此の骨折が、私の一生、運命を変え、命、永らえて今日迄では、当に「人間、万事、塞翁が馬」本当に分らんもんでございます。

後年、勃発した「日支事変」に朝倉歩兵第44連隊に応召、入隊、関東軍の1兵士としてソ連国境「虎林」(敗戦の20年8月、ソ連軍が真先に攻め込んで来た要衝)に従軍、折角の幹部候補生としての受験を蹴った私、骨折、2ヶ月間の教練見学の私に対する当時の配属将校、教官、前田大尉の査定は、きびしかったので有ります。「偉うならいでもええ、生きて帰れ」との母の言葉、「若し私とその幹候を受験、合格して「エライテ」いわゆる将校になり「サーベル」をつり、闊歩していたら、恐らく、弾丸よけの第一線、哀れ、護国の華と散る！若しも当時の高等工業(今の大学)に進んでいたら(私の母は、盛んに進学をすすめてくれていましたし、その頃の我が工業の1番は、無試験で神戸高等工業、今の神戸大学に入学出来たと聞いて居ります)或は特攻隊として散華していた事かも分りません。

こんなわけで、此の私の右足首骨折は、私の一生に重大な影響を及ぼした事は事実で有りまして、今の世の中、現代では恐らく

「教室内の胴上げで足の骨を折られた」

「学校の教育、指導、管理はどうなってるか」

「責任者、主謀者の処罰！」

「治療費、慰謝料〇〇〇万円よこせ！」と

マスコミも黙っては居りますまい。

当時、母子家庭の苦しい中から、弟(全じ工業の2年生)と2人も、この名門、高知工業(入試は県下一の難関でした)に入れて、くれていた私の母、信心深い母は「実よ、人様を恨むんじゃ無いぞえ。」「手を放した級友達の身にもなってみいや」「南無まいだ、南無まいだ」と、ひたすら「ピッコ」にならんよう、祈っての母、「学校に訴えを！」といきまく、3人の叔父達、保証人のTさん(県下第一の学校関係、家具製作会社の社長、学校にも相当、顔が利いた)方の発言を抑えて、学校当局には一言も！沈黙のままでもございました。

以来、早あれから58年、あれも、これもと、そこはかない想い出の数々！「胴上げ骨折！」償いの友情に背負われての「5ヶ年間皆勤！」芽生えた初恋のローマンス！」之も偏えに、天なる神様、御先祖、皆々様方のお陰げ様と、当時の級友、同期の25名(半数は既に逝った)、胴上げ組の？、彼の、面影を偲び、懐旧の念、しきりの私でございます。

ちなみに、この骨折の激痛(やったもんで無けりゃ分らん!)にも屈せず、治療の約1時間を欠席したのみで、驚く級友達を説得、すぐ教室に戻って授業に出た私。曰く、執念の「5ヶ年

間皆勤賞」(桂浜近くの長浜から、自轉車で往復27キロ)、舗装の無い凸凹道を風雨をいわず、よくも頑張り通したのものよ！」

と今も尚いささか自負する私なので有ります。

平成3年10月20日 深み行く秋の夜

58年前の母校、級友のあれこれを偲びつつ記す。母校に榮え有れ！

今だから話せる在学秘話

今原 旭(昭9化卒)

昭和4年3月、巷には「君恋し」のメロディが流れて居た。「同じ行くなら高知で1番むつかしい学校へ」と父が勝手に決めたのが当時北与力町にあった高知工業だった。赤い屋根に白亜の外壁、2階が講堂で当時としてはモダンな建物が唯一の鉄筋、我が化学科は北校舎2階の最東端、三方を窓に囲まれた最高の明るい教室だった。階下の入口に髭の濃いお人好しの靴屋のオッサンが、毎日リヤカーを引いて来ては、軽い靴修理の音を響かせて居た。

父の雄大な期待に反し第3志望の応用化学科に辛うじて合格番号を見つけ、胸に5つの金釘、先ずは新品1年生の誕生となり面目を保ち得た訳だが、化学は科学にも通ずる創造力、思考力涵養面の原点となり、後年会社で受けた諸種の幹部教育をも咀嚼し得る基盤ともなって悔は無い。第一高女(現丸の内高校)と向かいあった正門をくぐり、玉砂利の道をザクッザクッと心良い感触を靴底に感じながら登校したのが若き日の北門健児達だった。

郡部の2部教育(低レベルとは思わない)の小学校からだった私は英語が初見参で戸惑い、1学期の成績は惨憺たるもので、父が呼び出しを受け、当時永国寺町にお住居の渋谷正太郎先生のお宅へ、夏休み中日参した。化学科定員は20名位だったか？卒業したのは17名、うち現生存者10名は立派と言える。教科書の譲り受けをしていた先輩が留年し、譲ってもらおう相手が居なくなって困った事もある。貧しかった当時の世相を反映した習慣で、父兄も学費の合理化で随分助かった筈、進級は厳しく2、3回の留年者も居た。目標は質実剛健、冬季ズボンの両サイドのポケットに手が入れられない様、縫い合わす規則になって居たが、賢明なる諸君はホックにして澄ましていた。そして私もその1人だった。

2、3、4年生とお世辞にも好成绩とは縁の無かった私が、3年から入部した籠球部活動のハンデがあったにも拘わらず、5年生になるや俄然目覚めた獅子の如く、頭角を現わし苦手の英語で97点取る等飛躍的に成績アップし、先生方の注目の的となったとか、所謂勉強のコツが、ノートの取り方が分かったのである。尚この私の異常な迄の成績躍進の陰には、下宿の私の居た2階と広い田圃を隔て、向かい合った家の2階に、下宿して居た女学生の、凶書を贈って呉れて迄の激励のせいも無かつ

たとは言えない。時刻を決め、時には2階から懐中電燈で信号し合って、通りすがりに手紙を交換するのが精一杯の逢瀬だった。就職祝に届いたネクタイ、そして数年間続いた文通、恋と言うにはあまりにも儂いほのかな思慕の情だけに終わった淡い青春の夢だった。在学5年生時に咲いた唯一のロマンの花、彼女は今何処に、そして健在なるや？

3年生の時籠球部に入った。放課後残ったの拍手の応援練習が嫌だった事と、「右手が長くなるから」と入部勧誘を断った庭球部と異り、全身運動であった事も動機の一つだった。当初ガード、5年の新チームになってセンターの池添君とコンバートし、池添君はフォワードえ、この宮地先生(部長)の着想は成功し、戦力が飛躍的にアップした。そして急激に力を付け浮上して来た農業と激しく拮抗、秋の県下大会ではシーソゲームの死闘の末惜敗、両校共その疲れで漁夫の利を得た宿敵師範に敗れ、先輩が維持し続けた2位の座が守れなかった。大会終了後冬のスポーツ、サッカー部のゴールキーパーに転じたが、レベルは最低、試合中常にボールが味方グラウンドから去らず、誠に情けないキーパーに終わった。

入学当初は梅の辻の母の里、以後新田、追手筋南、中水道、江の口と高知市を南から北へ転々と縦断して下宿が変わった。下宿と言っても飯米は持参し、毎日5合宛、一緒に炊いてお櫃に分けてもらい、副食物は買いに行く方式で、当時完全給食だったら月15円位と記憶している。追手筋南は土佐高女の真南、狭い路地を入りこんだ裏町で、小さな2階建を1戸借り、新田で同宿だった市商五年生相撲部主将のMさん、私と同じ2年生のH君との3人で自炊生活を始めた。路地を隔てた向かいの平屋がチンドン屋の親方の家で、毎朝仮装した面々が集って来ては、ひとしきりチンドンンドンの練習をして出かけて行く、その遠のいて行く音に郷愁をそそられた。いつ頃からか野村デパートの若き姉妹が同居する様になり、男ばかりの家に時ならぬ脂粉の香りが漂い始めた。Mさんからどの様な説明があったか、又どの様な関係だったか全く記憶に無いが、姉は美人、妹はまだ幼なかった。特に違和感も感じなかったし、大人の創造する様な世界は考えられ無かった。勿論炊事は手伝って呉れたし、物質的援助も受けたと思う。田舎の村で「自炊とは感心な」と誉めそやされて居ると聞いて、内心くすぐったかった。Mさんの卒業で解散し自炊生活にもピリオドを打ったが、男女7歳にして席を同じくせずとか、若し学校に知れたら大事とは今思う事である。それにしてもMさん達結ばれたらどうか？程なく始った戦禍、あの体軀では軍役は免れない筈、果して健在だろうか？

在学中の思い出の中での圧巻は、32名の工業生が各人米俵1俵ずつ担いで、天満宮から追手筋の聯隊区司令部迄1列縦隊でパレードした事である。「工業学校の生徒じゃ」と屋根から飛び出して来て見送る市民の声を背に意気揚々、長蛇の列は街を練り歩いた。実は先年焼失した潮江天満宮の改築竣工祝の「俵

奪い」(現金の入って居る鞆の俵を櫓の上から投げ、各グループ毎に自陣に引張り込む)に参加した仲仕や力自慢の大人のグループの中で唯一の学生グループが我々だった。「学生に花持たせ」との怖いオッサン達の親心で、なんと32俵奪い取り、誰が言い出したか司令部へ寄付しようと言う事になり、見物して居た下級生をも動員してのパレードだった。ところが翌日の新聞紙上にデカデカと載り、翌々日だったか朝礼時、吉崎初代校長から、「目的は良いが手段が悪い。諸君の身体は父兄から預かった大事な身体」と朝礼台上で例の踵を時々上げ下げしながらの大目玉だった。

母校も80周年を迎えたとの事、かつて全国3指の1校に輝いた栄光と伝統の歴史の上に立って、県下最古の工業高校としての誇りを失わず、奮起一番益々発展されん事を祈ると共に、今は幽明境を異にする説得力にあふれ、個性味豊かだった恩師達と懐かしき物故級友達のご冥福を心から祈念して拙筆を終ります。

シベリア抑留記

甲 藤 延 義(昭10化卒)

武装解除の末、^{えっか}掖河に集結。第227大隊に編入。「ヤボンスキー、ピストラ、ピストラ東京ダモイ」、とソ連兵に急かたてられて貨物列車に乗り込んだのは、昭和20年9月上旬であった。汽車が次第に南下する。何処からともなく潮の香りが漂って来た。皆ワッと歓声を上げ有頂天になっていた。そんな時、「我々をすんなり返すものか、シベリアに送られるよ!!」と冷めた見方をする者もいた。

処がである。気がつくとき汽車は何時の間にか大きく旋回して、シベリア奥地に向って直走っていた。愕然として声も出なくなった。約1週間程、走ったり止まったりピロビジャン地区のオボロチエ駅に降ろされた。更に徒歩で集落の端れに着いた時、そこに張り巡らされた鉄条網の内に数個の蓮池天幕が転がっていた。早速これを設営、更に冬に向って、ジムランカ造りが我々の最初の仕事になった。屋根だけが地上に、廻りは地中、小窓が上の方に2個所、電灯の代りに白樺の皮を燃やした。

朝起きると、顔中真黒で、目だけがギョロギョロして皆狸同然であった。お互いに向いあって泣き笑った。水は柵内の一



角に湧き水が出ていて、小川につながっていた。真冬でも氷る事は無かった。これを部隊の飲料水とする為、ピヤダルで運んだ。毎日ピヤダルを4人係りで運搬するのは大仕事だった。燃料の薪は倒木を利用した。

そのうち病人が続出した。初めての寒さ、零下35度—40度、それに栄養失調、アミーバー赤痢、肺炎、毎日の様に死者が出た。一応柵内の生活が落ち着いた頃、道路作業が始まった。錫鉱石が出る云うヒンガン地区に向う道路の建設である。山の麓を切り開き、小山を発破をかけて削り、トラックが通れる新設道路である。作業はノルマノルマで、其の日の成績が明日の食事につながるのである。運・不運は此処でも付き纏った。割り当てられた場所で大きく差が出た。地質、地形等に依る作業難度には関係無く、ノルマは結果だけで決められた。

昭和21年10月、その新設道路を北西45キロのヒンガン収容所へ移送になる。ダム建設、伐採、枕木の製材、建築等の強制労働に従事した。此の頃から民主運動が活発になり、階級が撤廃される。或る日本部でBKを募集していると云う。ソ連兵の助手である。一寸日本に帰れないぞ、の噂であった。処が暫くして、成り手が無いから皆の為に前がなって呉れ、と名指して来た。渋々なってみると、専用の1室を当てがわれ、其の上、月に35ルーブルの手当を呉れると云う。14名が起居を共にする事になった。仕事は作業人員の掌握、作業場からの逸脱、仕事のサボタージュ、現地人との接触、等の警備である。

私は暇を持て余して手相見を始めた。相手の風体、顔色を一瞥、左手を柔らかく握って引き寄せ、掌を開かせ、手の皺を軽くなぞり乍ら「ハラショー」と落ち着いた声で云う。そして今は苦しくても、先々屹度良い事がある、幸福になる、子供はあと2人は出来る。顔色を見て、今は苦しいだろうが必ず快く成って長生き出来る!!等思い付きを片ことのロシア語を駆使して云う。其のうち手にあわぬ程になって来た。そこで、1日3人を見る事にした。それ以上は気が散って正確に見る事が出来ない事にした。何1つ娯楽の無い殺風景な所であった。そのせいか、割合受けた様で女性が多かった。

昭和23年3月の或る日、作業途中で全員仕事を中止してラーゲルに帰る様、連絡が来た。例に依って「ダワイダワイビストラー、東京ダモイ」、と警戒兵は騒がしく喚いた。又か我々は白けた気持になった。ラーゲルに帰って見ると、例の米国製の12輪トラック数台が待っていた。皆色めきたって荷物をまとめ、先を競って飛び乗った。オボロチェ駅からシベリア鉄道を、あの貨車に乗り替え南下した。車内では政治活動も活発で、天皇制打倒、資本主義の悪対、共産党への礼賛、等々日本新聞を教本に討論した。入ソの時とは打って変って、皆能弁になっていた。やっとナホトカ港に着いたが、岸壁には1隻の船も居なかった。東京は俺達を必要としないんだ、とも云われたが、遙かにただ日本海上を無念の涙で見詰めるだけだった。

1週間程何等する事もなく、意気消沈の身を、再度ハバロスク郊外の練瓦工場に送り込まれた。此処でネンド土をトロッコでミキサー機に運んだ。ドデカイトロッコを5人係りで押すのだが、雨や雪の降る日はよく脱線し復元するのに苦労した。月に2・3回大型貨車に製品の練瓦を積み込む作業があった。個人個人が窯元と貨車の間50米程を、1人4枚づつ抱えて運んだ。大手袋はすぐ破け、忽ち手から血が染んだ。又、貨車床は高く、胸上迄持ち上げる力も気力も無くなった。耐え切れず落とすと、自分の足に当って、次々に負傷した。此の頃には、もう我が人生も終りか、と覚悟した。次の日の朝、使役の募集があった。いちかばちか切り込んでみる事にした。現場は空港近くにあるパイロット公舎の清掃作業であった。上下2軒、計4軒の2DKで、左半分が空家になっていた。昼休みをしていると2階の階段で、女性軍人が「シトシト」一寸一寸と、私を呼んでいる。傍に行くと、ホカホカのペロシキを両手に提げていた。「ダワイダワイ」早く早く!!と急かす様に私に呉れた。スパシーボ、スパシーボ、頭を下げてこれを頂戴した。彼女はニコッと笑ってドアの内に消えた。乞食の風体の私は、嬉しさと恥しさで一杯だった。素晴らしい美人だった。今も忘れられない、ロシア女性である。我々は此処の作業で生き返った。

それから間もなく、オロシロフの南にある1集落の、コルホーズに行く事になった。広い農場で、コンバインが取り零したジャガ芋を収穫する仕事があった。芋は、いかにも小さかった。宿舎は蓄舎を当てがわれた。床に干草を深々と敷き、ぐっすり眠った。此の頃、新婚5ヶ月で別れた妻の事をよく夢に見た。暫らくは穏やかな農村の生活が続いた。

昭和24年、9月下旬、突然ナホトカに再度集結する事になった。港に今度は日の丸を掲げた大きな船が待機していた。ただ声も無く涙が出た。乗船し、船が岸壁を離れる迄は不安で落着かず、何時引き留められるか、ビクビクした。離れて行くナホトカ港を見送り乍ら、ソ連は最後迄厳しく、冷めたい国だったと思った。昭和24年10月3日船は無事青い空、緑の山々に囲まれた懐かしい祖国日本の、舞鶴港棧橋に横着けに成った。

思い出

森 脇 貞 夫 (昭10士卒)

昭和10年4月、日本電力に入社。

北陸の黒部峡谷で、黒四ダムの下流にある、黒部川第2発電所、黒部川第3発電所の建設に従事したのが、私の水力開発に取組んだ最初の出会いでした。

以来電力一筋の道を40年。

建設業界に入って12年。

今第3の人生を大旺機械を預って歩んでいます。

この間7年有半の応召期間がありましたが、中支戦線より生還、戦前、戦中、戦後を生きて73年の間には、幾変遷がありました。

共に学んだ級友も、この間6名戦死、3名病死、残った者8名と淋しくなりました。

いつも同窓会で、当時を回顧しています。北門筋の当時の校舎は、南に高坂高女、西に県立第一高女と、恵まれた環境にあったこととりわけ、土木、建築の設計室が2階の西端にあって、そこから、南北に長く建てられた第一高女のトイレが、真正面に当っており、小窓越しに女学生の頭が見えて喜んだこと、測量の実習の時、トランシットの方向が、よく娘さんの方向に向けられたことも、懐かしい思い出です。純情な一時代でした。

修学旅行から帰ると、旅行報告会が開かれておりました。大政治家を想はすような、雄弁家の先輩達に感動させられました。そして楽しく聞かせて頂きました。この先輩達も、社会に出られて、大いに御活躍されていることと思います。

優秀な人材がそろっていました。

当時も母校は、全国的に名声を博しておりました。お蔭で土木第3回生と、歴史の浅かった私達まで、その恩恵に浴させて頂きました。

先輩達の築かれた大きな業績と、母校の伝統が土木をも抱擁してくれました。

全国から応募し受験した中で、日本電力に入社出来たのは、高知工業、秋田工業、八女工業の3校でした。

お蔭さまで現在があります。

母校を巣立ったことを誇りに思っています。そして感謝しています。

母校の弥栄を祈り上げます。



野球部の想ひ出

大西 至 (昭11機卒)

大正7年創部以来たくさんの先輩方の活躍されているのをみて、あこがれて高知県立工業学校へ昭和6年入学し、野球部に入部しました。昭和11年卒業まで5年間関係諸先生方はじめ諸先輩の皆様のお世話になりました。中村(池上)策実、藤井信義、深谷俊明、諸先生の御指導を受けました。

当時の練習は現在の丸の内高校西側のグラウンドで週半分はい後半分は校庭でした。現在のグラウンドに比べて、グラウンドと呼べないほど貧弱なものでした。

又この時分の各種野球大会は市立高知商業学校グラウンドに

て行われて居たが昭和8年10月高知市大原町に高知市営グラウンドが完成し、以後各種大会はここで行なわれる様になりました。この竣工を記念して大阪市より興国商業、日新商業の両校を招待し、我が校は日新商業と対戦しました。

同年秋季大会(リーグ戦)には我が校は全勝優勝をなしとげ冬の四国大会に出場することとなりました。

当時は土讃線は未完成で高知一大杉間は汽車でした。

第1回冬季四国大会1回戦は地元徳島商業と対戦9-7にて勝利を収め、2回戦には松山商業と対戦し4-5と惜敗しました。

昭和9年全国中等学校野球大会高知県大会は圧倒的な戦力を持ちながら3勝1敗で同率で城東商業と決勝戦を行い、惜しくも敗れ準優勝となったが四国大会への出場権を得ました。「この県予選は小生は病気のため欠場」

四国大会は高松市で行われ、1回戦は愛媛代表松山中学校と対戦10-9にて勝利を収めました。この試合では奇しくもスコアボードに、打順も2番、守備位置も3壘大西と小生と全く同姓であったことを覚えて居ります。

翌日2回戦は地元高松中学校と対戦7-10と敗れました。

この年は楠瀬投手を中心とした充実したチームでありました。

昭和10年第2回冬季四国大会が初めて高知市設球場で行われたが我が校も出場したが宇和島中学校に敗れました。

選手生活3年間を振り返って残念なことは毎年夏季には脚気にかかり、十分な活躍が出来ず関係の皆様迷惑をおかけしたことでした。その病気も軍隊に入隊後完治しました。

学校野球部の思い出は、たくさんあり、書き記すと長くなりますので、簡単ながらほんの一部を書いてみました。

思い出の高知工業

橋本景行(昭11電卒)

私が入学して高知工業の門を潜ったのは、昭和6年の4月であった。その年、創立20周年の祝賀会が開かれたので、私達は第20回の卒業になるのかと漠然と思ったものである。

そして、同窓会名簿には旧制20回卒業生と掲げられている。思えば古くなったものである。この間同窓会誌には一度も寄稿したことはない。

私達が入学した頃は、一番怖い先生方が居られるところは通常の職員室ではなくて、訓育部という名前の付いた職員室で通称「水族館」と呼ばれていた。それはこの部屋に居られる先生方のニックネームが皆、魚の名前が付いていたからであろう。「ウナギ(教練の北村先生)、ナマズ(数学の安並先生、髭がなまず髭だったからではないか)、カニ(歴史の深田先生、しかんだ顔の額の皺が丁度カニの甲羅に良く似ていた。)、ゴリ(体育の宮地先生、顔はゴリだが目は優しかった)「これはゴリラがなまってゴリとなったものではないか」昭和18年だった

と思うけれど、私が北満のハイラルから休暇を頂いて内地に帰ってきたときである、或る日母校を訪ねた。母校はもう潮江の新校舎に移ってはいいたが、偶然門前で外出される北村先生にお目に掛かった。相変わらずのエラの張った顔に円い軍帽を被って心持ち皺の増えた顔を湛えて私を見て、パッと手を上げて敬礼をされた。（この時、私は戦闘帽に陸軍少尉の軍服を着ていた、そしてその時私の所属は北満ハイラル第8国境守備隊司令部参謀部付であった。）北村先生は相変わらずの特務曹長「准尉」であったから無理もなかったが、声を掛けた私が慌てて帽子を脱いで「私です、橋本です。」といった始末だった。北村先生は「ああ橋本君。」と言われて暫く立ち話しをしてお別れした。

実は前年2月に、私は陸軍防空学校に将校学生として派遣され、高射砲の対空戦闘の教育を受けて帰任する途中、少しの休暇を頂いて母校を訪問したので、私の防空兵という兵科がその当時珍しくて、丁度防空思想がやかましくなりかけた頃だったので、懐かしい北門筋のあの講堂に3年生以上を集めて高射砲の任務と、戦闘法を野戦と、要地の両方について話したことがあった。本来ならこのような話しは原稿を憲兵隊に差し出し、その許可を受けなければならないが、丁度ハイラルの防空演習の際話しをする機会があり、その時の検閲済の原稿を持参していたので都合が良かった。閑話休題、本文に戻ろう。

入学した当初、毎朝の朝礼は吉崎校長が朝礼台の上に乗って1日の訓示から始まる。各学級の服装検査から、時には所持品の検査もあった。約10分の後解散となって1日の授業が始まる。私達が1年生のとき創立20周年の記念事業が行なわれた。特にこれといった記憶はないが、竹内明太郎先生の胸像除幕式や島田比菜先生の肖像画の掲額式等があった。その他の行事は記憶していない。

昭和7年、私達が2年生のとき5年先輩の杉本盛氏（当時日大生）がロスアンゼルス第10回オリンピックの水泳種目に日本代表として参加され、そして400メートル自由形に堂々5位入賞を果たされたのである。この時は1,500メートル自由形に北村久寿男氏（高知商業5年生）が優勝され、同じく高知商業出身の横山隆志選手が杉本氏と同じ種目で4位に入ったので、影は少し薄かったが、我々にとっては毎日のラジオが今のテレビどころでは無く貴重なニュース源であった。わくわくしながら手製のラジオにしがみ付いていたものである。この時、高知からは北村、横山、杉本、片岡（今の高知学園出身で水球に出場した。）陸上競技では相良八重子さん（土佐女子出身で走り高跳びに出場された。）この5人だったと思う。帰国歓迎会及び祝賀会はこの5人であったと記憶している。

私達が5年生になるや5月頃修学旅行が行なわれて大阪、神戸、京都、伊勢神宮、東京、日光迄足を延ばした。その帰途である、神戸の波止場に吉崎前校長先生が我々を見送りに来られて、そのご健在ぶりに感激したものである。そしてこの修学旅

行は私共の人生に大きな影響を与えてくれたことを今に至るも忘れることができない。

次に私が最も思い出の深いのは、テニス部の優勝の記憶である。工業のその当時のスポーツは他の部はどれも弱かった。といっても練習は何処の部も懸命にやっているのだが、どうも他校に敵わない。私がテニス部に入れてもらったのは2年生のときである。当時テニスは硬式であった。しかし、支那事変が始まってテニスのボールが輸入されなくなりラケット等が高価になり、勢い部費が切り詰められて止むをえず軟式に変わらざるをえなかった。これは各中等学校とも同じであった、そして翌年は各学校とも未だ経験が無いことを理由にして秋の大会は見送られた。私が3年生のときである。私達は未だ若いので我慢できたが、他校の5年生の皆さんはさぞかし残念であったろう。因に我々の5年生には岡野浩さんが1人居られたが残念であったろう。翌年はいよいよ私達の努力が試される年である。私達のコーチにスベリ山の北に在った愛冠クラブの会員の鍋島さんが来てくださるようになった。彼は県下のナンバー1の実力をもち土佐女子のコーチも引き受けていたのでお忙しい事であったと思われる。

その年テニス競技に参加したのは、師範、農業、工業、城東中（現追手前高）、の5校で商業だけは固く伝統を守り硬式を踏襲していた。尤も昭和8年の全国中等学校庭球大会（大阪近郊の浜寺で行なわれた）で高知商業の西岡小弥太選手（後の浜川県テニス協会副会長）がシングルスに優勝して、日本一になったのだから学校当局もこれを無視するわけには行かない。（注：最近、軟式関係者や教育関係の方々から軟式が早くからやっていたということを聞くが全く反対で戦前は全て硬式だった。）そして最初に軟式を始めたのは私達だった。

かくして昭和9年秋の高知県中等学校体育大会には工業が優勝した。そしてこのチームは全員4年生だったから翌10年も優勝して2年連続の栄誉を受けた。メンバーはつぎの通り

部長 浜田晴喜先生

コーチ 鍋島さん

- 1、 上原、近藤
- 2、 橋本、安岡
- 3、 田村（哲）島野

補 横山、上田（この2人は1年下だった。）

現在高知県でテニス界のOBとして活躍しておられる同窓生は沢山居られるが、中でも

井本正一氏（国体最多出場の県下NO. 1のプレイヤー）

徳弘晴輝氏（現在のテニス協会の理事長で全日本ローンコートでダブルス優勝）の方々である。

尚、上記の浜田先生の長男、浜田浩一氏は現在高知ローンテニスクラブで活躍中であることを付記します。

全国に坂本龍馬先生を

上原 栄治

(昭12土卒)

鹿児島県には西郷隆盛先生は居るが西郷隆盛は居ない。高知県には坂本龍馬は居ても坂本龍馬先生は居ない。御存知の通り薩長同盟は坂本先生の仲介に依り成立したもので有る。ならば当然西郷隆盛先生より坂本龍馬先生の方が上で有る。何故下の西郷隆盛先生に先生がつき上の坂本龍馬には先生が付かぬのか。其れは鹿児島県民と高知県民の教養の差だと思ふ。高知県民の教育の指導が悪い。

平成3年11月5日NHKの12時20分からの「ひるどき日本列島」で「龍馬が駆け抜けた道」の題で放映が有りました。村興しに龍馬先生を利用するのは良いが、高知県と愛媛県との県境で村人の全員が龍馬、龍馬と、あたかも下僕を呼捨にする様な言方で有った。其れを見、聞いて居る私は涙が出た。日本を代表する偉人があんな山の村民から呼捨されていいのか。高知県



が悪い。鹿児島県に行って西郷隆盛と呼捨にしてごらん。何所でも、誰からでも叱られる。鹿児島県民の心が伝わって来る。教育の職場に居る諸兄、それでいいのか。いまからでも遅くない。母校80周年を期に21世紀に向って坂本龍馬先生と呼び興そうでは有りませんか。

私も悪い。社会人で有りながら社会人が呼捨てて居るのを聞き流して居る。

何故同じ高知県民も多い内、私が坂本龍馬先生に拘わり力を入れるかと言いますと、東京に在る大手都銀の取締役と近年に私が社長彼が副社長として別に新しい会社を設立する事が5年前から決まって居ります。其の縁結びが坂本龍馬先生に依るものです。其故新しい会社を創立したら、2人で桂浜の先生の銅像の前に額突き御縁に依る感謝と会社結成の報告をする事に成って居ります。

私は今日から私が経営して居ります(株)高知屋造船所と、マリナーのマリンボートコーチャ及びレストランの全員に徹底する様叱ります。

80年から100周年記念に向って、高知市、高知県と当社及び横須賀市、神奈川県と東京と日本全土に坂本龍馬先生を広げようでは有りませんか。

母校80周年を祝し、母校の益々の発展と先生諸兄の御健康御多幸を御祈り申し上げます。



(昭和13年11月27日 行啓記念日鴻ノ森山頂にて)

至福なり先生

小林秀雄先生（応用化学科科長）

岡田 盛（昭14化卒）

眼の大きな、鼻下に髭をおき、色白瘦身で、さっそうとしておりました。子供心に大学教授とはこういう雰囲気を持った先生ではなかろうかと思いました。授業内容も大変次元の高い、学問とはこんなものだよ、というような講義をされました。私はワルで、あんまり成績は良くなかったのですが、身の引きまわると、学問の世界に迷い込むこの1時間が好きで、うっとり毎時間聞きほれておりました。

卒業の年の2学期中間試験の前に先生は、今度の試験は「どんな本を持ってきて見てもえい試験をする。」

授業が終わって学級は騒然となりました。たいへん楽しそうな雰囲気が満ち満ちております。

「本を見てかまんと。カンニングと同じじゃあ。5年になったらえいねや。」

「あほう言うな。コバさん（小林先生の愛称）が、本（教科書）にあるがを出すか考えてみい。」

私はそこで心中ニヤッとしました。日頃のワルが頭を持ち上げてきました。この年の夏休みに、今の県庁の西の端にあった赤煉瓦の西洋館風の県立図書館で、夏中にここにある小説を全部読んぢやろうと通いつめておりました。このとき知ったのが10円の担保を置くと本の貸し出しをしてくれることです。

「親父さんよ。10円貸してくれんかよ。かくかくしかじかムニャムニャ。」

月謝が5円の時代です。

「なに、お前じゃ現金で10円も貸してたまるかムニャムニャ。国債（戦時国債）なら貸しちゃお。貸しちゃお。」

「うん。図書館へ話してみる。」

さあ試験の日です。むつかしそうな理論化学の本を3冊、デーンと机の上に積んで待ち構えました。

「お、あったあった。」書く書く。「これもあった。」書く書く。「あ、これもまたあった。」書く書くムニャムニャ、全部できたあ！

これほど体が熱くなった試験は初めてでした。小林先生はいつも試験の結果を発表されます。名前を読み上げられます。

「この中に100点が1人おる。」

さあ名前を呼ばれるぞ。ありゃ、今回は一向名前を言わんが。

「そうぢやろう、そうぢやろう。いっぺんも100点を取ったことのない男が100点を取ったら先生もさぞお困りであろう。先生にもいろいろと都合というもののおありだ。級友に言っても誰も信用してくれそうにもないし。まあ、いいや。おれだけでも知っているぞ。」

と足取りも軽く電車に乗ってうちへ帰りました。

卒業して、国を出て商工省大阪工業試験所という所に入りました。ここではいつも「あ、あ、あったあった、またあった」ということの繰り返しで、足どりは少し軽くなりましたが、あの時のように体が熱くなるようなことはありませんでした。

（会報No.28より）

思い出

村山 保（昭14土卒）（旧職員）

母校創立80周年おめでとうございます。思えば昭和9年4月、私は希望に胸をふくらませながら北与力町の母校へ入学しました。

正面は県立第一高女で、静かな良い教育環境でありました。入学してみると皆んな優秀な者ばかりでありまして、2年生までは科分けをせず混成のA、B、Cの3クラスでした。

そして、毎学期机の配置が成績順に変わり、競争心をかり立てていました。今、こうした教育をすると新聞沙汰に及び、社会問題になることは間違いないと思いますが、当時は誰1人不満を言う者はありませんでした。

何故ならば、入学している生徒全員が、小学校ではトップクラスの優秀生ばかりでありまして、成績順位は単なる努力の程度を示す指標でしかないと理解していたからであります。事実、少しの努力で随分成績は動いており、努力を勧める手段であったように思われます。皆んな良く勉強したことでした。

「玉磨がざれば光をなさず、人学がざれば道を知らず、水は方円の器に従い、人は善悪の友による。」という漢詩があります。

私が工業学校の生徒の頃、私の家へT青年が小学校教員の検定試験を受けるべく勉強に来ていました。昼は農業に従事し、荷車をひき、夜は9時まで紙をすいて夜なべをし、それから私の家へ来て勉強し、眠くなると井戸の水をつるべでかぶって勉強していました。

朝私が目目をさますと、もう帰っていました。ノートへ書いたペンの字が手油で見えにくい程になっていました。そして数年の内に検定試験にすべて合格しましたが、教員にはならず、軍隊へ志願して名をなしました。

私はこのT青年の血のにじむような勉強ぶりを目のあたりに見て、勉強せずにはおられません。「人は善悪の友による」の言葉のように勉強する習慣が付き、土木科の深谷俊明先生（後に工学博士）に肩をたたかれて、激励されたことを未だ忘れることが出来ません。

やがて昭和14年3月卒業し、土木科19名の殆どの友は、満州、朝鮮、北支へと雄飛しました。私は毎日毎日棧橋へ見送りに行き、涙を流して別れを惜しみ、再会を約して別れたことであります。私は1人淋しく内地へ残り、神戸高等工業学校へ進学しました。

やがて、悪夢のような戦争は終り、昭和20年8月15日から、

次々と郷土へ帰って参りましたが、中には大陸の地に骨を埋めた者もあり、戦場の露と消えた英霊もありました。

そして、現在では生存している者は僅か7名となってしまいました。私も71歳を迎え、静かに若かりし高知工業学校での青春時代に思いを馳せ、感慨無量なるものがあります。

平成元年秋の叙勲で勲四等瑞宝章を頂いたのも、母校、高知工業学校で学んだお陰であると感謝しております。

母校の現在は、スポーツの面でも、学習の面でも、校風の面でも断然頭角をあらわしているのを見るにつけ、校長先生はじめ全職員の皆さん方のご尽力に対し、深く敬意を表するものがあります。

母校創立80周年を心からお祝いし、母校並びに同窓会の益々のご発展と、同窓生各位のご健勝ご活躍をお祈り致します。

賀高知工業高等学校創立八十周年
村山保
校章火鳥舞無辺
創立滔々八十年
工業振興富国基
竹内精神至今伝

同期生は心の友

門田美清(昭15電卒)

今、私の手許に母校の開校50年誌がある。最近になって書棚の奥から発見したものである。30年前は恐らく拾い読み、走り読みをしていたことであろう。遠くなった日々へ想い起しながら再読する。

明治45年、全国唯一の5年制の母校、私立高知工業学校を開校に導かれた竹内精神を遵奉、継承してきた歴代校長先生と諸先生方、又大先輩等に依る回顧追想録は蓋し圧巻である。塾的雰囲気醸し出されていたであろう初期の頃が窺はれる。又投稿者の殆んどが当時働らき盛りであり言葉も潑刺としておられる。然しながら30年の星霜は幽明境を異にせられた方も多く数えられ感慨も深い。此の誌は北与力町を知る方の回春の言葉の泉でもあろうか。嬉しいことは此の50年式典の締めくくりの生徒会代表の川村恭三君の謝辞の伝統を承け継ぐ言葉であり、その彼が現在は桂工人として活躍されておることである。80年誌に期待する所以でもある。

最近、高齢化社会に伴う諸々の報道が特に身近に感じられ我

が身、我が家と見比べてみる事が多い。昭和15年卒と云うことは本年5月4日現在69才か70才が大多数である。まさに古希である。暮夜ひそかに同期生124名に思いを馳せつつ我が人生を、振り返ってみるのも自然の理か。

宇佐の田舎者が桜咲くお城をバックに工業学校へ入学出来たことは今もって鮮明に蘇る一コマである。5代校長故小松(八木)生幹先生からは4年生の時から数学を教わった。同誌に次の様に書かれてある。「支那事変が激しくなって卒業生は内地はもとより満洲の軍需工場に就職せねばならなかった。その昭和15年の卒業生の中で上級学校志望者がそれでも28名あった。そのすべてが一様に官立高校に入学した云々」我々年次の卒業生のことに触れておられることに感銘を新にする。それから僅か3年から5年の間に約27名が無限の可能性を秘めながら今次大戦に散華したんぬ。生き残った者、只食はんがために、なりふり構わず働らき続け、東京オリンピックの頃よりようやく落ち着きを得る。やがて嘗ての人生50年を迎える頃より友の訃報を聞くこと屢々、現在その数、約14名。加えて消息不明の友、約11名とある。(この約に就いては後で述べる)現存者中、交信し得る者72名のみとは感慨無量である。

一昨年(平成3年)が卒業50年と云う節目の年でもあって会報1990、30号に掲載されておる通り卒業して初めての合同々期生の集いを桂浜で開催、27名が集まった。その中の福岡県在住の化学科卒の宮田孔君は「医者への許可を得て来た。帰ったら入院せよ」と完爾として50年ぶりの友と酒を酌み交わす姿は印象的であった。人生感動することに依り活力が出てくると思う。皆んなの意見で毎年会おうと云うことになり平成3年は手結の海風荘に初参加2名を加えて23名(写真添付)が集まった。昨年とは趣も異り元気で過した1年ぶりの再会を喜び合う年輪の風格を感じさせる雰囲気であった。ワン・ツー・インディ等の当時関心のあった異性の誰彼に話題の花を咲かせていたグループも「今頃はどうしちよるかにゃあー」で頭を掻いておしまい。まだまだ活力十分と御見受けもする。席上次の事柄が提案され即実行と決まる。

「その1」

戦後も47年となると我々の周辺も曖昧模糊の部分が多くなる。先回も今回も物故者に対する黙禱が為されたが次回の会合までに戦没者と、その戦場、年月も知りたい。病没者も消息不明者も、はっきり知りたい。

そして慰霊の集いの計画を今一度、現存者全員に知らせよう。

「その2」自分誌を作ろう。まとめて一部を同窓会本部に保管をお願いしよう。

「その3」幸い我々一同母校創立80周年は元気で迎えられそう、次は90周年を皆んな揃ってお祝い出来るよう頑張ろう。桂工会に大正13年電気科卒の高橋二郎大先輩あり、85才で今年1月未まで現役を務められていた。そのこつを何うと

- 1、仕事をする事。
 - 1、クヨクヨしない事。
 - 1、酒を飲む事。
- と、いつも決った答。快老術と申すべきか。

鯨鮓は 4代に吼ゆ

5月かな

お城下 羞ぢらいし頃

樟若葉

私の思い出

坂本芳雄(昭15化卒)

田舎の小学校から出てきた私にとっては、随分広い校庭に思えた。高知工業の合格発表の日のことである。木造校舎の板壁に、右から左へと張り出されてゆく白い紙に次々と現われる合格者番号を、その校庭で父親と一緒に見守っていた時の緊張感と、自分の番号を見付けた時の喜びが昨日のようによみがえってくる。もちろん番号は忘れてしまったが、屋根から下りた雨樋を白い紙が乗り越えた直後に自分の番号が出たことだけは、鮮明に覚えている。

校庭といえば嫌な思い出もある。最もきらいな軍事教練の場でもあったからである。特に、3人目(?)の配属将校として、何と、私の従兄に当るN少尉が派遣されてきたのには、驚きと共に、どうにもやり切れない思いだった。その従兄の死去の知らせを受けたのは、昨年1月だった。

入学当時は、仁井田に住んでいたが、丁度その頃、浦戸湾に沿って種崎行のバス路線が開通したばかりで、すんなりとバス通学にきまった。名前は忘れてしまったが、美人の車掌さんがいて、通学の行き帰りにその女性(ひと)のバスに乗り合わせるのが、ひそかな楽しみでもあった。その後しばらくして、稲生に引越したので、自転車通学に変わり、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を実践することになった。当時、前浜から通っていた電気の高木君が毎朝声を掛けてくれて、一緒に通ったのも懐かしく思い出される。その彼も太平洋戦争で戦死したと聞いている、心からご冥福を祈りたい。

高知工業に入ると、英語をはじめ初にお目にかかる学科も色々多かった中で、生理衛生などは現実的で面白かった、例えば「寒い日に小便した後、身震いして鳥肌(はだ)が立つのはどうしてか?」など、ゴリさんから教わったのが印象深い。若し戦争がなくて、平和が続いていたら、50年以上も過ぎた今頃になって、小学校での性教育が問題になるようなことはなかったのではなからうか?。また、入学試験の時「モチを焼いてふくれるのはなぜか、その理由を説明せよ」という問題があったように記憶している。現在の高校入試に比べれば隔世の感がする。しかし、その一方で、名門高知工業の教育理念をうかがわ

せるにふさわしい、実に含蓄のある問題だったと今でも思っている。前述の高木君のように、生きていれば昔話をしてみたい故郷の友人を思い浮べる年令になったが、化学の末広君もその1人である。彼は日本酒のラベルを集めるのが趣味で、仁井田の我が家に遊びに来ると、空の一升瓶を集めて2人でラベルはがしに精を出したものである。TVもファミコンもない時代でも、こんな仲間との出会いが楽しかった。残念ながら彼も又故人となった。

母校の80周年記念にはおよそふさわしくない、誠にたわいのない個人的な思い出に終始してしまったことをおわびして筆をおくこととする。

死の科学

上久保浩(昭15土卒)

昔、若い頃には毎晩のようにあちこちと良く飲んで廻ったものだ。酔も相当に廻って来た。若い娘が、「お客さん名前教えて。」「よっしゃ覚えちよれよ」姓は「かり首」名は「ふとし。」解ったか。「ヘエエ?」

それから何日かして女房と一緒に帯屋町を歩いて居た。後ろから若い声で「一寸かり首さん」「かり首さん。」女房が俺の顔を見乍ら「世の中には変った姓もあるもんぢゃねー。」娘も女房と気付いたのか後は声が無い。あーあやれやれ。だが流石女房には返す言葉が出ん。

冗談言うな。俺の名前はチャンと「上久保浩」という立派な名があるぞ。解ったか?

それが俺の自己紹介というやつじゃ。

平成3年7月23日、郵便物が届いた。何人に出したか知らんが、皆んな同文ぢゃと思うが昔の思い出話等を書いてくれという。50人か100人か、工業の卒業生は真面目だから、皆んなーが同じく趣旨を体して、教師のシコ名を書きつらね、昔の思い出話を書いたとしたら全くうんざりしやせんか? 2万程の卒業生の中に1人ばあ、俺のようなヘソ曲りが居てもえいろうかと勝手に思うた。それに発刊が平成5年の3月ぢゃあつか。来年の事を言うたら鬼が笑うというから、再来年の事となりや、鬼を卒倒さすパーの事を書かにゃーいくまいが。そこで冒頭の文となったがじゃ。俺の責任じゃ無い。

来年学校が開校80年。俺が今年で丁度古希。考えてみたらタッタ9つ学校が先輩丈ぢゃ。大した事は無いが、まあ皆んなーが目出度い事ぢゃと言うきに、俺1人が敢えて反対する事もない。そうぢゃ、目出度い目出度い。と。扱て古希ともなると、あの世とやらへ段々近づくせいか、若い頃には全く考えもせざった死後の事等色々考えるようになってきた。机一つ椅子一つから、曲りなりに7、80人の人を使う会社を造り、会社としてはそこそこ社会に貢献した積りで、それはそれなりに評価出来るとは思いますが、では俺自身は一体何をしたというんだ。男の子2

人、大学出して世帯持たせて独立させた。後に残ったわ古希の亭主と古女房。現役社長の時代にわ、無我夢中で朝から晩迄駆けずり廻って、それなりに充実していたが現役を離れた今、何かしら虚ろな物を感じてならん。人間とは何なのか？人生とはいかにあるべきか？今にしてもう一度深く考えてみたい。

アホウ、今更そんな事を考えて何の役に立つか、とも思うが、そうではあるまい。俺は人生を納得ゆくような総括がしてみたいのだ。総括が終るには後2、30年掛るろう。総括が済まぬうちにはあの世とやらえは行かぬと勝手に決めた。

8月号の文春に今をときめく「幸福の科学」の教主大川隆法氏に関する文がある。人間が死ぬと霊界に入る。霊界には地獄のある4次元と5次6次7次と20次元以上の次元があり、根本神である大宇宙大神霊は20次元あるいはそれ以上の存在であるとしてある。大宇宙にも矢張り大神霊が居られる由やれやれであるが、半経150億光年いや直経かな？（1光年は9兆4600億kmとの事だ。誰か150億光年が何kmか計算してみんか）の大宇宙の統括神にしては、いささか次元が低く過ぎはせんかと思うが釈迦、キリスト等が9次元だというので、そんならそれはそれで良いとして、では俺が死んだら一体何次元の霊界に行けるのか一寸気になる事である。そして霊界で一定期間過ごし又地上に降りるといふ。さて一定の期間とはどれ位の長さで、再び地上に転生する時、一体何に生まれ変わってくるのか？これも矢張り気になる事である。若し勉強して分る事ならこの世に居る内に理解しておきたい。これが解らん内はあの世とやらえは俺は行かん。とこれも勝手に決めてしまえ。とすれば又々寿命が大分延びた。

勝手な事許り書いて紙巾も尽きた。最後に学校に結びつけたおち落をつけよう。

オーイ今何時限だ？ 5時限で英語の勉強をして居ります。

馬鹿!!話の次元が違うぢゃいか。 平成3年7月27日脱稿。

妄言多謝。

塞翁が馬

渡辺武雄(昭15建卒)

この言葉は今さら説明する迄もなく皆様ご承知の事ですが、私の人生に於て何回となく経験しました。

(其の1) 学校時代にグライダー部が始めて出来て入部しました。4年生の時だったと思います。(昭和13年) 練習は鏡川の南側(山内神社の反対側)や朝倉の44連隊の連兵場(今は住宅が立ち並び射的場も家ばかり)であった。4年の夏休みは新居の浜で合宿訓練、宿舎は新居小学校で毎日毎日ウルメばかり食わされた。市商にもグライダー部があり連合の合宿訓練であった。その時市商の先生でエノケンに似た先生がいて一緒に訓練を受けた。そのエノケン先生とは高松の愛国飛行場(旧高松空港の場所と思う)の合宿訓練でも一緒であった。エノケン先生

は3日目頃だったと思うが腹が痛いと言って病院に行ったが盲腸だと云う事でその晩に手術した。ところが翌日出て来て、教官が無理だと云うのにどうしても乗るんだと云って一緒に加はったのには驚いた。ずっと訓練を続けて5日目に抜糸したが着陸のドスンの時に痛いと言っていた。

私は旋回練習中に失速した。旋回のとときに機体を傾斜させる方向舵も傾いて、少し下げ舵になるので昇降舵を少し上げ舵にしてバランスさせ乍ら旋回しなければならぬのが上げ舵の方が多くなり機種が上って失速したわけで速度が無くなったなと思ったら舵もきかなくなり大きく傾いて、15~16mの高さから横滑りになって墜落した。グライダーは翼端が先に着きストラップのつけ根から折れて胴体が落ちた。ナセルでロピルを打ってはれあがただけで別のグライダーで引継ぎ練習した。翁の息子は落馬して足が折れたらしいが私の場合は翼が折れてくれたので助かった。もっと高度が高いか胴体が先に落ちていたら……失速して舵がきかなくなり墜落始めてもう駄目だと思ひ地上に着くまでの2、3秒の間に小さい頃からの田舎の生活、両親の事、小学校、工業学校の事等が頭の中を走馬燈の様によぎった。後でいつも思うのだが人間事故死の瞬間には今迄の生活が走馬燈の如く頭をよぎるものかも知れない……と。

(其の2) 5年生の夏休みには富士山麓の朝霧高原で電気科の茨木康夫君と、合宿訓練に1ヶ月近く行って来た(県内では2人だけ)。この合宿は全国から樺太(サハリン)の大泊(コルサコフ)北海道、九州、中国、四国、サイパン島からも高明嘉、湯野満(兩人共親は山口県出身と云っていた、が戦時中どうなった事か?)の2人が来ていた、が訓練生は先生が殆んどで生徒はサイパンの2人と私達2人だけであった。(帰ったら指導員になると云う合宿であった)その後卒業して松山の連兵場で訓練を受けて2級滑空士の免許を貰った。

兵隊はその免許の関係で飛行兵科に入隊する事になった(田舎の殆んどの人達は朝倉の44連隊に入隊した、終戦後聞いた話であるが44連隊はビルマの北方龍陵騰越やインパール作戦に参加して殆んど全滅に近かったとか)。

(其の3) しめた飛行機に乗れる! 静岡県の中泉(今の磐田市)の中部第129部隊である。ところが入隊してみると航空情報連隊であり頭上を練習機が飛んで行くクソー! しかし飛行機に乗



ていたら特攻隊で22・23才で終りであった。

(其の4) 入隊する前に幹部候補生の願書は出してあり将校になってサーベルぶら下げて、或は職業軍人になって生活しても良いと思って内務班でも2・3番の成績で頑張った。ところが半年先に入隊した市坪一等兵が「お前等幹部候補生有資格者はすぐに俺より上になるから今のうちにナグッテおかないとナグレなくなる」と云って有資格者数人は特別にナグラれた。悪くてナグラれるのは仕方ないが悪くないのに何かと文句をつけてナグラれた。それで軍隊はご免だ。その後現役3年とか云っていたので3年で結構早く除隊し会社に戻ろうと考えてプレーキをかけ30番位になった「渡辺お前はこの頃タルンドルぞ」と云われたがそれで結構、最初の2ヶ月は2・3番、後の2ヶ月は32・3番。4ヶ月の教育が終ると幹部候補生の願書を出してあるので試験は受けねばならぬ。受ければ大変だから答案を適当に書いて予定通り落幹。受かった者は宇都宮の教育隊に行った。その後の状況は見習士官になってニューギニア、カダルカナルに行ったとか、殆んど戦死！ 落幹で良かった。

(其の5) 一期の教育が終ると同期兵は戦場に出発したが(どの方面かわからない)私は後期兵の教育に残れと云う事で中隊で数人残った組になった。併し後期兵が入隊して来ても教育の方には廻らずに今度はレーダー教育を受ける事になった。

日本で出来た第1号機でありフィリッピンで捕獲したものをNECで研究してやっと第1号機が18年10月に出来たものである。大きさは2m角奥行が1m位のボックスで中に頭より大きい真空管が何個もあり前面パネルにはダイヤルが一杯ついていた。受信機はみかん箱位の大きさでブラウン管に反射インパルスが出るようになっていた。今ではレーダー等は常識であるがこれで敵機がどの辺りを飛んでいるかを知るわけである。

レーダーの操作を習ってビルマのラングーンに行ったが、機材がこないで本来の対空監視をして敵機をみつけ暗号にして後方基地に知らせるのである。併し私1人だけ少し横文字のわかるやつは敵の通信を聞けと云う事で、欧文のモールスを習って(それも本谷上等兵が信号を送ってやるから1日で覚えろと云われてへエーそんな事出来るかいなど思ったが朝から晩迄やって結局ものになったと云うのもイロハ48文字の内ABC26文字である)特別情報班に編入された(20人位いて敵の暗号を受信解読する暗号書は撃墜した敵機から入手していた)、2・3ヶ月してラングーンから一部前線に行くがお前も行く事になっている(数人であったが)と云われたのであるが、アミーパー性赤痢で血便が出ていたので止めてもらえるかと話したら(アミーパー性赤痢は痛くも何もないので報告してなかった)此の馬鹿野郎と云う事で代りに河野雄二殿が行く事になった(馬鹿野郎と云われても好きでアミーパー性赤痢になったわけではない)、その分隊と他の暗号分隊はトングーで爆撃に逢い、大部分が戦死し河野雄二殿も戦死したと云う事を半月もしないうちに聞いた。

た。お前の代りに行った河野戦友が戦死したぞと云われた、その時の状況をつい此の間の10月26・27日の伊東での戦友会の時に聞いた。

戦闘機にも乗れず将校にもなれずそれでよかった!!復員して高知駅に下りた時に焼野原であった高知市もすっかり様変わり、戦争を知らない人達が国民の大半を占める時代になり、若くして戦死戦病死又は内地で被爆死した人達や、其の遺族の人達の事を思うと悪夢の感がする。そして未だ其の傷跡が残って苦勞している人達も多いのである。学校時代の事を書くのが永々とつまらぬ事を書きました。諸兄の健闘を祈ります。

茫々五十年

谷本幸夫(昭16機卒)

昭和11年4月、北与力町の古い校舎に入学した。私の卒業した小学校は幡多郡奥内村安満地尋常小学校、全校生徒数101名、複式授業であった。1年2年で1クラス、3年4年で1クラス、5年6年で1クラス。先生は校長先生ご夫妻と代用教員の先生の3人。夫々の先生が1クラスづつ受持たれた。工業学校の入学試験には苦勞した。数学は6年生のものであったが、国語、歴史、地理は前の年の5年生の時に6年生の教科をすませたので、前年に教わったのを一所懸命勉強したものである。放課後、校長先生(沖本先生)が特別にご指導して下さいました。それにしても、こんな僻地の小規模小学校の卒業生によく入学を許可して下さいましたのだと入学選考の口頭試問にあられた森本長太郎先生、森光喜先生に感謝申上げる。入学したら当然、下宿となる。山ノ端町に柳川信之と云う人が住んでおられた。この人は私の曾祖母の弟にあたる。随分、年代が離れているが曾祖母は長女、信之叔父さんは末弟だったのでこのような親族関係となった。信之叔父さんの家で卒業まで5年間^{まかない}賄つきでお世話になった。信之叔父さんの長男、柳川信夫さんは土木科の第1回卒業生である。近所に同級生の浜田敏君が下宿していた。

それにしても小学校卒業の年に親元を離れて、遠縁とは言いながら他所の家で生活するのは、初めの3、4日は、まことに心細いものであった。私は弟3人、妹4人の8人兄弟の長男であるから両親は、いとも気安く送り出したのであろうか。後年、自分の子供が小学校を卒業した時、「あゝ、俺はこの頃から親元を離れたんだなあ。」と回顧したものである。一緒に入学した人の中にも下宿生は多かったが、高等小学校卒業(即、私よりも2歳年長)の人が半数以上であったように思う。

さて、入学してからは学資が大問題である。遠縁の柳川家に下宿して、下宿代は格安としていただいたが、月々、父が送金してくる金額は15円であった。その中、授業料、修学旅行積立金、校友会費などで5円程を学校に納めた。父は学資の調達には苦勞したようである。一度、送られて来たものが国債だったのには驚いた。どのようにして現金に替えたのかは覚えていな

いが、父の苦勞が身にしみた。7人の弟妹のうち、6人が寄宿舎、又は下宿で夫々の学校を卒業したが、30年近く経った後に父が「お前を工業学校へ通わしている頃が一番苦しかったなあ。」と述懐したものである。このような次第であるから学生生活も質素なものであった。卒業後、20数年経って大阪支部の総会が阪神ホテルで催された事があった。この時、森光喜先生がご出席されていた。「16年機械科卒業の谷本でございます。」とご挨拶申上げたら、「おまん、幡多から来ちよったのお。冬の極寒に夏服で登校した事があったのう。」と言われた。これには若干説明を要する。折から寒稽古の最中であつた。

近所に下宿していた丁野健治君と夜明け前の薄暗い道を海南中学（現、小津高校）の前までやって来た頃、正面から自転車が電灯を点して接近して来た。その光に目がくらんで右に避けた時、足を踏みはずして中学前のドブ川に転落した。文字通り濡れ鼠である。下宿に帰って着替えたが、冬服は一着しかない。これが水浸しとなったのだから、やむなく夏服（当時、霜降り模様の服）を着て登校した。

季節はずれの服装だから訓育部に店頭して異装の許可を取った。訓育部で火鉢を囲んでいられた先生方も驚いたであらう。森先生もこれを覚えていられて、前記のお言葉となったのである。夏冬それぞれ一着きりの「着たきり雀」であつたわけである。

入学時は1年B組、主任は植野豊治先生、英作文を教わった。4、5年前、徳島市へ行った時、ご自宅に伺った。近くに住んで居られる徳島農業の元校長先生と碁を打っておられた。横で一局の終るのを待たしていただいてお話をしました。耳が相当遠くっておられた。先生の随筆集をいただいた。私の訪問後、二年程で亡くなられた。

2年生では数学の井澤能夫先生に徹底的にしごかれた。お陰で代数は得意になった。何しろ、批評が辛辣であつた。

3年生で各専門学科に分かれた。新学期の開始早々、森岡貞篤先生の機構学で忘れ得ぬ出来事があつた。「起立、礼」がすむと同級生の1人が立上って、「先生、僕は上級生にキタエられました。くやしいです。」と言った。先生はびっくりなされて、事情を聞かれると共に、「伝統ある我が校も、このような悪習が残っている。これをなくせねばならぬと我々教職員も努力しているのであるが、依然として根絶することが出来ない。」と諄々と説かれた。その時、先生の眼鏡の奥にキラリと光るものがあつた。「声涙ともに下る。」とはあの事であらう。「森岡先生は人格者だなあ。」と思った。

国漢の岡林九敏、上島茂彦、両先生のどちらかの授業で孟子の君子の三楽の講義があつた。「君子に三楽あり、而して天下

に王たるは与り存せず。」三楽の第一は父母が健在で兄弟に事故がないこと。第2は反省して天地に恥じることがないこと。第3は天下の英才を得て、これを教育することである。と講義されて、「わしも県下の秀才を集めて授業出来るのは三楽の一にかなっている。」とおっしゃつた。居並ぶ教へ子連中、恥かしそうに下をむく者は居らず、皆、自信にあふれていた。

卒業して大阪へ出た時、友人、古高義之君と出会つた。彼は大阪市立都島工業学校の卒業生で造幣局に勤めていた。都島工業学校は修業年限6年で、全国の工業学校の最右翼にあつた。（一般の工業学校の修業年限は5年なのに対し、この学校は1年多く教育した。）従つて、卒業生に対する社会の評価も高く、「下手な私立の大学卒より、都島の卒業生の方がしっかりしている。」と言われたものである。その古高君が「谷本君、君は高知工業の機械科の卒業生だね。君の同窓生で、もう亡くなられたが、奥田さんと云う人を知っているかね。」と聞かれた。「奥田さんは知らないが、どうしたのかね。」と訊ねると、次の事を話してくれた。以下、古高君の談である。

僕が造幣局へ就職した時、担当の係長が現場を案内してくれた。圧印工場の中の並んでいる圧印機のコイニングの治具を示して、この治具は高知工業の卒業生の奥田君が設計したものだ。優秀な人だったが、病に倒れてしまった。まことに残念至極である。君も奥田君に負けないように、いゝ仕事をしてくれ給へ。」と激励された。高知工業と云う古い工業学校のある事は知っていたが、先輩の奥田さんの功績を聞いて高知工業に親しみを持ったのだよ。

名簿を調べると、昭和11年3月、機械科20回卒業生、奥田博さんである。造幣局の圧印工場を古高君に見学させてもらった時「谷本君、奥田さんの設計した機械はこれだよ。彼は最早、この世の人ではないが、彼の設計した機械はこのように働いている。お互に、『この設備は、この機械は〇〇君の作ったものだ』と言われるようになりたいなあ。」と言つた。

入学の翌年昭和12年には支那事変が始まり、次第に戦時体制へと移行した。登、下校には背のうを背に負って、足はゲートル巻き。色々制約はあつたが、多感な少年期から青年期への移行の過程。伝統ある学校で、恩威兼ね備へた学識豊かな恩師の方々、俊英、綺羅星の如き同級生の諸君にめぐまれて青春の思い出はつきない。

「往時渺茫としてすべて夢に似たり」か。

終



俳句と母校

上 村 儀 定 (昭16電卒)

みいくさは酷寒の野をおほい征く 素逝

昭和13年当時数学の先生であった小松六居先生(後母校校長)が数学の講義のあい間にこの句が俳誌ホトトギスの高浜虚子選の巻頭句であると私達生徒(3年電気)に話してくれ、この句の内容のすぐれた点の説明をされ更に「みいくさは」と云う言葉の音感の格調が高いと云われたことを未だに記憶している。

当時先生は、同じ母校の英語の筒井三嶺子先生と共に土佐の俳誌「龍巻」の巻頭を競う俳人だった。その頃ホトトギスの雑詠入選は至難の技であったが、英作の先生であった植野桃林先生(後徳島大学教授)の

お天守へ向けてときどき花吹雪

と云ふ句が初入選でお祝いをしたことを聞かされた。この様な諸先生の影響で、私もぼつぼつ作句をはじめ、当時朝日新聞の四国俳壇で、選者鈴木花蓑先生にとって頂いた「かち渉る水にうつれる紅葉かな」と云う句が生れて初めて活字となったので、俳号をこの句からとって「涉水」と決め作句に興味をもち始めた。その後広島工専時代、軍隊の電波特甲幹時代は戦争の厳しさに俳句どころではなかったが、昭和31年四国電力中村営業所で私が俳句部を作り当初は小松(後八木)六居先生に郵送で御指導を頂いていたが、会社の隣の楓巖涛先生(ホトトギス同人)に指導して頂き本格的に作句活動をはじめた。当時の俳句部のメンバーに、井本勝(当時所長・大14・電)、浜口之孝(当時課長・前母校同窓会長)、西村孝彦(現四電高知支店営業部次長・昭26電卒)が居り3人共母校の同窓である。

その頃四電高知営業所にも俳句部が発足、その発起人は吉松のぼる氏(高知市議、昭14電卒)で、メンバーに故坂本勝美(大14電)故長尾茂(昭5電)、藤岡成誉(昭18電)各氏があり何れも母校卒業生であった。

その後私も高知に転勤。四電高知の南風会のメンバーとなって、毎月第2土曜が吟行会、第4木曜が例会と2面の句会で作句に励んだ。

この頃から現在までずっと俳句部の指導をして頂いている公文東梨先生は大正11年機械卒の母校の大先輩、先生は大阪高等工業学校卒業後大阪で就職、ホトトギスの高浜年尾先生より直接指導を受け、高知に帰られて、俳誌勾玉選者、毎日新聞高知俳壇選者、高知ホトトギス会会長等を歴任され、各地区の句会を指導されており、本県伝統俳句界の大御所的存在である。平成元年7月地域文化功勞により文部大臣表彰を受賞されたのを記念して、私が事務局を担当し、県下俳人350余名の協力で、先生誕生の地十市パークタウンに先生の句碑を建立した。その御句は

鴨の来ている月の沼暗けれど

と云う、句碑の前の石土池を詠まれた句である。

四電を定年退職後私は四国電気保安協会に勤務したが、ここでも俳句部を作って既に7年になる。四電南風会は発足後30余年何れもOBとなっても句会には出席しているが、メンバーに母校出身者が多いのに驚く。前記7名の外に本久義春(昭19電)、渡辺龍(昭11電)、近森一忠(昭12電)、中岡忠男(昭14電)間浩一郎、明石葛枝(昭20電)等々多士才々である。

又中西克喜氏(昭7機)は昭和30年頃既に俳誌「龍巻」の編集者として重きをなし現在あかつき会の指導者、ホトトギス会の重鎮で私達もお世話になっている。

現在高知新聞俳句の選者たむらちせい氏は昭和20化学卒にて本年県俳句連盟の会長にもなられた。又元県俳句連盟会長であった池禎章氏は電気昭5年卒であり、同俳連の役員尾崎晴光(俳号春水)氏は昭8卒の土木1回生である。まだ私の知らない同窓の俳人の方も多数居られると思われる。こう見ると現在、本件俳句界の有力メンバーに母校卒業生が多数占めていることは誠に心強い限りである。

本来技術の学校出身者が、俳句という一見異質の文学に親しむと云ふのは奇異な感もあるが、これは本業に対する反動か、俳句の世界へ寛ろぎを求めての逃避かとも思われる。

以上

思い出

浜 口 之 孝 (昭16電卒)

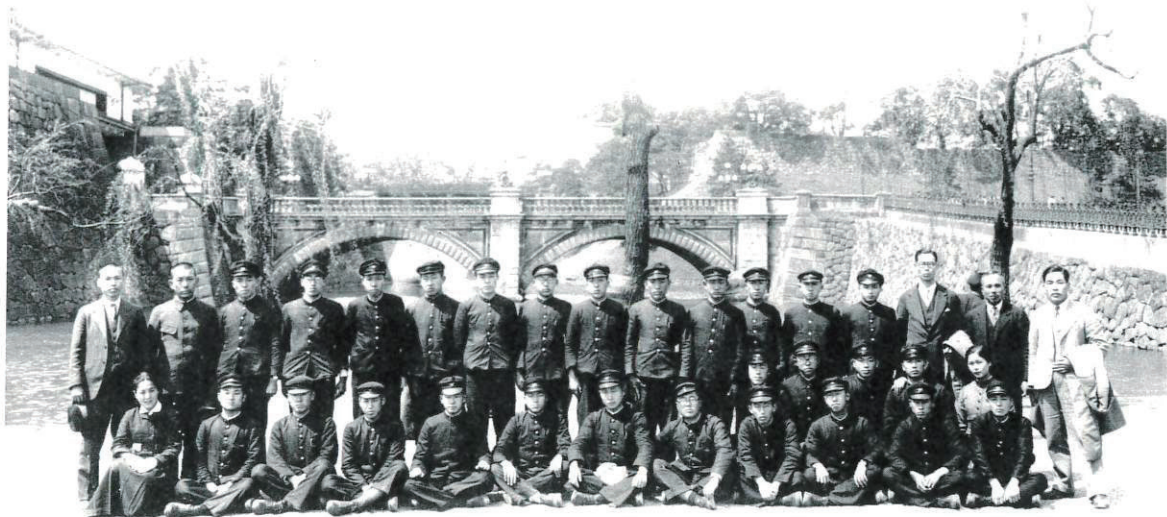
短靴はいて背のう(皮製カバンで真中に紐が通っていた、これは飯盒を持つため)を背負って通学していました。

毎朝運動場で朝礼がありましたが軍事教練の前哨戦のようにとてもきびしかった。授業の方も専門教科・普通教科共に難しく特に公民の教科は苦勞しました。私は歴史が不得手であり成績が悪かったので「一方堂」で参考書を買ってきて勉強し成績を上げました。

夏休みには集団作業と云って炎天下のもと全員が1週間~10日位やりました。その外に川内村の植林作業や一宮村で製炭作業もやりました。集団作業で印象深いのは長年待望の校舎新築移転も決定し当時校舎の3倍の敷地に鏡川原より砂利を車に積んで栈橋通りまで運搬しましたが、この作業は市立グラウンドの草刈作業と違って身近に感じ学校に泊りこんで頑張りました。

秋雨の降る中をグループで自転車こいで宇佐の浜まで遠足をかねて日帰り旅行をしたこと(今で云うサイクリングのはしり)、工場開放でマグネチックフィールドを作ってコマ廻しの装置を実演したり、管の中で放電させて(今で云うネオン)観覧者に見せたりしていましたが結構人気がありました。

先生の事、友達、先輩達また修学旅行の事が印象深く残っております。



修学旅行日程

| | | | | | |
|------|-------|---|---|--------------------------------------|---|
| 第1日 | 4月1日 | 月 | 前8:30 後1:46 後10:28 | 高知駅発 高松駅着 高松栈橋発 | 希望者0:26琴平駅下車金比羅宮参拝1:52琴平発高松着 3:14直チニ電車ニテ屋島ニ向フ栗林公園・高松市内見物 連絡船ニテ宇野經由神戸ニ向フ |
| 第2日 | 4月2日 | 火 | 前4:11 後0:44 後2:52 後5:05 後5:56 | 神戸駅着 神戸駅発 畝傍駅着 畝傍駅発 奈良駅着 | 簡易食堂ニテ朝食後湊川神社参拝工場見学及ビ諏訪山公園ヨリ神戸市及ビ港 展望中食(食堂) 大阪、天王寺、王寺ヲ経テ畝傍ニ向フ 電車ニテ橿原神宮神武天皇御陵参拝 奈良駅前、日の出館 1泊 |
| 第3日 | 4月3日 | 水 | 後3:10 後6:01 | 奈良駅発 鳥羽駅発 | 前8:00ヨリ神社仏閣参拝見学後2:30頃マデ 鳥羽海岸 角卯旅館 1泊 |
| 第4日 | 4月4日 | 木 | 後3:34 後5:51 | 宇治山田駅発 名古屋駅着 | 前7:54ヨリ二見内宮外宮参拝 名古屋駅前廣小路、武蔵屋旅館 1泊 |
| 第5日 | 4月5日 | 金 | 後9:14 | 名古屋駅発 | 前8:00ヨリ熱田神宮参拝名古屋城見学工場見学、市内見学 |
| 第6日 | 4月6日 | 土 | 前4:49 前9:23 前10:18 | 藤沢駅着 鎌倉駅発 東京駅着 | 電車ニテ江ノ島、長谷、鎌倉参拝及ビ見学 遊覧バスニテ市内見学後上野山甚ホテル1泊 |
| 第7日 | 4月7日 | 日 | | | 第1班工場見学第二班日光見学、山甚ホテル1泊 |
| 第8日 | 4月8日 | 月 | 後0:30 後6:30 | 新宿駅発 上諏訪駅着 | 午前中自由見学 諏訪湖畔 たかのゆ旅館 1泊 |
| 第9日 | 4月9日 | 火 | 前7:01 後6:06 | 上諏訪駅発 京都駅着 | 三條大橋東入ル 大正館 1泊 |
| 第10日 | 4月10日 | 水 | | | 前8:00ヨリ遊覧バスニテ桃山御陵参拝始メ市中見学 後5:00頃京阪電車ニテ大阪ニ向フ 大阪道頓堀日本橋 大日館 1泊 |
| 第11日 | 4月11日 | 木 | 後5:30 | 天保山栈橋発 | 前8:00ヨリ工場、大阪城天王寺公園見学後自由見物、汽船ニテ高知ニ向フ |
| 第12日 | 4月11日 | 金 | 前8:00 | 高知栈橋着 | |

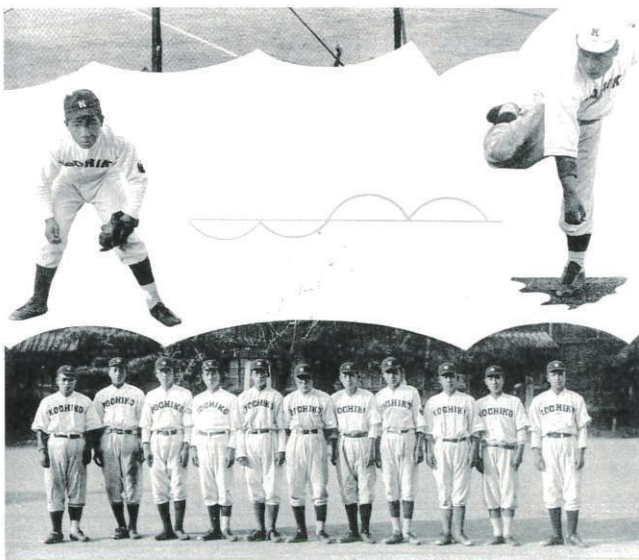
思い出

島崎 晋(昭16化卒)

介良・葛島・知寄町・中種・帯屋町コースを自転車で通学していました。野球部に入部していましたので、毎日授業が終るとユニホームに着替えて市設グラウンドまで歩いて行って練習をしていました。これが終ると学校に帰って制服に着替えをして家に着くのは毎日日が暮れて可成り遅くなっていました。教練のときには柳原で匍匐教練をよくやったし、背囊を背負ってゲートル巻いて学校と一宮間を鉄砲担いで4列縦隊で走らされた。だから体力は相当ついておった。今の生徒にやらせたら^{おおごと}大事よ、又教練の試験は難しかった歩兵操典と云う本から出ていた。普段はあまり勉強しなかったが試験の時にはよく勉強しました。そうしないと落第する。3学期の試験が終わったら家によくない。落第点があると家に手紙がくるのでそれが怖かった。優等生には○印が入るし、何番と出るし、通知票は点数でついてた。代数・幾何三角・微積・国語・漢文・物理・地歴・公民・修身それに専門教科があり授業時数も1日7時間あった。難かしい授業をやっており試験は1週間位あった。

品行方正ではなかったがはめをはずす事はなかった。先生より先輩が怖かった。先輩はこれが特権であるようにしてたたく、しかしこんな事があったのでつながりがあったと思う。

バザーでは石けんとか、クリームなども作って販売したがこれが仲々人気があったし、となりの第一高女の運動場にわざと野球のボールを打ち込んでそれを取りに行くのが楽しみだったり、映画を見に行かれないのにインバ(マント)を着て見に行ったら、教師にみつかって訓育部に呼ばれて叱られたり、電車通学のときにはラブレターがカバンに入っているし、楽しい思い出もありました。



母校に学びて……今

溝 渕 原 巳(昭16化卒)

私は昭和11年から昭和16年3月の時代の中で母校で教育を受けた。当時入学試験発表は「キ(40人)テ(30人)カ(25人)ト(20人)ケ(20人)」の専門科別各定数で、合格者が旧北校舎の北側に公示されたことを思い出す。この心境は今も昔も若者には変らないだろう。

入学後2年の期間は、3クラス「ABC」に分れ、普通科目の授業、3年生から各専門教科に分れて学んだ。特に7時間の時間割(土曜日4時間)で、真に学力の基礎を身につける実業学校として、全国でも名門校で評価されていることに誇りをもった。この蔭には創立以来の諸先生や先輩の努力であり、厳しい中でも温い愛情の気風の流れ、家族的な雰囲気の中で、授業に励み成長してきたと私は、いまだに忘れることのできない。在学5ケ年間で思い出の中で、昭和14年の秋、明治神宮大会へ1万米競技に出場参加できたことだ。体操の宮地先生に、君が開校以来2人目だと喜んでくれたあの時の感激は忘れられない。今思えば、我れながらよく走ったものだ。同輩らから「韋駄天の原巳」とあだなされ。数々の競技に出場参加。この鍛練と根性のお蔭で、中国大陸の2年有余の会社生活や南方各地の軍隊生活での3ケ年、戦後役所勤務30年余。これといった大病1つしないで、苦難を忍んで耐え健康で社会参加できたことはマラソン精神であると思います。

省みれば、いろいろありますが、人間の一生は、孔子の「30にして立ち、40にして惑わず、50にして天命を知り、60にして耳順い、70にして心の欲するところに従って矩をこえず」の故上島先生の大きい腹を叩いて漢文の授業が偲ばれる。

退職して3年目、常に海老の如く殻を脱いで成長する。常に若い新鮮で老衰しない心掛で、学ばなくてはならないと考えております。

いつも時の流れを見てあせらず、国際社会の中でしか生きられない世相ですから、あわてず、方向を探究して行きたい。同窓の皆様がこの母校で勉強され、立派な人物になり、立派な社

会的原動力をつくり、いろいろの方面に、いろいろな使命を持つ活動へ活躍されていることを見聞するにつけ、我が事のように嬉しく、同窓会の皆様へ心から感謝します。

母校の益々の発展を期待する次第です。(会報No.22号より)

創立80周年によせて 校主の先見—よき師—勉勵の同窓

柏井忠利(昭17機卒)

われらが母校高知工業は、宿毛市出身の竹内綱・明太郎(弟元総理吉田茂)によって明治45年(1912)5月私立高知工業学校として設立され、後県に移管、県立高知工業学校となり、名門校として大阪都島、西野田等と共に有名であった。

竹内父子の開校は、校歌の一節にあるように、／富国の基は工業の／発展進歩にあるぞとて／偉人の遺せし勲業ぞ／我が学び舎に輝ける／……。明治32年(1899)中学校令の改定・実業学校令・高等女学校令公布によって中等教育制度が整備される状況の中、民権運動家横山又吉(黄木)の「商人にも学問」をの主旨のもとに同31年簡易商業学校(市商の前身)が帯屋町に創立されており、県立農林学校も亦明治23年(1890)高知市北門筋、第一高女(現丸の内高校附近)に早くも創立されていた。

大正10年(1921)には弘岡に組合立弘岡農業学校(県立弘岡園芸高の前身)ができるのである。

市商創立と併行して、明治28年(1895)信清権馬によって江陽学舎が新町(桜井町2丁目・現県立中央病院)に設立され、明治から大正にかけて実業教育充実の世論の高まりと共に城東商業学校(高知高等学校)として発展していったのである。

このように実業教育では早くも市商・城商農業と開校されてはいたが、産業経済の主軸をなす工業技術者養成の学校は県内皆無であった。実習用機械・動力・設備など多額の経費を要したからである。

明治政府が一貫して執ってきた富国強兵政策に自由民権運動にも加わった竹内は強兵より産業の興隆による富国を主張したが、野党的立場であったので如何ともし難く、意を決し、私費を投じて私立の工業学校を設立し、長男明太郎が経営する佐賀県唐津鉄工所で制作した当時一流の工作機械(ボール盤・平削機・ラジアルドリル・旋盤など)を設置した実習工場を持つ工業学校としたのであった。

竹内は遠く秋田県がわが国有数の鉱業県(石油・銅・金・銀・鉛など)であることからここにも、わが母校創立よりも2年前の明治43(1910)に、全国ただ1つの鉱山専門学校として定評のあった秋田鉱山専門学校を創立しているが、新製の秋田大学鉱山学部(冶金など6学科)として同大学の主流をなして今日なお健在である。この考えは高知工業創立に際し、土佐に多い石灰岩などの地下資源に目をつけ採鉱冶金科を後に開設している。この第1回卒業の吉村氏が今日の大阪窯業の土佐石灰開発

の先鞭となったのである。

亦長男明太郎は同郷の小野梓が大隈重信の委嘱を受けて創立した早稲田大学に理工科の新設に尽力している。このように父子共に衆議院議員、実業家として活躍し、産業教育の振興に貢献している。五男吉田茂は周知のとおり。

☐懐かしい恩師

北与力町の中校舎中央は南北校舎に通ずる通路がありその西側に職員室があった。われわれ生徒はこれを水族館と稱して畏敬していた何となれば、訓育部長宮地豊喜先生(ゴリさん)軍事教官北村特務曹長=後准尉と改稱(萬特から鰻特そしてウナギ)剣道の坂本土佐海先生(鯉、刀の鯉口を切るから連想)漢文の上島先生(お腹が膨れていたので^{ふぐ}鰻豚、他に文法で可の説明を繰り返していたのでベクさん)英語の植野先生(頭髮モジャモジャで中央につむじ、^{かっぱ}河童)柔道の浮田先生(堂々たる大型、いつも和服に袴、^{はかま}鱈)地理、歴史の深田先生(額の^{しわ}皺が蟹の^{こうら}甲羅に似て、蟹さん)等々先輩からのものと、われわれ不埒な輩が捏造したものもある。この水族館の先生方の授業は2年までABCの3組で行われ、3年になって機械科(キ)電気科、化学科(テカ)土木科、建築科(トケ)の3クラスに分れていった。

各先生方のニックネームにまつわる思い出で忘れられないのは、深田(蟹)先生、北海道の水産物の所で鯨・鮭・鱒・鱈・昆布・^{いか}烏賊までは声が大きく、近時蟹も獲れるはムジャムジャで終り、西洋史の2世紀ごろ印度のクシャーナ朝の加膩色迦のところも同じく小声でさっさと済まし、何れも試験に出たことがないと言われていた。(ご子息は市内堂橋で小児科医院)旭小の校医も勤めている。

美術(繪、用器画)の森先生(鼻が大きく高いので天狗)この先生、国語の先生の代りの授業で、たまたま吉野山のところ、芭蕉の「これはこれとはばかり花の吉野山」のところを不運極まる愚生「これはこれとはばかり鼻の森先生」一同爆笑、先生怒るかと思へば一緒にケラケラ、こんなことから後日土居町の鏡川堤の近くのお宅に伺って金魚をいただいたこと、稚魚の時は鯛と同じく黒銀色であって、大きくなって色が変わることを教わった。亦先生は戦後県展の工芸の審査員などで活躍しておられた。

漢文の岡林九敏先生(九は十に近いので本名はチカトシ、キュービン)瘦身鶴の如き漢学者、たしか「鯨鯢吼ゆる……」の校歌の作詞者だったと思う。この先生廊下で、饒古の若い先生と口論、黙って相手に言いたいだけ喋らして、おもむろに「おまさんそりゃ滅相、^{めっそう}ごいざりませよ」と飄々と立去った。弓道部の部長さんでもあった。惜しむらく高坂高女へかわられた。(ご子息は陸士に入り)軍人、戦死された?)

高坂高女へもう1人数学の畠山光英先生(数学の公式記号のガンマを繰り返す数十回、ガンマ先生)は教頭で行かれた。アメリカ移民の成功者北川渡氏が戦前帰郷し戦時中県造船の専

務をしていて「北川育英基金」を創設し、これをガンマ先生が預り学生に給与していた。余談ながら終戦後、北川氏のお世話になった方達がガンマ先生の連絡で北川産業に集って一時お手伝いをしたのであった。この中に漫画家のやなせたかし、現テレビ高知社長の岡村大・兄さんの卓氏など数名がいた。ガンマ先生は県の教育委員会も勤められた。(ご息は高知大の教授で放射能測定で有名、早逝)

電気の宮地格馬先生(カクマ)は、製図提出日に遅れて「先生書く間(カクマ)がありません」「カクマはここにおる」とにっこり。格馬先生は、同期生の寺尾豊氏の東京大森にある関東正機に破格の専務として迎えられたが就任1年程で病没され、寺尾氏の配慮もあって母校で校葬が行われた。この2人の友情は、母校卒業後阪神地方に就職した頃、生活困窮の果てに出直しを決意したが郷里に帰る船賃もない寺尾氏のために夫婦の着物を質に入れて6円の金を渡した温情に報いたものであった。

英文法の筒井先生(モボ) 勤労部?の部長で夏休みに川内村大内(伊野町)中の谷にあった学校植林の下刈り作業に生徒と一緒に山に入られた。作業用の鎌など同窓生の西村文男宅で保管されていて当日は父君が数十丁もの鎌を研いでくれていた。先生も在校中逝去された。(奥様は幼いご息を養育のため助産婦の資格を取られて、後年高知市の母子保健推進員などで活躍されているし、ご息は母校から京大を出られ、国連のFAO(食料農業機関=本部ローマ)に派遣されていた。)

宮地豊喜先生(ゴリさん) 体育、生理衛生・訓育部長として他校にも雷名轟く存在で、予備役の少尉でもあった。生理の授業中「先生子供はどうして生れますか」「それは男性と女性の神聖な行為で生れるのだ」この神聖な行為という言葉は暫くクラスで流行した。国民体操、建国体操、体力章検定などを指導された。(ご息は京大卒後高知大教授、他1人は建築士会リーダー)

英語の藤本先生(マイダス=授業中廻りだす)、土佐中に変られた数学の山岸先生(蛮ちゃん) 浪曲好きの国語の藤沢先生(居眠りしてると良い点トラゾウ「広沢寅造」という、藤沢薬品のトレードマーク鐘撞様に似て髯が濃い=藤沢の樟脳)など多士済々良き先生に恵まれ幸いであった。この他失礼極まる紳名の素晴らしい先生が思い出に鮮明であるがご健在であるので割愛する。

☑思い出に残るできごと

ニッポン号(大毎・東日機) 世界一周飛行へ昭和14年(1939) 8月26日羽田を飛び立つ。この機関員として卒業生八百川長作氏が乗り組む。在校生は山田町八幡宮に成功を祈願。壯途を讃える歌「わがニッポンはまつしぐら/6万キロの空を飛ぶ/…」

10月20日帰国、母校へ報告講演に来訪、プロペラに水滴が氷結するのを防止するため油を噴射しながら飛行した事、機関のノッキングを防ぐのにアンチノック剤4エチル鉛を加えたハイオク燃料を使用した話など興味深く拝聴した。

昭和16年修学旅行生が赤痢に集団感染し体力回復が不十分とあるので、秋の中等学校の合同演習に4年生で参加、翌年は当

然の参加で2年連続、立田、田村(南国市)方面に散開、遭遇戦演習、朝倉の連隊長講評「極めて良好」で快哉、意気揚々と帰校したことなど思い出は尽きない。

火頭水身科学技術の粋を極め世界へ羽ばたけ、2万余の同窓のご健勝と、母校の発展を祈り拙筆を擱く。

昭和17年12月卒業生合同同窓会と母校に残るクスノキ、正門・門柱のつぶやき

松本英夫(昭17電卒)

卒業50周年各科合同同窓会に48名が集う

平成4年4月4日、高知市は「浜長」において、昭和17年12月卒業生の各科合同同窓会が開かれた。総員48名が集い恩師を囲んで、卒業以来という同窓生も多く久方振りに、大いに旧交を温めることができた。

今年に入って、東京在住の大川良助君(カ)はじめ多くの同窓生諸兄から、在高の浜田浩一君(カ)ほかへ“卒業50周年の大きな節目に、是非同窓会を!”—との声が寄せられていた。2月29日に各科世話人が寄り諮ると、「学校創立80周年で前回の合同同窓会からも15年目となる。時宜はよし、善は急げ」「4月4日(土)にやろう」と決まる。分担して計画は急ピッチで進められた。

当日は、定刻の6時前に同窓生諸兄が続々と「浜長」会場に到着。早くも、あちらこちらで、その昔の思い出話に花が咲く。

藤田宗一君(キ)の司会により開会を宣し、戦没などによる物故者に対し黙禱を捧げる。世話人代表として森光辰夫君(キ)より、「50年の苦節を乗り越えての再会を喜び、今後の同窓生の健勝と発展を祈る」との挨拶。

ご招待の永瀬邦男先生と小松一夫先生からは、含蓄に満ちた人生訓と教え子たちへの励ましのお言葉をいただく。河路守路君(テ)と浜田浩一君(カ)から両先生への記念品贈呈の後、全員が記念撮影。北村康彦君(ケ)より、「同窓会のご盛会を祝す」との同窓生5名からの祝電を披露する。

鯨鮫吼ゆる南溟の 怒濤逆巻く快天地

万岳の翠北に負い ここに生れし健男児

岡林九敏先生作詩の「校歌」を、エレクトーン・カラオケ伴奏により、全員で斉唱。県外の遠くからは、11名が参加。仙台市に在住の島田好生君(ケ)から、「再会を祝し、今夜は楽しく呑み語ろう」との音頭により乾杯、開宴となる。

時間とともに、献杯を交わすピッチは早くなり、お互いの話もはずんでくる。

「おお、久し振りじゃのう。元気で何より。わしも、今のところはピンピンぜよ」

「卒業以来じゃのう。おまんは、学校の時と少しも変らん
のう」

「南方の〇〇戦線では、もう一寸で死によった。おまけの
人生を、よう生きたもの」

「あの時の彼女を嫁に貰ってのう。今じゃ子供が2人で、
孫は5人ぜよ」

「孫の結婚式に、おじいちゃん出席したい、と言ってあ
るが。その時は90歳よ」

「〇〇君は今夜見えんが、元気じゃらうか？」

話題は、学校時代のこと、軍隊・戦場、引き揚げ、仕事、家
族、趣味、スポーツ……、そして健康、老後のことと果てしな
く続く。

卒業生総数は130名。今、物故者は32名を数えその4分の1。
同窓会には46名の諸兄が出席されたが、諸般の事情により、ほ
ぼ同数の諸兄が欠席されている。皆んな「長寿手帳」（老人手
帳）を貰える年齢となり、70歳も手に届くようになった。

宴たけなわ、次回の合同同窓会について緊急動議が出され、
意見が相次ぐ。

「次回の合同同窓会は、10年後かよ」

「いや、それでは皆んな年をとりすぎる。5年後は、どう
ぜよ」

「各科ごとの同窓会は、有志がフリーに適当にやるのも、
よいのう」

「ミニ同窓会は、年に1回以上かよ」

など、色々の意見が出つくす。藤田宗一君より「合同同窓会
は、5年後をメドにしよう」——とのまとめに、全員が拍手。
カラオケ演歌に興が乗ってくるし、宴はますます盛りあがって
くるが、夜も更けてくる。

森田圭一君（ト）により「誠に名残り惜しいが、お互いの今
後の健康と長寿を祈り、早い再会を期して」との音頭によって、
全員が声高らかに万歳三唱。盛況裏に閉会となった。

同窓会は、以上、遠路からの方々をはじめ多くの皆様方ご
出席とご協力をいただいた。また土居不曇（テ）、森田宏樹
（カ）、永森友喜（ト）の諸兄よりご芳志が寄せられ、東巻原
斉（キ）、甲藤（井川）憲一（テ）、土居不曇（テ）、近森寿
男（ケ）、中内和夫（ト）の諸兄からは祝電が寄せられて、会
が大いに盛りあがった。その他、数多く影のご支援もいただい
た。ここに同窓会事務局として、皆々様に対し心から厚くお礼
を申しあげる。

なお、世話人相語り、会費の一部を母校創立80周年記念事業
に、心ばかりの贈呈をさせていただいたことを、ご報告いたし
ます。



中央でリボンをつけられた小松先生と永瀬先生（左から）

同窓会に先だって、「懐かしの母校は、今——」と、何かの
話題にと思い、久しぶりに母校を訪ねてみた。私は、北与力時
代を昭和13年4月から17年3月までの4年間、そして棧橋通り
時代は、17年4月から12月の卒業までの9カ月間をすごした。

日支事変、太平洋戦争と戦時中で、流行歌は、「雨のブルー
ス」から「蘇州夜曲」「空の神兵」とつづき、映画は「愛染か

つら」から「宮本武蔵」「ハワイ・マレー沖海戦」とつづいて
いた頃。正に敗戦へ転がり落ちようとする寸前までの時代であっ
た。

北与力の旧母校跡（現・高知女子大）には、大クスノキだけ
が残っている

旧母校跡は、戦後に県立高知女子大学となってから久しい。そのキャンパス南西の隅（旧南校舎の西端＝正門を入れて右手）に、懐かしいクスノキだけが残っている。目高で、大人の腕で2人分の大きさ（直径約1.5メートル）。樹高は、20メートル近くあろうか。大クスノキは、青葉への衣替えを迎えようとするところである。

昔を偲んでいると、“大クスノキのつぶやき”——が聞こえてくる。

- ・柔道場からの声は、たくましかったが、向かいのワン（第一高女）の女学生をてがう（からかう）2階製図室からの奇声には、めったぜよ。度がすぎて、先生から、たこつられた（叱られた）者もおったが……。
- ・夏休みになると学校で合宿訓練があって、豚汁の匂いはうまそうだったが、近くの窓から流れてきたタバコの煙が、目にいや葉っぱに、よくしみたものぜよ。
- ・ワンの講堂からは、毎日ピアノが聴こえていた。うちの講堂からは、T先輩のオルガンで弾くショパンのピアノ曲が聴こえてきた、全校生徒の総見が一度だけあった。昭和15年のことだったらうか。
- ・工業学校創立の明治45年（1912年）から、棧橋通りへ校舎移転の昭和17年（1942年）までの30年間は、毎年新入生を迎えまた卒業生を見送ったものよ。
- ・あれから50年後の今日、3月21日は高知女子大の卒業式で、袴姿の卒業証書を手にした娘さん達を、見送っているところぜよ。



北与力旧母校跡に残る大クスノキと卒業式帰りの高知女子大生（左下）（平成4. 3. 21写す）

昭和17年4月8日、北与力の旧母校は、校地狭隘（3,000坪）のため、棧橋通の現在地（9,700坪）に移転された。

棧橋通りの現母校には、高知空襲を知っている正門・門柱が残っている。

訪ねたのは、合同同窓会当日の4月4日（土）の正午前、雨のあがったばかり。正門・門柱は、昔のままだ。大きさは、高さ2.7メートル、幅0.7メートル、奥行1.1メートルで、2基。左側の門柱には、50年前の「高知県立高知工業学校」の門札が、はがされた跡が見える。

ここでも、昔を偲んでいると、“正門・門柱のつぶやき”——が、聞こえてくる。

- ・北与力から此処へ移転の時、ご真影（天皇陛下の写真）と「校旗」を捧げて銃剣で護り、全隊列を整えて靴音高く「ザック、ザック」の生徒達は、勇ましく格好がよかった。行軍や演習の時も同じだったぜよ。
- ・登下校時には、制服制帽、背囊（はいのう）、革靴、ゲートルの着用が励行されていたが、雨の日には、資源愛護のためか下駄がOK。番傘さして、足にゲートル巻いて「カラン、コロン」の音には、風情があったのう。
- ・昭和20年7月4日未明の高知大空襲で、全校舎、工場、図書館、道場等が全焼するのを見た。焼夷弾は「バラ、バラ、バラ」、校舎は「バリ、バリ」と燃え上がる。火の粉をかぶったが、それは、すごかったぜよ。（私は徴兵検査で帰省中、後免く現・南国市>の叔母の家から、線香花火のように糸を引く焼夷弾落下を遠眺したことが、忘れられない。）
- ・正面玄関の両側に、学校創設者の竹内綱先生と竹内明太郎先生の胸像があるが、これは2代目で昭和29年に再建されたもの。昭和6年建設の初代の像（本山白雲作）は、戦時供出させられたぜよ。
- ・50年前に北与力から此処へ、蘇鉄とセンダンの木を持ってきた。今、蘇鉄は正門を入れて左手と玄関前の2カ所にある。センダンは、学校の東北隅、化学実験室の隣にあるぜよ。忘れんと見とうせ。



玄関前の竹内綱先生像（右端）と竹内明太郎先生像（左端）。
「蘇鉄」は、50年前に北与力旧母校から移植されたもの。

北与力の旧母校のクスノキは30年間、棧橋通りの正門・門柱は50年間、延べて80年間にわたって、在校生を見守り2万人の卒業生を見送ってきた。生き残りの証人のようなものである。卒業生は、高知県はじめ全国いや世界の各地で、科学技術の向上と産業、経済、社会の発展のために活躍されている。

今、母校では待望の校地拡張がされて、新体育館が完成し、平成4年11月22日、ここで学校創設80周年記念事業が行われた。

母校は、今後も飛躍、発展をつづけよう！

卒業生・在校生と学校との間を、いつまでも心をつぶさることのできる「恩師」と「創立者の像」や「校歌」のほかに、“何かがある”——ことは、すばらしいことだと思う。

北与力のクスノキは、樹齢100年を超すといわれている。現地で「保存樹木」としての指定は受けられないか、これは最低の願いだ。クスノキの現母校構内への移植は、手続き、予算、移植・運搬方法等で、難しいだろうか？

創立88周年記念事業（米寿の年）に母校を訪ねると、「正門の門柱」「竹内綱・明太郎両先生の胸像」「蘇鉄」「センダン」、それに北与力から移植された「大クスノキ」の5点セットが、それぞれに“由来の碑”も付いて、卒業生を迎えてくれる。——これは、私だけの夢であらうか。

今、また“大クスノキと正門・門柱のつぶやき”が、——「今のようにお互いが離れていても、また、若し将来近くで並ぶことがあっても、多くの在校生を見守り、卒業生を見送り続けてきた歴史だけは、大切にしよう」——と、遠くから聞こえてきた。

母校に残る同窓生との心をつぶさるモノを見直して、その由来を明らかにしておきたいものである。

以上

思いでと予言

戸田尚夫（昭18機卒）

忘れもしない12月8日、大本営発表本日未明英米と戦闘状態に入れり。

勇ましい軍艦マーチと共に次々と戦果が発表され、それはそれは大変勇ましい朝でした。

この当時母校は城の北東部北与力町、廿代橋の袂に有り、西側に第一高女、少し南に土佐高女、城東中学、男女2校の学園地区で有った。

高知工業は木造2階建校舎2棟、工場実験室平屋2棟、校庭の隅に図書館が有り、当時の学校では珍しい事で有った。

又この様に4校が接近しているので登校、下校の際は仲々面白い事が数多く、エピソードが生れて訓育部の御世話になる事が多い。

現在の位置に変わったのは4年生の時です。

登校、下校の服装は足に「ゲートル」背には大きな皮カバン、現代の姿とはまるで異なる戦時色で有り、又上級生への挨拶は「敬礼」これを失すると大変な事になった。

この朝は特に配属将校の姿が一段と輝いて見え、全校朝礼時局に対する訓示その後各教室に入るも、各時間共授業どころでなかった。

各先生方も時局の話で半分以上の時間を取る、丁度小生等の担任の時間が3時間目、この時は授業どころかまるでフリートキングの時間となって、数名が次々と教壇に上り戦争に対する私見を熱弁する。

私もその一人で、我国の技術力は航空機や戦艦大和の如く世界一だと聞かされ又そうだと信じていた。

この時代は何分にも精神力、大和魂が物事に優先する時で、何か不足すると精神力で補充せよとの訓示が多い、私もその通りと思っていた。小生の話は戦争は精神力では駄目だ、それに今後の戦争は科学技術力の競争となり、最後の勝利はこれに勝った者であると予言めいた発言をする、何か気まずい思いも有り、仲には冷笑する者も有った様な気がした。

なぜ此の様な発言になったか考えて見ると、私はこの時、少年倶楽部やカルタ等の空想科学が頭に浮かんでいた。

水陸両用戦車、ロケット砲、ジェット機、火炎放射器等科学者の夢と空想がカルタに表現されていた訳で、この様なものは夢で出来るものか、と想っていた。

技術力、科学力が勝利と強調した私も変な事を言ったものだと今でも思っています。

併し夢は正夢、時代が進むにつれて次々と空想が実現している事には驚いています。

初戦では大々的な戦果をあげたが物量と科学、技術力で南方の島々に1ヶ月程度で飛行場や基地を建設した機械力、電波探

知機、ロケット砲、水陸戦車と最後は原爆となり、日本の竹槍精神と科学技術の差が結果となり終戦となる。

我が国でも色々と武器が研究されて終戦当時にはジェット機がテスト飛行するなど、完成されていたがタイミングが合わなかった。

それで精神力は大事だ物事を完成させるには絶対必要で有るが、両者がマッチする事が一番大事な事で、我が国ではこの所に問題が有った様に考えます。

終戦後廃墟と化した日本がこの様な繁栄をするとは夢にも思っていないかった。

先進国の科学技術力を追いこせ追いこせと官民一体となって、日夜研究努力の結果が今日の繁栄となっている。

開校80周年も後わずか、この様な時代になる事を予言した意味深い校歌。

「富国の基いは工業の発展進歩に有る」と先輩が作詩した校歌こそ偉大な先輩が歌に托した予言と言っても良いと思います。

今後益々学校の発展進歩を計り国家繁栄の基礎として貢献する事を祈願してまづい文を終わります。

最後に 母校に夢を!!

人生に夢を!!

創立80周年を祝う

山 崎 米 蔵 (昭18機卒)

今年は日米開戦50周年に当たります。米国では国を挙げて記念行事を行っている様で戦争に負けた我々にとっては、東西冷戦終了、湾岸戦争、カンボジア和平、ユーゴ内戦等現世界状況と比較してまことに複雑な心境であります。しかしながら敗戦後45年間も国際紛争に巻き込まれることなく平和な年月を経過して来れた事は、それ以前50年間に国の存立を賭して4回も戦争を繰返して来た我国にとって全く夢のようなことで、平和の有難さをしみじみと実感する今日この頃であります。

母校創立80周年の記念すべき年来年にひかえた、在校当時の記憶をまさぐりながら拙文を寄稿する失礼をお赦し下さい。私達昭和18年卒業生は昭和14年4月入学し18年12月に繰上げ卒業しました。昭和12年から始まった日支事変は16年12月8日日米開戦と共に太平洋戦争に拡大突入、20年8月15日日本が連合軍に対して無条件降伏をする形で終了しました。開戦後17年春母校は北与力町から現在の潮江に移転しました。春休み中連日の如く引越作業の勤労奉仕があり、大八車に机椅子学用器具を積載数人で引っぱり、押しつゝながら北与力町と潮江の間をピストン輸送しました。1年生から5年生までの学用品や実習用の諸器具を夫々の学年生が大八車をつらねて運ぶ姿は壮観で、新校舎に移転する喜びと興奮、更に時局は日を追って緊迫の度を加え、日常生活も耐乏を強いられつゝあった状況においては、子供心にも非常時下をよく認識して頑張ったものでし

た。第1学期は未完成の校舎で始まり、整地されていない運動場は朝礼後や体育教練の時間に土ならしや石ころの片付けなど文句も云わずによく働きました。すでに5年目に入った日支事変は総力戦の様相を濃くしつゝあり、生徒の通学は編上靴にゲートル巻、女学生はモンペ姿と云う勇ましい服装になり、電車バスは学校の数キロ手前で下車徒歩が強制されていました。木炭車と云う漫画的な車が走り出したのも確かこの頃からと思います。A B C D包囲網と云う日本に対する経済制裁軍事圧迫が連日新聞紙面を被い、再三にわたって日米会談が繰返され、一億一心高血圧症にかゝったかの如き状況で日米開戦に突入してゆきました。

私達機械科の主任教諭は故島内義明先生で、生徒達と同じくイガクリ頭で丸い顔をズングリしたたくましい肩にのせ、茶目っ気たっぷりな丸い小さい目をパッチリ開いて、ある日突然次のような夢物語りをされました。カーキ色のハイカラー国民服は猪首の先生にはたいへん窮屈そうでした。

先生「君達今私が立っているこの場所を真下に掘り下げてゆくとどこに到達するかわかるか」

生徒「地球の中心に達します」

先生「中心から更に真直ぐ掘り進んで行くとどこへ行くとと思うか」

生徒「わかりません」

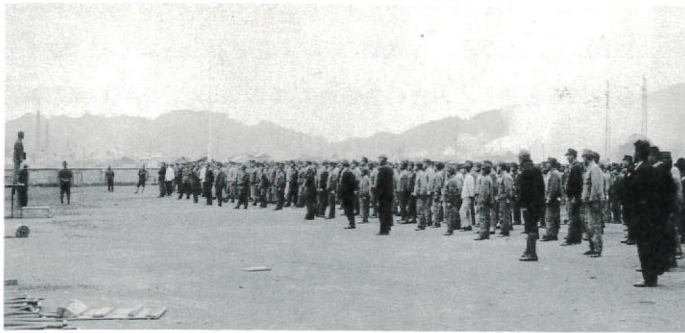
先生「アメリカに到着する。マイアミの浜辺にポッカー穴があいてそこから日本人がとび出てくるとアメリカ人びっくり仰天するだらう」と謎のようなことを云われました。更に「日米若し戦っても日本は神国だから大丈夫だ」と丸いあごを心もちつき出して遠くに視線をやりながら、しばらく思考にふけていたお姿を今でもはっきりと思い出します。生徒達にも軍召集がぼつぼつ出はじめた昭和16年の夏頃だったかと記憶しております。

機械科の実習教材も次第に潤渇でした18年12月6日、私達は12月末に卒業する同級生に先がけて繰上げ卒業し松山海軍航空隊に入隊しました。老いも若きも男も女も何もかも愚かれたような自暴自棄興奮状態で敗戦の坂道を転がり落ちた末に20年7月3日B29 131機、7月4日60機が高知夜間爆撃紅連の炎の中を細工町から廿代橋詰に、川に飛びこんで舟を拾い山田町の八幡様へと逃げ回り九死に一生を得てから1ヶ月後、8月6日広島に原爆投下、15日敗戦の玉音をガーガーと音声のはっきりしないラジオで聞いて訳のわからぬ間にピリオド。大日本帝国の暴走と軌を一にした我青春、悔みても詮ないことながら我青春大いに悔ありと云わざるを得ません。

歴史とゴルフに「もし……なかりせば」は禁句ではありますが、島内先生の願いもむなしく平和ひとたび崩れなばその悲惨さは名状し難く神も仏もありません。更に戦後にのこされた精神的な荒廃を克服するには世紀を必要とするでしょう。

巷間日本は戦争に負けてよくなったと云う人もありますが再び戦争の無い事を祈ります。

母校移転50年真珠湾奇襲50年を越えて来年は母校創立80周年を大いに祝い、更に平和な時代がいつまでも続き次なる100周年を祝福したいと想うのは慇ででしょうか。 合 掌



入学試験当日の思い出

西 田 文 洋 (昭18電卒)

佐川小学校6年生の昭和14年3月初旬、中学校受験希望の同級生が、先生に引率されて高知市内の中学校へ、先づ県立海南中学校(現小津高校)へ、立派な校舎、特に印象に残ったのは所々が先の角張ったコンクリート塀。高知城と勇ましい山内一豊の銅像を見て、次に希望の県立高知工業学校へ、大きな学校が見えて来たぞ、あれか！こちらは県立第一高女(現丸の内高校)。この前の学校が高知工業学校、なに、古い木造の小さい学校、運動場も狭く何か失望的、先生曰く、この学校は県下のトップクラスでないと入学はむづかしいぞ、ますます不安。続いて県立城東中学校(現追手前高校)へ、おっとびっくり、時計台のある堂々とした建物で周囲は塀、一きわ目立つ学校。どこで？食を取ったのか忘れたが、次に棧橋通りの市立商業学校へ(現在塚の原へ移転)この学校も木造で古いが、運動場は広かった。

友と見て来た学校の印象、1位城東中学、2位海南中学、3位市立商業、4位高知工業となる。

入試当日、友と2人で控え室へ、早速前の机の2人と話し合う、君は、江ノ口よ(後日、近森君、田内君)君らは佐川よ、(北川、西田)、体格の大きい兄貴の様な受験生も多く心細いカギリ。

控え室の監督の先生は丸顔、小太りの呑気な父さんタイプ(後日、漢文の上島先生)、受験生を1人ずつ、お前はどこの産ぞ！ハイ、江ノ口です、お城下か、次は、佐川です、酒と櫻か、次は、東津野です、山猿か、と云う具合、丸いお腹の上に手をあてて歩く、緊張が少し安らぐ。

本年より学科試験が無く、偉い先生方を前に口頭試問、次に身体検査、体力検査と続く(担当教員の中に北村特務曹長の顔を後日思い出す)

発表日幸にも2人とも合格、東は甲浦・室戸、西は宿毛・清

水、南は長浜、北は本山・池川と県下一円、又台湾からの曾君を含む約150名が同級生となる。以後1年～2年生はA・B・Cの3組で普通科の授業、3年～5年生は機・電・化・土・建の科別の授業。

昭和16年12月8日太平洋戦争に突入、このため昭和18年12月に繰上げ卒業となる。来年は卒業以来50年になり、入学当時の若者も年を重ね、65才以上となります。

同窓会大阪支部(鯨工会)の回想

北 山 知 旨 (昭18化卒)

母校80周年記念行事の一環として記念誌発行に際し、寄稿の依頼を受け、この上なき光栄と存じております。生来書く事が不得手で何を書けばよいかわかりませんが折角の御指名でもありますので、昔の同窓会大阪支部の状況を思い出し乍ら述べる事に致しました。

私は、昭和21年9月に来阪、当時の早川電気K.K.(現シャープK.K.)に入社しましたので最初に大阪支部の同窓会に出席したのは、昭和25・6年(25・6才)だったと思います。(あまり昔の事でははっきりとは記憶にないのですが)会場は千日前戎橋の「北極星」で当時の支部長は、初代の松村幸兵衛氏で出席者は20～30名で、会費は700円だった様に思います。兎に角、出席者の中で私が一番後輩で先輩の方ばかりでした。懇親宴会の際、新会員は出身地等自己紹介した事でした。

扱て、2代目支部長は並川安幸氏、3代目安岡一郎氏、4代目山崎(市川)米蔵氏、5代目中西清氏、6代目松田公一郎氏(現支部長)で歴代の支部長を始め、先輩諸兄の御尽力に依り、今日の大阪支部の発展を遂げたものであります。私は、昭和37年、3代目支部長に安岡一郎氏が就任された際、副支部長に任命され、微力乍ら支部長の補佐役として、御世話させて頂きました。当時は在籍人員約500名で総会の会場は毎年(昭和45年頃迄)千日前の「北極星」で会費は1,000円、年次会費300円でした。総会準備の会議も安岡支部長と2人だけでした事もありました。総会の案内状の手配、宛名書も現在の様に、ワープロも無い時代でしたので、会社から帰って、毎晩数枚づつ宛名書や出席予定者の胸章のリボンに氏名書、総会当日の受付も私1人でやった事もありました。

以後、会員も年々増加し、現在では約1,300名の在籍人員になって居りますが、最近ややもすると、年に一度の総会に出席者が少ないように見受けられますが、出来得る限り御出席下さるように、支部会員の皆様に御願い申し上げます。

私達役員一同も、同窓会発展のため、努力致したいと思っておりますので、会員の皆様の御協力、御援助を切に御願い申し上げます。

とりとめもなく執筆致しましたが、終りに、母校の益々の御発展と同窓会の皆様の御健勝をお祈り致します。

大阪支部（鯨工会）を語る!!

出席者 山本延美（昭4化卒・相談役）
池上 実（昭9機卒・相談役）
岡添 紳（昭16電卒・相談役）
中西 清（昭16建卒・顧問・元支部長）
山崎米蔵（昭18機卒・顧問・元支部長）
西川政忠（昭20建卒・常任理事）
吉岡利雄（昭23機卒・現支部長）
椎葉光子（昭35化卒・常任理事）

（司会者）保木時男（昭27化卒・副支部長・記念誌発行委員）

吉岡 本日はお忙しいところ、わざわざご出席賜わり有難うございます。母校開校80周年記念事業の一つとして記念誌が刊行されます。同窓生の方々に玉稿を頂いていますが諸先輩方を囲んで昔のご苦労話、思い出話、現状での話題、鯨工会としての将来へのご要望的なご意見をお聞かせ願いたく座談会を計画しました。よろしくお祈りします。

司会 大阪支部の初めのころはどうでしたか。歴代支部長さんについても聞かせて下さい。

中西・山崎 古い人達がなくなられて詳しいことはわかりませんが記録をみてみますと初代支部長は松村幸兵衛さんですね。（大6電卒・宇治川電灯・現関西電力J・故人・大13年～昭34年）

大阪支部が結成されたのが大正13年でそのころはまだ組織だったものではなくて、お互いに連絡をとり合って15～16名位が天満橋あたりで会社の寮の様な所に食べに連れて行ってもらうような感じの集まりだったと聞いています。

山本 松村さんは若い者が好きでしたのでよく声をかけて集められ宴会にも連れて行って行っていました。私も「お前ら出て来い!!」といわれて今里のレジャークラブや梅ヶ枝町の関西電力の寮でご馳走になったことを思い出します。まあ僅かに集まって酒を呑む程度でした。また学校から修学旅行に来た生徒達の面倒も良くみていたようです。

昭和17年に学校が北与力町から棧橋通りに移転するときには大阪支部の寄付金集めに随分お世話をされたようです。そして昭和29年の竹内 綱・明太郎両先生の胸像再建にも尽力されたと聞いています。

中西・山崎 戦後は支部活動も低迷していましたので昭和28年ごろ再建の話が出てきました。ご本人は適任者を推挙していたようですが、種々の事情により引き続いて支部長としてお世話され昭和34年までの35年間の長きにわたって大阪支部の今日の基盤を築かれました。

2代支部長は並川安幸さんです（大9機卒・故人・昭34年～昭37年）、副支部長には衣斐 勝さん（大15機卒）・山本延美さん（昭4化卒）がなり支部の活動も活発になってきました。

3代支部長は安岡一郎さんです（昭5化卒・昭37年～昭44年）、副支部長に川島仁助さん（昭8建卒）・北山智旨さん（昭18化卒）がなってお世話するようになり参加人数も多くなってきましたね。

川島仁助さんは戦後の昭和22年～昭和33年までの就職難の時代（一般の企業では新規卒業生の募集どころか首切りの時代）に、学校より卒業生の就職の相談を受け縁故を頼るしかなく先輩や知人を通じてお世話をされておりました。大阪に来た同窓生の相談役的な役割をされておりました。

大阪支部の発展のため特に寄与され尽力された特筆される大先輩となると、松村さん、並川さん、川島さんで忘れられない大先輩ですね。

一同 4代支部長の山崎米蔵さん（昭18機卒・昭44年～昭51年）5代支部長の中西 清さん（昭16建卒・昭51年～昭59年）のお二人は仲々お世話が出来ましたね。参加人数も100名位に増えていましたね。当時は何百人も会食出来る会場がなかなか見つからずボーリング場などを借りてやっていました。

岡添 鯨工会の名称は何年頃出来ましたか。

中西 私が支部長になり大阪在住者の名簿を作成したときに、これに何か名前をつけなければいけないと云うことで、昭和54年に同窓生の発案で命名されて今日に至っています。

岡添 現在までの大阪支部の経過をまとめてみてはどうですか。

中西 私の後の6代支部長は松田公一郎さんです（昭16機卒・昭59年～平3年）。そして現在の7代支部長が吉岡利雄さんです（昭23機卒）。

支部長のほかに前田正郎さん（大13化卒）も仲々お世話の出来た人だと聞いています。また野村正男さん（昭18機卒）も色々ご協力して頂きお世話をしてくれました。

司会 支部の運営については随分とご苦労されたようですが。

中西 支部の運営では資金がないために関係者にとっては、とても大へんでした。

（株）ダイヤパッケージング山崎米蔵社長、えびす建設川村幸人社長（昭18機卒・故人）、ガス設備工事（株）野村正男社長、吉岡工業（株）吉岡利雄社長など同窓生の企業会社にいつも多額のご寄付を頂いて穴埋めをしておりました。この諸先輩達のご協力、ご援助がなかったら今日のようなしっかりとした基礎は出来なかったと思われれます。この場をかりてお礼申し上げます。このような状況ですから支部役員の方の経済的負担は仲々大へんです。何とか運営の基金をつくることが望まれます。

司会 支部総会の案内、連絡も仲々大へんだったそうですね。

中西 大阪支部関係で卒業生が1,300人程在住しております。総会案内を出しても約半数が連絡がつきません。不在配達でもどるもの、封筒はもどらないが何等返事のないものなど、貴重な経費を使って手間をかけて連絡をとっておるのですから、何

か連絡はしてほしいものです。

一同 中西支部長のころは会員の参加を多くするために、メモ帳をたよりに片っ端から電話をかけて連絡をとられたようですね。総会が近づいてくると、家の電話を使い何時間にもわたって幾日もかけ続けお家の方が困ったと聞いています。

このように総会の案内には幹事や、お世話をされている方は大へん苦勞をしています。これは仲々わかってもらえないように陰の苦勞に終わっていますね。

司会 女性の参加はいつ頃からでしょうか。

椎葉 昭和33年卒業の方が昭和44年頃初めて出席されたと聞いております。木材工芸科、インテリア科、工業化学科、情報技術科の卒業生数名が大阪に在住しておりますが、仲々出席してもらえません。私のほかに川端麻理子さん（昭53情卒）が毎年参加されていますね。私は色々な先輩に逢えるのが楽しみです。ですので毎回参加するように心掛けています。

司会 今後期待、希望することについて話して下さい。

中西 鯨工会の中に「相談役的な機関」の組織をつくってはどうかでしょうか。若い人の相談に乗ってやるような……新卒業生など大阪に就職して来阪し困った時、或は相談したいことがある時、「相談窓口」をつくってあげれば、もっと同窓生後輩のお役にたってやれるのではないかと。

西川 それには学校を卒業する際に就職して来る卒業生に、大阪には大阪支部があり「鯨工会」があつて事務局があるから頼って行きなさいと教えておいてやり、困った時にいつでも訪ねて行き相談に乗ってやれるような鯨工会の組織化、システムづくりを是非とも進めてほしい、それが同窓会ではないかと思ひますが……。また卒業生が一度就職し、その後就職先や住所を移動した場合、学校か各支部の事務局に変更先を必ず連絡することを指導し徹底するよう、就職係の先生にお願いしておきたい。私達も大阪支部の事務局をもっとPRして後輩のお役にたつてやる方向にしていかなければいけないと思ひます。

吉岡 はっきりと順調にのびている人は問題ないでしょうが、中にはアウトロー的な方向に走る人もおるでしょう、落ちこぼれ人に属する人も出てきましょう。順調に進み名も、地位も出来て安定して初めて後輩の面倒でもみてやろうかとなるわけで、仲々難しい面はたしかにありますね。

西川 親切の押し売りの様に受けとる人もいるかも知れませんが、中には親の反対を押し切って大阪に出て来て困っている人や、高知におられない様な状態で大阪に出て来た人などいる場合、その人の相談にのつてやる「相談の窓口」は必要と思ひます。

人によっては騙されたり、失敗に終つたり利用されることがあるかも知れませんが。人の世話をすると云うことはいろんな出来事にあたりますよ。これを乗り越えて「力」になってやるのが同窓会ではないかと思ひますね。

山崎 新潟県長岡市の近くに「片貝^{カタガイ}」と云う町があります。

ここは花火が非常に盛んで花火で保持出来ている町です。ここに「片貝煙火保存協会」があり、この町の子供は学校を卒業の時に全員が保存会に入ることになっています。卒業後は毎年必ず「保存協会の自分名義の口座」に積立貯金をする事が義務づけられており日本はおろか、世界中どこへ行っても行先を届け連絡をとり、積立を死ぬまで終生することになっていて、江戸時代から今日でも続いています。

この資金はこの町で花火を打ち上げるための経費に使われます。各人が何か大きなお祝い事の時に、人生で何回か生れ故郷で大きな花火を打ち上げてくれるのです。人口8,000人位の小さな貧しい町ですが、花火は新潟県で1番豪華です。江戸時代から今日まで先祖代々が必ず続け守つて行われています。

この様なきちつと連絡をつけられるシステムを同窓会にもとり入れたいものです。折角の同窓会だから何かよい方法で組織づくりを考えられないものだろうか。

中西 大阪支部も、もっと若い人達が参加出来る様な企画づくりを検討してはどうか。同窓会の組織で他の高等学校大阪支部の例ですが……大阪支部の中に「阪急支部」、「近鉄支部」、「阪神支部」……と小さな支部がいくつもあり、それぞれは毎月会費を積立てておいて、各支部で数ヶ月に1回バスツアーや見学会、催物の参加など色々な行事を企画して連絡をとり合つて参加しています。そうして1年に1回定例の大阪支部総会には、この各支部が更に連絡をとり合い非常に盛大に行われている様です。

最近鯨工会でも、中平興紀さん（昭33化卒・副支部長）や五百蔵栄男さん（昭35建卒・常任理事）達のご努力で「ゴルフ部会」をつくり盛んに活動されています。この様に若い同窓生が気楽に集まれる組織づくりも進めてほしいと思ひます。

山崎 最近は田舎と都市との交流の時代です。特に高知県は自然減少県と云われています。我々鯨工会でも、少しでも「高知～大阪」の交流の一端を背負う様な努力を積み重ね、高知と、学校と、各支部が連絡をとり交流出来るようなシステムづくりが出来れば、社会のお役にたつてのではないかと、総会の案内ももう少し無駄のない効率の良い活動が出来るのではないのでしょうか。

中西 同窓生、同志のタテの繋がりを緊密にして行こう。

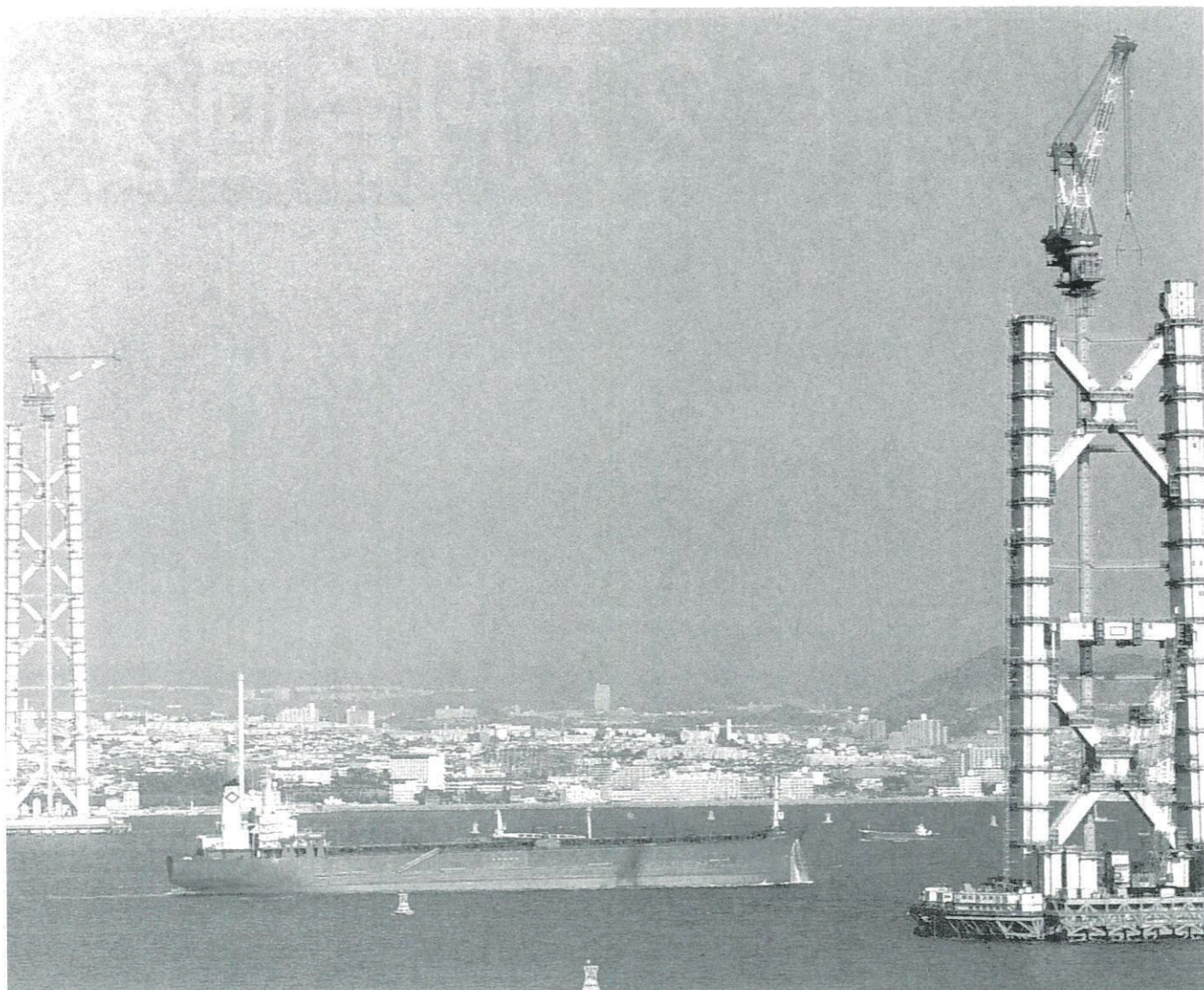
大手企業に就職している同窓生と、自営業の同窓生同志が連絡をとり合いお互い情報を繋げてもらえば、同窓会としては素晴らしいのではないのでしょうか。中小企業に勤務している同窓生、小さな鉄工所の同窓生、化学品屋、家具屋さん、インテリアデザイン屋さんもいる。この人達が大手会社を紹介してもらい仕事を出してもらおう。大企業は下請に任せて助かる。貰つた下請の方は仕事を得られて助かる。同窓生が先輩、後輩で「タテ」に「ヨコ」に繋げてもらう様になれば、情報連絡を得るこ

とが出来、仕事と生活に密着してお互利用しあえる様な方向で同窓会を盛り立てて行くようにしたいです。

ただ親睦のために1年1回会って酒を呑んで「元気でやっているか……」で終るのでなく、もっと活性化に努力すれば「タテ」の繋がりづくりが出来るのではないかと思います。そうなれば大阪鯨工会の意義はまことに大きいのではないかと、今後とも益々発展するよう皆さん協力して頑張っていきたいと思います。

司会 お忙しい中を長時間有難うございました。

建設中の明石大橋の主塔



戦中派の思い出

竹村 義典 (昭18建卒)

母校創立80周年、誠にありがとうございます。振り返るともう卒業さしてもらってから50年近く過ぎ、時代は大きく変わり、ポケも加わり内容的にどうかと思案もしました。然し、それぞれの年代に学んだ者として覚えていることを残していく事も大切かと一人合点し、思い出すままに書くことをお許し願ひ、責を果たさせていただきます。

私達の多くは大正15年(昭和元年となる)生れ。そのせいか、どうか、大きな変節を生きている年代のような気がします。

小学校

昭和8年小学校入学。読本が変わりました。「ハナ ハト マメ マス」から「サイタ サイタ サクラガ サイタ」「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」へ。唱歌は「白地に赤く日の丸染めて ああ美しい 日本の旗は」のように、軍事教育が始まります。

高知工業入学

小学校(6年制)が義務教育で卒業すると高等小学校へ進むか、中等学校(男子は中学校・実業学校、女子は高等女学校)を受験して入学することになっていました。当時の高知工業は入学が非常に難しく、試験日も他の中学校より早かったようでした。私の小学校は複式学校で同級生11名でしたので5年生の氏名を加えて成績一覧表(文書偽造)が作られ、一番になっていたようですが毎晩担任の家まで4軒の山道を通って勉強した甲斐はなく、学科は中止。面接のみとなりました。「朝起きたらどうするか」歯を磨き、東方(宮城)遙拝します。「古鉄は何故集められているか」戦争のためです。最後は講堂で壇上の校長先生の前に立ち、大きな声で「ハイ」と返事することでした。結果は建築科合格。これから終戦まで戦時体制下の生活が続けられる事となります。

訓育部

現在の生徒指導部です。「ゴリ」先生を筆頭に怖い先生が多かった。今考えると皆良い先生ばかりでしたがニックネーム通り「ビンタ」先生も居られ、兎に角凄かった。

脚を開き、歯を喰いしばれと言われると製図板の枕木が腰に当たる。「停学がよいか」「ビンタがよいか」と聞かれた場合もありました。「うどん屋」に入るにも父兄同伴でなければ駄目。女学校、映画館にも入れない。すべて停学の対象。酒、タバコは配給制だから無縁。バイクモーターなど一般には無い。

映画館で案内が高知工業の宮地先生(ゴリ先生こと)を呼出しアナウンスするとこっそり入館していた中学生がゾロゾロ出

てきて、各校の訓育部の先生に捕まった話は事実で有名な話。それ程、宮地先生は県下に名を馳せていました。

校内暴力(?)

現在とは違いますが上級生は貫禄があり威張っていました。敬礼を忘れたり、女学生と歩いているのを見付けられると上級生の教室に呼び出され、キタエ(鉄拳制裁)られる。

県体前になると授業を抜け出た上級生が校門に立って下級生を帰らせず、高知公園の江り山・杉の段に集められ、三々七拍子を日が暮れるまで練習させられた事など今となってはよい思い出です。一見無茶なような事でも、母校愛・団結など筋金に通っていたように思われます。

軍事教練

体操の他に武道(剣道・柔道)、教練の科目があり、月1回の行軍(背囊に砂を詰め、銃を担ぐ)、物部川を挟んでの県下中学校遭遇戦、県庁前で知事閣下の閲兵(生徒)行進、44連隊(現在の高知大学)入営など随分と鍛えられました。お陰様で40年間病気で勤務を休んだ事は無く、感謝しています。

就職

進学は1割以内と制限され、就職しなければならない決まりになっていたようです。満洲を含む軍需工場へ軍属として徴用され、また途中から飛行機整備兵として志願していった者も。私は近視のため不合格となり、今生きていますが人生・運命の岐路は予測できません。

この稿を書くために、50年誌を再読しましたが当時の戸梶校長先生、澤本 豊先生など数々の名先生方は今は亡く、その後30年の歳月の流れを痛感・哀惜するものです。

東西ドイツの合併、ソ連邦の消滅、再び核の脅威、日本ではバブル経済の崩壊。戦争以上の激動の時期にあります。3K、5Kとか言って、仕事を嫌う風潮がありますが今こそ、建学の精神「工業日本」の時と思います。

母校の益々のご発展、後輩諸君のご活躍を祈念致します。

思い出

宮地 正修 (昭20機卒)

スベリ山での教練

教官野島配属将校の号令で前進、これが匍匐前進で仲々大へん「止まれ」の号令がないので当時第一高女の西通用門の下をくぐり抜け校庭まで前進。お目玉をくらい下校時まで高女校庭に立たされ女生徒の見せ物にされ大へんだった。

服部先生のこと

掘詰座に宝塚歌劇が公演にきたのでこれを是非見たいと先生

に申出をしたら、先生が同道してやるから観劇しなさいと云ってくれた。そして帰りにうどんをご馳走してくれた、当時得難い先生と生徒の関係を思い返しています。

思い出

横田 善助 (昭20機卒)

当時は小学校6年卒と高等1・2年から入学してきていたのと同じ学年でも年が大分違っていました。1年上の生徒は黒い制服。夏は霜降りの服装で黒色の帽子でした。我々は国防色の制服で国防色の平帽でした。そして1年下の生徒は戦闘帽に変わっていました。入学試験がなくて内申書で入学出来るようになっていました。

伊野から汽車で高知駅で降りて最上級生が先頭に立って隊列を組んで学校まで歩いていきました。途中先生、上級生を見かけたら敬礼をしていました。電車でも通学していましたが前半分が女生徒で後半分が男生徒と決まっておりましたが、上級生になるにつれて中程に乗るようになっていました。汽車の場合は後端が女生徒で前が男生徒と一般の乗客に分れていました。あるとき朝寝ぼうをして遅れそうになり急いで走り始めた汽車の2輦目に乗ったところ女生徒ばかり、この日は後端が団体客の貸切りになっており朝食につくのを待ちかねて前に移りました。

工業学校は行軍学校ともいわれてほんとによく歩かされました。ゲートルを巻いてカバンに弁当入れてクラス単位で隊列組んで学校—高知駅—一宮—明見—葛島—青柳橋—護国神社参拜、また夜間行軍も教練の課目としてやりました！重い38銃を持つての教練、銃剣術などもよくやりました。

銑造実習で七輪のサナを作り家にとっていったら喜んでもらった。技術研究部でスチームエンジンも作ったりしていました。4年のときに則岡先生がオート三輪を寄贈してくれたので、これをどうしても走らせたくて電気科の倉庫からバッテリーやスイッチを貰ってきました。ガソリンと灯油のタンクがそれぞれあって、最初ガソリンで始動しそのあと灯油に切り替えて走行し、運転をとめるときにはガソリンに切り替えてキャブレターを一杯にしておかないと次に始動しない、医療用アルコールを使って走ったりしていたが温度が高くピストンの天井が破れたがすぐに直して走行していました。

シンガポールの戦利品のフォードのオープンカーが学校に入ってきたがこれも運転していました。

移転した当時は学校周辺は全部田んぼでした。当時の唄で、金鶏輝く15銭、栄ある光30銭、それより高い鵬翼はにがくてまづくて50銭、あゝ一億のゼニがへる。悪いことをするとっても今から思ったら可愛いもの。学校全体の校風が自由でガリガリの軍国主義になじまなかった、他校と比べたらほんとに自由にやらしてもらいました。



思い出すままに

野村 漠 (昭20土卒)

郡部校から工業学校に入学するにはクラスで1番か2番の成績を取っていなければ推薦してくれませんでした。入学した年の12月8日に第2次大戦が始まりました。

入学すると5年生がきてお前は相撲をやっておったと聞いたが相撲部へ入らないかと進められたので入部しました。当時の5年生は私達から見たら大人のように怖かった事をおぼえています。師範、農業が強く工業は17年の中学大会で団体2位となったのが最高位でした。メンバーは藤島、吉松、岡崎でした。私達が3年生になったとき戦争がきびしくなり大会は中止になりました。

配属将校に軍事教練ではきびしくやられました。上級生になると香長平野で合同野外演習がありました。また学徒動員も始まり土木科は技術を持っているので県庁関係の仕事をするようになり、私達は幡多支所で土木事業の手伝いや、食糧増産で土地改良とか暗梁排水工事等の測量の作業にあたりました。建築科は仁井田の航空隊の施設工事の作業をしていました。日章の飛行場では人海戦術で土を掘りモッコ担いでの労働作業もやりました。

私達の時代が一番勉強出来なかったが北与力町と棧橋の両方で学んだことを誇りにしております。同窓会をやるたびに北与力町時代のクスノキを見に行き昔を偲んでいます、出来ることならこのまゝおいておいたらよいと思っています。

焼判木札

山中殖木(昭20建卒)

16年に工業学校に入学すると校章入りの焼判木札を作ってくれました。これを家の門柱など目のとどく所に毎日出しておきました。現在も社長室の私の机の後の壁につけてあります。

家が香北町ですので土佐山田から汽車で通学していました。軟派はせられんぞ、煙草はすわれんぞ、女生徒と話しはせられんぞ、といつも云われておりました。前の3輛が男子生徒、後の3輛が女子生徒と席は決まっていました。汽車を降りると2列縦隊に整列し上級生が号令をかけ歩いて学校まで行きました。学校では毎朝全校生徒を校庭に集めて朝礼を行っていました。



野球人生

山崎通雄(昭24機卒)

忘れられない数々の試合、多くの選手達のプレーは私の脳裏に深く刻み込まれていて、毎年暑い太陽がじりじりと照りつける頃となると遠い昔の試合の場面が、各選手のプレーが鮮やかに甦ってくる。私はこの記念すべき創立80周年を機に私の青春時代の苦労や見たり聞いたりしたあれこれを拙い文章であるが想い出を綴ってみたい。このような機会を与えて下さった記念誌委員会の諸氏に感謝したい。又多くの同窓生の方々の心温まる御指導御協力に謝意を表したい。

昭和20年7月B29の空襲で高知市内の大半は灰と化した。本校にも数知れず程大量の焼夷弾を焼跡や運動場で見たのが昨日の様に思う。この頃からの記憶を辿りながら…、終戦となり2学期より分散授業が始まった。機械科2、3年生(現中2中3)は高須小学校で。2年生は講堂を半分仕切り3年生は用具置場が教室だった。丁度この頃街では道路空地などあらゆる所で受合い(キャッチボールのこと)、三角ベースなど猫も杓子も野球野球と次第に野球熱が高まってきた時代だった。我々学生仲間もお互い道具を持ち寄り高須小学校の狭い運動場にて暗くなるまで球遊びに熱中したものだった。時々故小松生幹教頭も顔を出し野球について色々御指導をいたゞいた。この頃が戦後野球復活の第一歩であったように思う。

やがてバラックながら校舎(天井は無く教室と廊下の仕切りもない)も完成した。そして機械科を主体にした野球部が復活した。その頃のグラウンドは大半がコークスと石ころだらけで赤土はほとんどなかった。しかも塀の周りにはぐるりと防空壕

が掘ってあった。景色だけはすばらしく見渡すばかり田園風景が広がり、鷺尾連山も一望できるよき環境の中にあった。用具についてはグラブの支給があった。大きさは今の小学低学年が使っているような小さなもので、ひとさし指と親指との間を紐で結んであるだけで他は手袋の大きいようなもの、真中でしかボールを掴む事ができないので捕球するのがとても痛くて仕方がなかったが、毎日辛抱してやっているうちに手の皮も次第に厚くなり踵に近い状態にまでなった。手の平が真青に腫れあがったのは云うまでもない。ミットはドーナツツと同じような形で真中しかボールは受けれなかった。バットの配給もあった。メーカーより筵にくるんで送って来た。ロクな物がない。バットの形はしているものの大きさはまちまち、中にはソフトボール用位の物もあった。生木をそのままバットの形にしたようなものでバランスは勿論乾燥も十分してなく直に使用できるようなものでなく、かまどの上に数ヶ月も吊し乾燥させ、握り部分はガラスで削り牛の骨で擦りそれは宝物のように大切に他人には絶対貸せない程大事なものだ。毎日持ち帰り油で磨き毎晩150回以上は素振りをして手は豆だらけになったが、何時の間にか自分のスイングをものにした。ユニホームは個人持ちで形はバラバラ。袖は長く筒の様な大きなカバカバした木綿のズボン、スパイクシューズは試合に履かなくてはいけないので、練習時にはズックや裸足の者が多かった。ボールは何といっても一番の貴重品でした。数が少ないので1個でも足りないが見つかるまで探した。縫目もよく切れ授業中によく縫った。

食糧難でロクな食物しか口に入らなかった。弁当の中味は米1/3麦1/3残りの1/3は季節の芋、かぼちゃなど、干かわのあんこが入ったきび粉の饅頭もよく食べた事である。とにかくお腹さえはればよいので食べれる物は何でも食べた時代だった。

こんな環境のなかで監督は大西至(昭11機卒)コーチに島崎晋(昭16化卒)に決定し、「基本を忠実に」をモットーにした本格的な練習が始動した。先づ体力作りと毎日南の山麓をぐるりとランニング。校庭よりまる見えなのでさぼる事ができない。今はなくなったが竹島の山かげだけ歩いた。スパイクはもったいなく大半の者は裸足で走った。時々小石がさゝり飛びあがる程痛かったことを覚えている。バックネットはなく朝礼台を代用するも無理な話小さいのでよく田んぼに飛びこんだもの。下級生の皆さんが泥んこになり拾ってくれた。その節は本当にご苦労様でした。捕球の仕方、送球の方法、バットの握り方及び振り方など基本について指導してくれたがそれをどういうふうによれば上手になれるかについては「よく考えて自分で努力せよ」であった。私はどのようにすれば上手にできるか塀に球を投げつけゴロの捕球と素早く送球できるかと、誰よりも早くグラウンドに出て稽古した。行き詰まると上手な人のプレーをドロボーし納得がいくまで努力した。仲間もそれぞれの方法で努力していた。例えば歩く時は爪先で階段は走り上り、又テニス

ボールはいつもポケットに入れ握力をと、この様な努力をしたものでした。

練習はきつく団体競技は1人のポーンヘッドが如何にチームにとってマイナスになるか、それは1人だけの責任でなくチーム全員の責任であると、全員バットをくらったもので各自が仲間に迷惑をかけまいと真剣に練習したものでした。毎日打撃練習は3本3回だけで終るとボールが見えなくなるまでノックの雨、そしてベースランニング、といった厳しい練習が毎日続いた当時のことを今はたゞなつかしく思う。大会前、真如寺で3食茄子のおかずで白いご飯を食べ放題の合宿した事。九反田の魚市場で牛肉を腹一ぱいご馳走になったことなど、当時の食糧事情を今の人々はとても想像がつかめないだろう。

腹ごしらえをし、いよいよ昭和22年7月22日より4日間第29回全国中等学校優勝野球大会高知県第1次予選に戦後復活の第一歩を踏み入れた。作戦はノーコン投手が多くどのチームも「2ストライクまで待て」投球が体の近くにきても「逃げるな当たれ」で避けたりすると大目玉をくらったものでした。又ピッチャーブアプアとかドンマイなど流行語であった。結果は完敗。更に猛練習を重ね翌23年7月昭和23年度全国高等学校野球選手権大会四国第1次高知県予選(大会名変更)に出場した。

抽運よく「南四国大会へ行けるぞ」と満面に笑みを浮かべた芝藤マネージャ(昭24機卒)の顔は忘れることができない。本校のゾーンには須工・安芸・農業の4チーム、当時の郡部校は一段レベルが低く本校の勝利は当然で南四国大会出場権を獲得した。しかしそれも東の間の喜びであり思い出したくない出来事だった。その事件の真相はいまだ不明。斯くして5年生(現高2)の夏は終わった。その夏休み香川県に遠征に行き尽誠・多度津工業・丸亀商業と対戦し3連勝、南四国大会に出場していれば甲子園も夢ではなかったような気がし、残念な思いをした。更に研鑽を積重ね技術も向上し本校は常にベスト4のなかに君臨していた。翌24年高3になると気力、体力共に充実し大会に臨んだ。そしてこの大会を最後に学生時代の野球は終わった。

その後四国鉄道管理局にて社会人野球を、以後母校の監督、県審判協会などで後輩の指導にあたり、現在シニアチームにてソフトボールを楽しみながら健康維持につとめている。

こんな私にもまだ夢もある。その夢は私が1人の野球人として学んできた野球を球児と共にグラウンドで汗と泥にまみれて教えてみたい。私は残された人生を白球に賭けて野球に対する執念を冥土の土産にしたい、そんな夢を私は抱く。終りに現代の野球技術を更に奥深く洗練されたものにする爲にも、野球を指導する人は選手達に技の練磨・技術を心に打ち込んで、考えそれをしっかり実行すれば技術は上達すると確信している。たゞ漫然と投げ、捕り、打ち走るだけでは技術の進歩はない。一つの技術、一つのプレーを凝視し、考案しそこから疑問を見出し研究してこそ、真の前進があると思う。それらを追求して下

さる事を念じたい。

旧制最後の卒業

大石和男(昭24電卒)

私が、高知工業学校に入学したのは、大東亜戦争(第2次世界大戦)が、ぼつぼつ敗色に向う、昭和19年4月でした。

勿論、学校は、軍国調一色で、ゲートルを巻いての通学でした。

1年生でありながら、学校の宿直があり、その朝方、グラマンが飛来し、学校付近が機銃掃射をうけたこともありました。

学校へは通うものの、学業よりも軍隊への手伝いが多くなり、私たちは、介良の山の陣地構築に、よく出されました。

2年生の夏、現在の高知空港の北側(深淵地区)へ行き、土佐湾決戦に備えてのたこつぼ掘を、やっていました。

ある暑い日、いつものように行ったところ、係の兵隊が来て、「お前ら、もうよい帰れ」と云って、訳も云わずに立ち去りました。狐につままれたようでしたが、重労働から解放され、とぼとぼと土佐山田へ帰る途中、岩村地区で、年寄りが深刻な顔を寄せ合い、ピーピー・ガーガーのラジオを聞いていた光景は、今でも私の脳裏から離れていません。

戦争は終わりましたが、校舎が焼失していたため、勉強をする教室がなく、やむなく分校授業となりました。

私たちは、長岡分校でしたが、机や椅子がなく、板の間に座っての授業でした。

昭和23年の学制改革により、5年制の工業学校は、私たちの昭和24年3月の卒業が最後でしたが、新制工業高校の3年生に編入することができたため、昭和25年3月に、新制工業高校の第2回の卒業生となり、私たちは高知工業の卒業証書を2枚持っています。

通算6年間、通学したわけですが、戦中、戦後の混乱期や復興の時であったため、当時の学校の先生方は、ほんとうに大へんであったと、今、つくづく思い、遅まきながら感謝申し上げます。

戦後、野球が復活し、私は、すぐ、野球のとりこになりましたが、戦中から、相撲部に籍をおいていた関係で、野球部で、できず、このことは、今でも大へん残念に思い、悔んでいます。

私たちの卒業時は、現在とは比べものにならない、ほんとうに想像もつかないほどの、就職難時代でした。

幸いにも、私は、卒業と同時に就職することができ、一つの会社で、県外の工場を転勤で廻り、定年となって、平成3年6月末に、41年間の勤めを終え、帰郷しました。

私の職業は、旧制工業学校(5年制)の電気科卒業で、認定される資格がものを云い、入社後、5年で、電気主任技術者になりました。

会社では、この電気主任技術者の資格をベースにして、工場

の各種設備を管理するに必要な、各資格を取得し、工場設備の保安監督の業務を担当してきました。

これも、旧制工業学校卒業のおかげです。

一方、学校で、できなかった野球も、会社に入ってから精力的に行い、会社内の転勤で、最後の勤務地となった滋賀県では、長い間、無事に、好きな野球ができたお礼の意味から、野球の審判員になって、丁度、20年間、務めてきました。

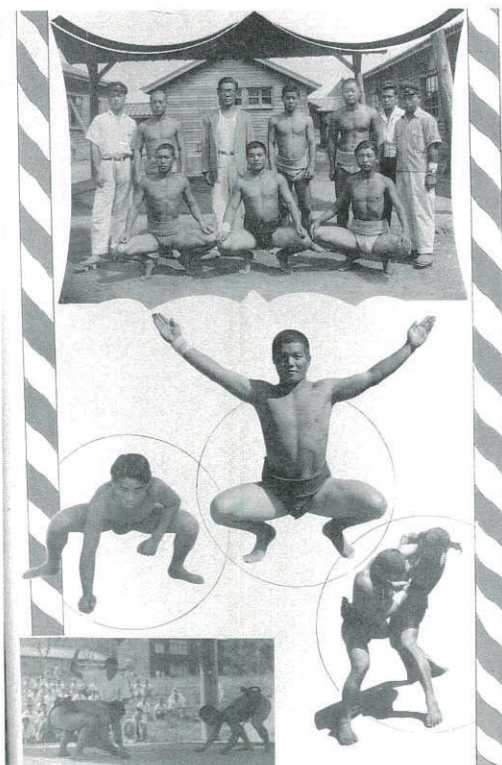
帰郷後、すぐ、母校の野球部の動静が気になり、練習試合、夏の県大会へと出かけました。

初めて母校の選手を、スタンドから見たときには、40数年前、私たちが、野球を始めた頃の姿とオーバーラップさせ、感無量の思いでした。

現在は、お金さえあれば、何でも野球用具は揃いますが、当時は、用具がなく、破れたボールを繕い、貴重品として大切に扱ったものでした。

この8月から、母校の野球部も新チームとなりましたが、後輩が、この野球を通じて、何かを学び、将来、立派な社会人になって欲しいという願いで、練習試合の審判をやっています。

好きでありながら、在校中に、できなかった分を、今、後輩の野球部の、手伝いができることを喜んでいます。



相撲部と私

竹内英夫(昭24化卒)

私が入学したのは昭和19年、大東亜戦争真只中で学窓も、スポーツどころではなく緊迫した時代ではありましたが、相撲部に入部することができました。当時の部長は小松正利先生で部員は5年生に橋本隆・岡崎肇、4年生に野村漢・寺川一郎・佃

憲、3年生に寺村香、2年生に武市寿彦・石建大八郎・山崎泰明、同期に西川幸信(旧姓岩岡)であり、あまり練習した記憶もないまゝ1年間は過ぎたように思います。そして20年7月4日、高知大空襲に校舎も土俵も跡形もなく全焼・廃墟と化し、8月15日終戦を迎え、分散授業で近くの小学校等で授業という状態が何ヶ月か続きました。一方復興もめざましく焼け跡にはバラックの校舎が建ち、仮住居の分散生活から現地にと正常に近い学校生活が始まりました。昭和21年、相撲部も徐々に復活、部長に田村高德先生、部員は主将に武市・山崎・石建・西川・大石・等でなかったかと思えます。

その頃、戦中中止されていた全国中等学校相撲選手権大会(現全国高等学校相撲選手権大会)もいち早く復活、従来高知を制する者全国を制する、ともいわれ相撲王国の名声をほしきまゝにしていた高知の相撲であり、それ一とばかり県下各校(当時は男子校はほとんど相撲部が活躍)が全国大会を目指し練習に取り組んだ。戦後初の大会は21年再開され、厳しい予選の結果、高知農業と海南中学(現小津高校)が参加、高知農業団体優勝、海南の有光選手が第24代、全国中等学校横綱の栄冠に輝き高知県強しの成果を修め県民の期待に応えた。

22年、我が高知工業も7月頃であったと思いますが屋根つきの土俵が竣工、連日熱の入った稽古の結果全国大会行のキップを手中にすることができました。

時の顧問は土居武夫先生、部員は5年生に武市・山崎・石建、同期に西川・大石・西村(誠)・奴田原・山下・竹内(潤)・田野岡・徳弘、3年生に西村(健)・北代・武市(弟)・町田・葛岡・西尾・笠原・君等でなかったかと思えます。全国大会出場のナンバーは先鋒・私、中堅・山崎、大将・武市、選手西川であり、いよいよ大阪府中モズ(当時伝統の堺市大浜の会場が戦後3回までは中モズ)へと向った。それも校長の森本長太郎先生を先頭の出陣でありました。此の頃まだ食糧が配給制でありリュックサックに米を一杯背負っての遠征であり、高松棧橋で校長さんが闇屋と間違われ取り調べを受け、連絡船の出航にやっと間に合うなど今思えば考えられない数多い思い出があります。

試合の結果はさだかではないが完敗に終り悔しい思いで一杯であったように思います。

此の年先輩諸兄も卒業、昭和23年、学制改革により新制高校となり、新年度が始まって間もない頃土居先生に呼ばれ、竹内主将として部はどうするのかと喝を入れられ部員一致協力稽古に励みましたが、此の年は高知高校(現追手前)、高知農業、高知商業、中村高、等が強く我が工業は全く不振に終わりました。

昭和24年、私も最後の高校生活を迎え、相撲部も強化充実の年であったかと思えます。

稽古台に元大相撲十両力士であった春野町芳原の錦竜(宮地栄広)さんをお迎えすることができ、新入生として澤田俊男、

宮地隆三（旧姓小田）、釜原一臣、岡田俊郎、中内久明、橋本秀雄、戸梶君等優秀な選手が入部、部員も20名を越す大所帯となり土俵も新築されました。そして熱心で真面目温厚な人柄の錦竜さんの良き指導のもと、稽古も一層厳しく汗と涙と土にまみれての毎日であったと思います。この苦しい稽古に耐えた甲斐もあり全国大会に駒を進めることができました。此の年から会場も伝統の堺市大浜に帰り、高知農業と2校の出場であり、我が工業は監督・土居武夫先生、コーチ錦竜さん、先鋒・澤田、中堅・小田、大将・私、選手・釜原で栄光めざしての出陣でありましたが、結果は予選は勝ち抜きはしたものの全国の壁は厚く、決勝トーナメント2回戦で洲本実業高校に残念ながら完敗に終わりました。只この年は県下選手権大会の決勝で宿毛高校を破り、相撲部創部初の制覇を成しとげることができたことと、第1回全国選抜高校相撲高知大会（現全国高校相撲新人選手権大会）団体3位。西日本高校相撲大会、3位の賞に輝き、高知工業強しの名声を上げることができました。かくして私の工業時代は終わったのです。

このような思い出の中に今は亡き恩師、先輩の御冥福をお祈りし又先輩・同窓各位に深く感謝と敬意を表すると共に母校の発展と相撲部の御活躍を心から祈念します。

土木と共に（工業へ思いをよせて）

公文重徳（昭28土卒）

朝霧の濃い嶺北地方、長岡郡本山町寺家489番地（旧吉野村）は、私の生まれた土地であります。朝霧の状況で、天気の良い悪しの判断できる嶺北地方であり、吉野川と汗見川の合流する南向きの、温暖な戸数100戸程度の集落であります。

「サキエさん所のシゲノリは高知の学校へ行くらしい」

「メッソウ勉強をしゅうように見えんが」

「シャモばかり飼いよったがええろうか」

中学担任の井上先生、村山文雄校長先生のすすめで、父親も私の進学については考えていたようですが、本人の私は、いたってのん気で進学どころか、シャモ飼いに熱中していたように思います。

そんな私でしたが、私が中2か、中3のころだったと思います。私の兄が相撲を取っていた関係で、沢田俊男先輩（27キ卒）宅に合宿に来ておられた、竹内英夫先輩（25キ卒）が私方へ来られた時、雑談の中で、「実習でポマードを作っている」高知へ出るんなら工業へこないかと、お誘いの話もありましたので、進学なら高知工業と決めていたように記憶しておりますし、「実習でポマード」は、当時の私の胸に強烈な印象として受け止めたように思います。

「機械や、電気は志望者が多いきに土木にしたらまし」

「土木やったらまかり間違っても、友吉ちゃん（土木の道路工夫さんで本山地方では有名人）ばあには成れるろうきに」

「まあ、切スコでコンクリートを練る事ばあには、なるろうきに」

こんな無責任な言葉を、近所のおっさんや、父親に聞かされながら、あこがれの高知工業に入学する。「ポマードは応用化学なのに、おれはやっぱり土木か……」

入学日に食堂の横で先輩たちが、T定規をタメテ、これを買わないと入学したことになる、と思わせ振りのカッコ良さに、つい、その気になって購入したことを何となく懐かしく覚えている。

バラックの校舎で、冬は風通しがよく、春先には、教室の床から草の芽が出て来る。こんな環境の中であつたが、熱心に、ヤンチャ坊主の我々に教べんを執られた先生方。

「私がキセンと言いまして君たちの担任です」

「公文君もういっぺん言うて、怒らんきに言うて」1年担任の石川先生。

少しどもって、顔が赤くなる、声の大きい村山先生（現在我が社の会長）。

難しい顔をしているが、脱線をして国鉄時代の経験談をした森先生。

実習時に何時もニコニコ顔で接してくれた山崎先生。

白い鼻緒の高下駄、普通教科の時は毎時間教室を移動した事。ハンドボールの高知予選で中村高校へ、夜の四万十川の出来事。西日本大会に出場、藤井寺競技場で1回戦で敗退した事。さまざまな思いではあるが、不思議に嫌な思い出はありません。成績もたいした事なく、まあ、普通の学生で3年を過ごしたように思う。それでも3年の秋からは、兄に譲ってもらった革靴をはき、おしゃれな気分で通学するようになったし、運動会の仮装行列では丹下左緒にふん装したことなど我が青春の思い出であります。

昭和28年3月9日に卒業、翌10日から県の本山土木事務所に就職致しました。県庁を数年後に退職、幾つかの会社を経由しましたが、卒業以来38年、土木関係から離れる事なく現在に至っております。

昭和47年7月に(株)サン土木コンサルタントとして独立、昭和55年には村山先生を取締役会長として迎え、現在では社員30名（内高知工業卒業生が1/3を占めている）の会社に成長しました。

現在我が社は、建設コンサルタント業、測量業、補償コンサルタント業の3つの業務を行っておりますが、これらの業務に携わっている業者を一般にコンサル業と言っています、建設関連業として土木工事先駆けであり、公共事業の重要な任務を背負った仕事であります。

平成元年に発表された、「建設コンサルタント中長期ビジョン」A T I（エイティ）構想でも言われているように、我が国の社会資本整備とりわけ公共事業において調査、計画、設計等

に関して専門的能力を発揮して、事業の円滑かつ効率的執行のために果たしてきた役割は大きく・・・経済成長が強く国の内外から要請される中であって、建設コンサルタント業務規模は近年のうちに1兆円以上の国内市場をもつに至ると予想されております。

また、その意義と役割として「魅力に満ち (Attractive)、技術を競う (Technologically spirited)、独立した (Independent) 知的産業」に成長をするために基本的方向と枠組 (A T I 構想) が、建設コンサルタント中長期ビジョンとして示されております。業務内容の質的向上と、企業の健全な経営及び技術者の処遇を考え有能な人材を確保し養成し、より付加価値の高い仕事を遂行していく方向を目指さなければと考えるところであります。

建設構造材料の進歩に加え、先端技術の発展で高度な構造物が、採用されるようになりました。一昔なら1カ月以上の日数が必要とされた構造解析でも電子計算機の発展により、数時間で解決出来るようになりました。でも、いくら電算機が発達しても、それを使用するのは人間であります。使用する人の教養を高めなければならないし、技術者に心を教えなければならないと思います。それらの有能な人材に対し専門的基礎教育は工業高校の姿であり、我々業界の任務であるように考えます。

“高知工業は限りなく躍進しております。”

各業界のリーダーとしてそれぞれ活躍されております先輩諸氏のますますのご健闘をお祈り致します。

私も高知工業OBを心の支えにしながら、建設コンサルタントを知的産業としての確立と、社会的、公共的意義を認識しながら土木建設コンサルタントの道を歩む所存であります。

夢の実現と言語

山本 義輝 (昭29定機卒)

高齢化時代を迎えての、一つの実験台として、定年退職→大学生生活→海外活動、という私の前々からの夢が、現実のものになってくれました。

大阪のフランス語学校での2週間と、東京 (国際協力センター) での3週間の速成教育だけで、当地へ来ましたが、日常生活は一応困らない程度になってきました (これは言葉の問題より、現地での慣れの方が大切だと思いました)。

仕事の専門用語 (私の場合は農業と機械関係が主) につきまして、日本の場合、今ではほとんどカタカナではありますが英語化されています。

しかしフランス語ではほとんどが違います。私の想像では「ヨーロッパの (あるいは世界の) 文化の中心はフランスだーイギリス (英語) の風下でマネなどできるか」といった意識があるのではないかと思います。

この国は何百年にもわたって、良きにつけても悪きにつけてもフランスの影響を受けてきましたし現在も強く受けています。従って英語を使うことを極端にきらいます。

訓練 (講習) をするときには、前夜に教えた内容を簡単な日本文に書いてみて、辞書 (一般および専門用語) を引いて書いておき、それをもとに話すのですが、機械を前にして動作をしながら (あるいは図を書いたり) ですから、なんとか判ってくれているようです。

しかし地方へ出張講習にいくと、フランス語は若い人 (最近の義務教育を受けた人) しか通じません。何分この国には60程の部族がいて、それぞれが皆別の言葉です。

従って、こちらが始めにフランス語を使って機械の動作を見せて、次にその地方の役人 (技術者) が、その地方の部族の言葉で私が行なったと同じことを繰り返すわけです。

このようにして、何とかやりこなしているわけですので、他事ながらご安心下さい。

私が象牙海岸共和国 (CÔTE D'IVOIRE、コートジボール国) へ来ました理由

御存じのように、1990 (平成2) 年度における、日本の海外援助は、総額で1兆円を越えました。

象牙海岸国の要請によりまして、日本の無償援助で、農業機械化訓練センターが、去る6月に完成しました。

私は、大阪のクボタ (農業機械研究部門) を定年退職後、郷里の高知大学農学部で、2年間研究生生活を致しましたのが縁で、全国農業機械化協会から、農林水産省へ推薦していただき、国際協力事業団 (JICA) の海外派遣専門家として、この国へ技術指導に来たわけです。

この国の人たちの主食は、今まではキャッサバ (約400年前に南アメリカから渡来) やヤムイモ (約200年前に東南アジアから渡来) や雑穀 (トウモロコシやコウリヤン) でしたが、生活の向上にともなって、日本と同じように“米”が主食になりつつあり、人口の増加もあって、米が大変不足しており、アメ



リカ、タイ、中国、などからの輸入にたよっています。

現在の米自給率はおよそ50%（1986年のデータでは消費量55.16万トン、生産量28.16万トン、輸入量27万トンとなっている）であり、日本のハード・ソフト両面にわたる技術援助によって、食糧増産を計ろうとしているのです。

農業機械化訓練センターの状況

訓練センターは、日本側は6月に完成していますが、象国側負担の工事が遅れていまして、町からの水道引込み工事が、ようやく終わりに近づき、町からの電気の引込み工事の方は、やっと電柱を全部建て終わったところですよ。

新設道路の工事と、センター敷地周囲の、フェンス工事も、進みつつあります。

従いまして、受講者に対する訓練はまだですが、現在は象国側の講師と作業員に対しての訓練を行なっているところですよ。

その内容は、10ヘクタールの実習用水田で、水稲を作付けするため、トラクタ（33馬力、2台）に、各種作業機を順次取り付けて、草削りとプラウ耕を終えました。

これからは、碎土→湛水→代かき→播種と、作業を進めていくところですよ。

農業機械の格納庫内の主な機械

| | |
|--------------|-----|
| トラクタ（33馬力） | 2台 |
| トラクタ用各種作業機各 | 2台 |
| 動力耕うん機（12馬力） | 10台 |
| 耕うん機用トレーラー | 10台 |
| バインダー | 5台 |
| 普通形コンバイン | 1台 |
| 動力脱穀機 | 5台 |
| その他 | |

この国の概況

総面積32.2万平方キロメートル（日本の約85%すなわち四国を除いた位）、人口は1016.5万人（日本のわずか8.4%）にすぎません。

17世紀以降フランスの影響下（植民地など）にあるため、公用語はフランス語ですが、約60の部族からなりたっていて、それぞれに部族語があるため、地方へ出張講習で行くところがフランス語で説明し、現地の役人が通訳してくれる状態ですよ。

日本への主な輸出用農産物は、コーヒー（生産量はブラジル、コロンビアに次いで世界第3位、インスタント用では第1位でネスカフェの工場もある。ただし気候が高温多湿のため品質のよいのができず主にブレンド用です）、ココア（生産量は世界第1位）、綿花（北方のサバンナ気候帯のところで生産）、木材などがあります。

たいした工業はありませんが、日本のユニチカとの織物合弁

会社（2箇所に工場があり、現地従業員約2,000人、原料の綿花はこの国の農業省直轄綿花公社が栽培管理、日本人は社長を含め7人程）は有名で、貴重な就職先になっています。

在留邦人につきまして

この国には、現在約170人ほどの日本人（子供も含めて）がいます。

公的機関としては、大使館、世界銀行、などで、有力商社は軒並み事務所を持っていますし、電気や機械の企業の事務所もあります。

宗教では2教団（真光、統一協会）が、活動しているようです。

日本料理店が1990年春からできて喜ばれています。日本酒、冷ヤッコ、さしみ、てんぷら、ラッキョウ、ツケモノ、まきずし、などがたべられます（うどんや親子どんぶりなどはありません）。

日本人女性でヨーロッパの大学に留学中に、この国の男性（黒人）と知り合って結婚し、住んでいる人なども複数名いますし、フランス人など白人と結婚して住んでいる女性もいます。また外国人女性と結婚している男性もいます。

子供たちは、普通は外国人用の私立学校に通学していますが、日本人補習学校（幼稚園から中学まで）があって、政府から送られてきた日本の教科書で、奥さんたちや勤務の合間に男性が交代で教えているようです。

2月には遠足があって、私も参加して1日講師で、道中見かける植物や農作物や土の話などをすることになっています。

在留日本人会の組織があって、ゴルフ、マージャン、野球、などの親睦行事があります。

去る12月8日の夜は忘年会があって、ほとんどの日本人が揃いました。演芸会もあって私たち単身赴任者3名（一緒に仕事をしている専門家とこの国の柔道指導に神奈川県警察から派遣されている柔道7段の人）で、水戸黄門象牙漫遊記をやりました（私は黄門役で、そのために1箇月余りヒゲを伸ばしました）。

「職を求めて卒業す」

西ノ内 寿 一（昭29電卒）

私は、昭和29年に電気科を卒業し、大阪に出て40年ちかくなりました。光陰矢のごとし、小松生幹校長から、「——は職を求めて卒業す」の色紙を戴いて、それぞれの道を歩みだしました。就職難の厳しい年で、恩師たちは、東奔西走、各社の訪問で大変でした。

在学中に、「吉田茂首相の2度の母校訪問あり」と卒業アルバムを捲って、記憶が甦ってきました。母校は講堂はなく、卒業式も市商の講堂を借りて行いました。産業の先き手として働くために、学んだ3年間の思い出は、同窓会（鯨工会）等での、

諸先輩の方々、同級・後輩たちとの交友を通して、段々と膨らんでいきます。私は、高岡郡（現土佐市）の新居というところから、5里（20キロ）の砂利道を、荒倉峠を越えて、また、海岸線を自転車で通学しておりました。バスやトラックの通った後は、ほこりで真っ白、口の中はジャリジャリ、雨の日も、から傘さして、パンクやチェーンが切れるなどすると、通学の仲間が乗せあって、助け合い、欠席することもなく、足腰が強くなって、今でも自転車だけは自信があります。当時は、とにかく、おなががすいて、1時間目に弁当を食べ、夜学の売店のおばさんからパンを買っては、小遣いに不足し、絶えずアルバイトをしていたような記憶があります。

執行部と柔道部にも席を置きましたが、亡くなった武内英通君（機械科29年卒）は強かったなど、哀惜の念を禁じ得ません。勿論、相撲部の強いのは伝統でしたが……。

学科では、戸梶先生（教頭）から三角関数・対称極座標を、高校の枠を越えて学んだ時の驚きは、魔術の様に今も覚えています。電気の道も、学問の道も通っていませんでしたが、素晴らしい学校だったと思っています。

大阪へ就職のため、蒸気機関車にひかれ、トンネルの多い土讃線で煤だらけになって、出発しました。

当時の宇高連絡船は直接乗客が乗ったまま客車を積み込んだ形で運行されていました。大阪までの間、何度も米の担ぎ屋の逞しい女性たちが、座席の下に荷物を押し込み、運んでいました。神戸駅ぐらいから、運び出して行く。まだ戦後9年、そう言えば、就職後のこと、残業（超過勤務）すれば、労務加配米が貰えました。当時も、まだ煙りの都、水の都、大阪人の自慢の種でしたが、環境変化に順応出来なかったのか、私は無理がたたって、4年目に須崎に帰り、約1年半療養したことがあります。今は住めば都、鯨工会会員各位の活力にも、驚いているこの頃です。同時代の経験を共有するという事は、どんなに素晴らしく、また、力付けられるものだと思います。

創立80周年を迎えるにあたって、改めて歴史の重みを感じます。恩師や、同級生のその後、先輩、後輩の活躍を、同窓会を通じて知る事が出来るのは幸せなことです。時代は変わっても、産業の基盤は、工業・製造業だと信じる1人です。また、郷土の変わり方、土佐人の気質の変化を気にするところもあります。同窓会の役員の方々、会員の方々の支えによって途切れることなく、引き継がれていることも誇りのひとつであります。今は、同窓会会員のご支援も得て、地方自治に関係する様になりましたが、諸先輩の努力によって、この面でも、活躍され、新しい道を切り開いておられる方々の多いことにも、敬意を表するものです。90周年、100周年、2世紀へと、発展されんことを祈念して、記念誌掲載のご挨拶とともに、お礼とさせて戴きます。

金魚と天狗と裸踊り

森 素彦（昭30建卒）

①先輩との出会い

私が幼少の頃、父が金魚を飼っていた。庭に直径が70センチくらいの金魚鉢が5つ程あり、土佐金魚が4～5匹づつ泳いでいた。春になると金魚の子がたくさんかえるが、家に残しておくわけにもゆかないので、誰かに引き取って貰わないといけな

い。そこで我家に登場してくるのが工業学校の生徒さんである。たぶん父に押しつけられたものと思うが、金魚の腰がふくらんでシッポが開くころになると次々とやって来て、それでも可愛い娘ならぬ金魚をもってにこやかな笑顔で帰ってゆくのが常であった。

②天狗の息子にされた日

「おまんは天狗さんの息子じゃろう」。忘れもしない終戦の日の昼さがり、池川町の小学校の庭で中学生からいきなり声をかけられてビックリして身をすくめた。当時国民学校3年生だった私は30分程前に母と共に池川町に着いたばかりで、母は学童疎開の引率で先に到着している父と落合うため、私を残して連絡に行ったあとの出来事であった。山深い知らない土地に来て1人残されて、不安でいっぱいのところへ、いきなり天狗の子かと聞かれたものだから私はたまげた。「僕は天狗の子じゃない」と真顔で否定した。するとその中学生は「おまん森ゆうろがよ」と云うもんじゃき「うん」とうなずいた。

そうしたらその中学生は、すぐさま後を振り向き「おーいみんなきてみや、ここに天狗さんの息子がおるぞ！」と大声で云った。

すぐさま5～6人の中学生が集まり、「どやどや、これが天狗さんの息子か」とみんなで私をとり囲み、珍しいものでも見るようにニヤニヤしながら、じろじろ私をみている。

私が小さくなってふるえていると、学生の1人が「おまんの親父は工業の天狗さんで通っちゃあよ、おまんは知らんがか」……

このとき私は父が工業学校で“天狗”と呼ばれていることを初めて知った。なるほど私は“天狗の子”であったのか……。以来先輩には、天狗の息子で通り、ずい分可愛がって貰ったが、忘れられない思い出のひとつである。

③卒業の日の思い出（日記帳より）

昭和30年3月9日、第7回高知工業高校の卒業式の日である。午前10時、向いの高知商業の講堂を借りての卒業式が始まった。昨日までは卒業式はすごく感動的なものだろうと想像をたくましくしていたが、借屋すまいのせいか、どうもじっくり気分が乗らず案外淡々と終わってしまった。

昼頃式が終わったので一旦家に帰り、友達と待合せして帯ブラ

をしたのち4時過ぎに謝恩会場の丸福に着いた。会場には建築の同級生が32名、建築科の先生3名（坂本、山本、築取先生）、木材工芸の先生3名、化学の先生1名の41名が集まって早速賑やかな、謝恩お別れ会が始まった。酒が入るにつれて歌や踊りも飛び出し、それは楽しい宴会となった。中でも圧巻は渡辺先生の真裸でのヨカチン踊り、皆が声を枯らして声援を送ったのは言うまでもない。

謝恩会の席で感じたことだが、このような集まりの時、人間それぞれの性格がそのまま表われるように思えた。そして建築科の級友は何と良い人ばかりが集まっているものだと思いうれしかった。特に心に残ったのは、大石君が涙を流しながらみんなに云った別れの言葉だった。「僕は心を感じるころがあって泣いたけれど、どうかゆるしてくれ、そしてみんなで手紙の交換をしよう。世間の人が形式的に使っている年賀状や暑中見舞などを僕達は精神的な心のつなぎにしよう。皆これからバラバラに別れてしまうが、せめて“こういう所で僕は元気で頑張っているんだ”と云うことを友達に伝えるようにしようと思う。どうか今後よろしく願います」。と云ってくれた。その言葉をみんながしんみり聞いた。このとき私はこの男ばかりの学校へ入り、こんなすばらしい仲間と一緒に卒業できた幸せをかみしめていた。

しかしその3年後、大石君はこの世を去った。今は亡き大石圭佑君のご冥福を祈り合掌！

出まかせ今昔

大原政盛(昭30木工卒)

昭和27年、高知工業高等学校に入学した年である。随分遠い昔の事ではある。世紀の悪夢と云えるだろう太平洋戦争による浪費と、計り知れない人身の犠牲を払った敗北混乱の時代が少年期であった。尋常国民小学校1年生から毎日朝礼があった様に思う。全校生徒を校庭に整列させ、苦虫を噛み潰した様な顔、幼な心に怯みを感じさせる様子の校長先生が「キオツケ！北東に向って礼！」の号令、教育勅語なる巻物を取りだし、朗読が始まる。凡そそのいみを解する能のない子供達に直立不動をさせているのだから、今時想像すらも出来ない光景であったろうか。

よくぞ敗戦して呉れたと云えばお叱りを受ける事もあろうか。敗戦後の大きな変革の中であって、戦時教育を支えて来た先生方が自由と民主主義を教える様になったのは新教育制度に変わった小学校4、5年生の事であったろう。中学生になって、主権在民、三権分立、言論の自由、農地改革と財閥解体等々、今迄絶対的であった親達や兄貴達と同じ時限の知識を習う事に優越感を覚え少々生意気さが身についたものである。四国山脈の山懐に抱かれた百姓の小作は、生意気さが身についたとはいえ、しょせん井の中の蛙、高知市内に出かける機会など一度もない

まま、少年期を過ごしたのだから、戦中戦後の都会に於ける悲惨さは想像するだけである。食糧がなく空腹に耐えて過ごした体験をした知人の話を聞く。山間部の百姓は戦中も戦後も、朝は朝星夜は夜星苛酷な労働に耐えながらも麦飯と芋を主食にして、腹の膨らむものには事欠く事はなかったされど現金収入の術は乏しく、子供を高校に行かせる事は大変な負担であったに違いない。いくらかの米といくらかの小遣いをもらって高知市内に下宿、自炊をして、乏しい小遣いを割振りして菜を買い、時には帯屋町で中華そば或いは、カレーライスを食べ、その美食に感嘆する事もあった。街はパチンコ屋と映画館、そして九反田の川べりから堀詰にかけて赤線地帯、敗戦後7・8年当時の復興振りはどんなものであったろうか、個々の懐は貧乏でも結構活気づいていた様にも思う。

敗戦日本の復興を導いた立役者と云えるであろう、偉大な政治家、吉田茂首相の国会での「バカヤロー」解散があった年である。選挙運動の為帰高した際母校を訪れて、生徒を前に演壇に立った事がある。どんな話をされたかは全く記憶していないが、生意気盛の生徒の中から「バカヤロー」の野次が飛んで無然とした首相の顔が印象に残っている。昨今我が子とその年頃を過ぎて、時世だったのだろうか、物怖じしない邑楽かな土佐の気負だったのだろうか。我が子を思いその頃の自身を顧みる時、確に素直で良い子に違いないが何となく気骨に欠ける様に思えて、それは時世と云う事か土佐風土の味付けが足りなかったと云う事か、ちなみに子供は大阪で飼育した。

1991年11月の同窓会報に、大阪鯨工会会長、吉岡利雄先輩が「忘却の彼方にあった故郷の学校」と、云っておいでだったが、正に私もその通りで30年母校を後にして転々流浪の時が長く、近年になって、大阪鯨工会に出席させて頂いているが、先輩の方々、御同輩、そして後輩の方々、我が同窓生は、

「エローナッチュー、みんなタイシタモンゼヨ」

「オラーマッコトイキチョルノガエライケンド」

正にそれぞれ中堅であり幹部であり、管理者として御活躍なされておいでである。大阪の中津と云う所に、土佐っぽ、と云う料亭の本店がある。そのオーナーも又同窓生であり、大阪鯨工会の運営に多大の尽力を頂くお一人であるが、正しく、高知工業高等学校の校風は、知識の集積、技術の習得に加えて、土佐っぽ気質こそが大切かと、昨今経済大国と云われる日本の社会にあって、飢えを知らず、それなりの贅沢が身についた青少年に、欲望の欠落傾向とみたらよいのだろうか。

努力、鍛練、忍耐、辛抱、そんなものの中から取得出来るものを避けてばかりいる様に思える。ものを造ると云う術を習得、発展させることこそが、経済基盤とならなくて、煽動された泡経済の処世術を格好由とした世相は、見直される時であろう。母校に学び創造の力を養う諸兄に敬意を払う。今世に云う3K無くして生産の術など獲得できようがなからう、と思われませ

34年前の思い出

浜 真 一 (昭31士卒)

卒業して34年、株式会社大林組に入社した当時のことを遠い昔と思い、また、一方では昨日のように感じるこの頃ですが思い出話しをしてみたいと思います。

南国で生まれ、太平洋を毎日見ながら育った私が入社して配属されたのは、北国の雪深い朝日連山の中で山形県東田川郡朝日村に東北電力が施主で、大林組が施工している八久和ダムの建設現場でした。ダムの規模は堤高97m、37万m³の重力式で大林組としては最大の工事事務所でした。

大阪駅から急行日本海に乗ること16時間で鶴岡市に到着、鶴岡で1泊して翌日ジープで1時間揺られ、徒歩で雪の中6時間も要して雪崩の危険を避けながらやっと辿り着いたダム工事地点は、4月初旬だというのに一面雪の中で、ダム掘削中の所だけ地山が見え、工事再開のために資材運搬用の道路をブルドーザで除雪している状態でした。着任したその夜、けたたましいサイレンの音で起こされ、事務所に行くも吊橋のアンカー埋設用トンネル掘削中に落盤事故が発生し、犠牲者が出たとのことで手荒い歓迎を受けました。その上、1ヶ月もしない内に、ポンプ室の水槽を清掃中、ポンプ室のすぐ下流で雪崩が発生し川が堰き止められ、ダム状態になって4名もの尊い生命が失われる事故があり大変な所へ就職したものだと思いました。

土木工事は、常に自然との戦いで、自然を制するために知識を溜め智恵を出しているのですが、自然の恐ろしさをまざまざと見せ付けられる場面に出合いました。8月の末頃ダム掘削もほぼ終りに近づき岩盤清掃中に、突然の大雨で川が見る見る内に増水し、仮締切をオーバーして川底で稼働中の重機が逃げ間もなく水没し、流されてしまいました。その水量、出水の速さ、濁流をただ見ているだけで手の付けようもなく自然のなすがままにされたのです。出水が納まった後の被害が大変なもので、仮締切のアーチダムの一部が破壊され、川底の掘削は元どおりに土砂で埋められ、当時国内で最大のD-120、D-8ブルドーザーが100mも流され機械の一部が見えるだけの状態に埋まったり、ダンプカーが川底から20mも高い所に流されて今にも落ちそうな状態でひっかかったものが見付かるなど想像を絶するものでした。しかし、すぐに別の機械を投入して工事再開に取り組み、昼夜を分かたず、1日の休みも無く3ヶ月程全員協力して頑張った結果、雪の降るまでに、川底掘削も完了してダムのコンクリートも10数mの高さまで打設することができました。半年間は雪に埋まります。何ととっても豪雪地帯で降雪量20数m、積雪4m以上という所ですから南国育ちの私には別世界です。冬の間は雪との戦い、といっても雪から人間の生活空間を安全に確保するための守りをするだけでしたが。そ

して冬も終りダムのコンクリートも順調に打設され70%位の高さまで進んだ時にまたも大雨が降り、ダムに水が溜り、この時まだバイパストネルの閉塞ができていませんでした。バイパスの通水能力の数倍もの出水となったものですから、ダムの水位がどんどん上り、バイパスからもすごい圧力の水が出る状態となり、バイパストネルの出口が水圧で飛ばされ、山が削り取られるようになって見る見る内にダム本体近くまで崩れダムも壊れるのではないかと思われました。しかし、この時も自然を制する力はなく、自然のなすままにされ、ただ見ているだけで早く雨がやんで水位が下ることを神に祈るしか手の打ちようがなく、人間の力の弱さをつくづく感じました。私はダムの満水になった状態を見ることなく大阪に帰りました。ところが、先日、日経コンストラクションという雑誌を読んでいたところ、八久和ダムの浚渫記事を見付け、あの山の中で今もダム保全のために苦勞している人もいるんだなあと思無量です。当時を振り返って見ますと、水力発電所の工事では1億円に1人の犠牲者がでることになっており、まだ何人分残っているなどと不謹慎なことをいっていました。

福田元首相ですか人間の命は地球より重いといったことがありました。当世では建設業界も安全第一で安全のためには、知恵もお金も出し惜しまないことになっております。

工事の設計、計画段階から安全に万全を期することが常識で、施工技術の進歩もさることながら大変かわりました。現在、あのダムを施工するとしたらと思ういろいろなことが頭に浮かび面白いものです。現在大阪の地下鉄工事で既設の地下鉄の下を横断して施工する計画をしていますが、土質が砂礫層で水位が高く交通の激しい交差点部で厳しい条件の仕事ですが、自然に負けないように自然が起こしそうなことを先取りして、対策を施し自然を制すべく知恵をしぼっています。

楽しかった学園生活

山口範子 (旧姓岡林) (昭33化卒)

私は家が吾川郡吾北村ですので通学は無理で旭駅の近くに下宿して通学しておりました。当時下宿代は4・5畳で1,200~1,300円位でした。田舎から米を持って来、木炭もとってきて七輪に炭火をおこし自炊していました。

当時女の子が男生徒ばかりの工業学校に行くと言うことで、大分反対もされましたが、母親が理解がありひらけておりましたので賛成してくれました。田舎の中学校が産業教育の指定校となり、私達は養蚕を研究課題として取組み初めて野外で飼育することにしました。そこで出来た自然のままのマユと、家の中で飼育したマユと、どのような違いがあるか研究していました。そのとき白衣を着た養蚕関係の先生が学校にきて検査をするところを見てその白衣にあこがれ、工業学校の化学科にいったら白衣が着れるので入学したわけです。



又吾北村からブラジル・パラグアイに移民として2~3人行きましたが、私も何か変わったことがしたいとゆう意識がありましたので、親がなかったらそちらの方に行っていたと思います。在学中は毎朝早く学校に行き皆がくるまでに掃除をすましていました。しかし今のように男生徒とざっくばらんに話しをする雰囲気がなく、あまり話しをすることもなかったので今から思うと残念なことです。

しかし男生徒の方は当時としては女生徒はめずらしく、何かと意識はしていたようです。学校から帰って大丸なんかへ買物にゆくと、あくる日は黒板に誰それさんはどこそこへ行っておったとちゃんと書かれておりました。

私は体育が好きでしたので体操の時間も結構男の子と一緒にやりました。T定規に製図用紙を巻いて歩いても全然抵抗はありませんでした。

小松一夫先生が化学科の科長でしたが、先生には私と同じ位のお嬢さんがいたので、何か買物してやる時には私をよく連れて行ってくれました。岡林初喜先生の数学は苦手です。い分苦労しましたし、社会科のマンチ先生は教えたところから試験問題を出さずに全然違うところから問題を出していました。

同級生の坂本芳香さんと一緒に文芸部に入り俳句を作ったりしました。運動会では女の子が珍しかったので仮装行列で「箱入り娘」をやらされました。下宿の近くで叔母が美容院をやっていたのでそこで格好をつくって、男生徒が迎えにきた自転車に乗せてもらって学校まで行き行列に参加しました。リヤカーに乗って運動場を一周したのも楽しい思い出の一つです。

卒業して本校卒業の主人と結婚しました。東京で主人が建築業を独立してやるようになりましたが、5年目に亡くなりました。そこで高知に帰り建設関係の仕事につきました。この業界にはずい分と工業の卒業生が活躍しており改めて工業学校の優秀さを感じました。

今は田舎（吾北村）の診療所で医療事務にたずさわっておりますが結構毎日忙しく充実した日々を送っております。

体操と私

吉本幸孝（昭33化卒）

体操を始めたのは中学からです。小学時代の友達、岡林大夫氏、広瀬精一氏と3人組で昭和中学校でした。河内校長先生、岡林つや子先生、高知工業生の池田氏等に教わって1年。高知市の大会では1位を取りつづけ、県大会では、団体で、1位。個人では、岡豊中学校の水田敬二氏、香我美中学校の山本実氏がライバルでした。

そして、広瀬精一氏は追手前高校に行きましたが、私達は、高知工業高校に入学出来ました。あこがれの母校には、顧問に、山崎順猪智先生、先輩に吉永氏、岡村氏等がいました。その頃は、体育館も無く、マットはグラウンド、鉄棒は砂場、リングは教室の入口、といったぐあいでしたから、雨が降ると、他校に練習に行く有様でした。

ある日、山崎先生が「いい物があるぜよ。」と云って見つけてくれた演技台。それは、私達が中学生の時、教育大学のオリンピック選手の演技会が高知市営球場でありその時、敷つめた演技台でした。選手は、小野・塚脇・大泉・関氏等教育大学のメンバーで中学生の私達もマットワークで出していただいた思い出の台でした。その板を皆で、グラウンドに敷く事が練習の始まりで、終ると片づけるのです。

日が経つにつれて、1枚2枚と減り、マットの長さだけになり、板を敷いておける場所を見つけました。校門前の建物跡です。そこに板を置いてからは、マットを、遠いグラウンド横から運ぶ事が大変でした。

2年生になり、私と岡林氏は水泳の飛込みで国民体育大会に出る事になりました。飛込みは、中学時代から夏だけ市営プールに行って練習をしていました。冬は体操だけですが、夏は、2つの練習をするので、それは大変でした。ただコーチの横田一先生が、高知新聞社の運動部にいて、体操と水泳にかかわっていたので出来たと思います。岡村氏はその後働きながら、飛込みを続け、数名の選手を育て、大学へ送りだし高知の飛込みを全国に知らしめました。

3年生の時、体操で全国大会に出て、初の入賞をし自信をつけ、静岡県での第12回国民体育大会では追手前高校の広瀬氏を加え出場しました。入場式当日、秋田等2・3校が練習しているのを見て、先生は「日本一のチームが練習している敗けてはいかん！」と云い、選手全員入場式に出ず練習をしていて、大会役員等に叱られた思い出や、試合が終り、結果も見ずに、先生に連れられて、日本一の山、富士山に登りました。しかし雨が降り8合目までしか登れませんでした。

後で聞いたのですが、跳馬で北村卓司氏が優勝していて、役員の方が表彰式に出て、かわりにいただいたと、あきれられた事もありました。この時期の母校は体操の黄金時代であったと

思います。恩師山崎順猪智先生を始め、体操界に、高知工業高校有りと、全国に知らしめた事には、変わり無いと思っています。

卒業後は、日本体育大学に進みましたが、その頃には、高知中学校の島田真月先生が体操を中学生に熱心に指導をしておられ、夏休み帰高の時等、一緒に練習をさしてくれたものでした。一緒に練習をした中学生が、高校生となり活躍するようになっていきました。やがて、全国高校体操選手権大会で優勝し、高知工業高校から高知高校時代へと変わっていったと思います。

80周年には、大きな体育館が落成するとの事ですが、母校に体操が復活する事を祈っています。

「好きになった高知工業高校」

松本（中野）経子

（昭35化卒）

私が高知工業高校に入学した昭和32年には、女生徒は全校生1,000名中、たった7名（3年生3名、2年生1名、1年生3名）私が入った工業化学科は2名でした。

私は女6人男1人の姉妹の中で育ったため男の人と話す事が苦手なのに、どこを見ても男・男・男で、どこに自分を置いて良いやら判らないまま、3年間を過ごしてしまいました。毎日学校へ行くのが苦痛で、どうしてこの学校を選んだのかと、自分で自分が嫌になっていました。でもやめる勇気もなく3年間過ごしました。

卒業後、恩師（田所胤雄先生）のお世話で、嫌でたまらなかった母校に、実習助手として勤めることとなりました。勤めはじめて、すてきな先生や、やさしい先生や、可愛い生徒達と生活している内に、だんだんと高知工業高校が好きになってきました。結局、私の青春は、母校で過ごさせてもらった事となります。

あんなに苦痛だった母校に13年間もお世話になり、今は楽しい思い出ばかりが、脳裏に焼きついております。特に13年間付き合ってくれた、生徒達との交わりを忘れた事はありません。

高知工業卒業後30年も過ぎると、3年間、同じ席で学んだ同級生に、とても会いたくなりました。それで今年の正月、矢野

さん（事務局）に相談しました所、私の卒業した35年、36年卒、40年卒の合同同窓会を催して下さいました。田所先生を中心に30名の方々とお会い出来、とても楽しい一時を過ごす事が出来ました。皆様立派にご成功なさって、まぶしく感じられる程でした。

今は高知工業高校に学んで、ほんとうに良かったと思っています。そして高知工業へ勤めさせていただいたお陰で、苦手だった男性の扱い方も良く学べ、3人の息子や主人の操縦が上手(?)に出来ました。

北海道へ来まして14年が過ぎ小学生だった息子達も夫々ともに成長して、長男は札幌医大、次男はホテルでコック見習い、3男は高知医大で学んでおります。なかでも3男は坂本龍馬が大好きで高知へ行きました。

故郷を離れると高知の良さが良く判る気がします。特に何ごとにも筋を通す“いごっそう魂”がいいですね。そして美味しいつぼと鰹のタタキ。いつまでも土佐の精神が受け継がれる事と、高知工業高校の発展を祈っております。

母校の思い出

渡辺 雅 幸（昭35化卒）

灼熱の炎天下の下で、また器械器具の出し入れが始まる。放課後、第一番に体操部員が全員でやる仕事だ。その昔、体育館であつたらしい建物の土台が残された場所に、板張りの仮りの床が敷いてあり、その上にマットや鞍馬そして並行棒などの器具を置く。1日の練習の始まりだ。そして、練習に励んだその後で、また器具の片付けが待っている。その作業は高知工業に通った3年間毎日つづいたが、不思議な事にちっとも苦にならなかった。それだけ体操が好きだったのかも知れない。雨の日には狭い渡り廊下の下に器具を置き練習もした。そして少し危ない鉄棒の練習はグラウンドにある砂場の中だった。真夏の炎天下の下では鉄棒のバーは焼いたように熱くなる。その熱いバーのままで練習をすると、手の平の皮が剥けるのが早い。それを避けるため、練習が始まると同時に雑巾を水でぬらしバーの上に掛けてやる。そうすると、鉄棒の練習が始まる頃には程良く温度も冷めているという段取りである。

今こうして昔を振り返ってみると、とに角あの当時は、体操が好きで好きで仕方がなかった様な気がする。私が体操競技というスポーツに興味を持ち始めたのは、小学校4年生の頃だったと思う。グラウンドの片隅にあった砂場に鉄棒があり、そこでよく遊んでいた事から始まった。そして、中学時代には、体操競技部に入り初めて正式な練習の仕方を教わりローカルの試合に出場する機会もあった。しかし、私を本当にスポーツの虜にしまった時代はやはり高校に入ってからだった。それ以前の器械体操は遊びとスポーツが半分ずつだったのではないかと思う。





体操部

私に体操競技というスポーツの真の価値を教えてくれたのは、当時の工業高校の体育教員でもあり、高知県体操協会の理事長を務めていた山崎順猪智先生である。私の当初の先生の印象は、とに角怖い先生だった。高校2年生の頃迄は、あの小柄な先生によく大きな声で叱られた記憶が有る。しかし、先生の叱る言葉には、常にスポーツ・マンとしての教訓や心構えに対する教え、そして何と言っても情熱があったように記憶している。従って、幾ら叱られても、嫌だったという記憶がない。ところが、私が3年生になり、チームのキャプテンになった時から、先生の私に対する態度がガラッと変わったのを今でも驚く程ハッキリと覚えている。まず、先生は私を部員の前で叱る事を全くしなくなった事である。そして、むしろ私に色々な事に付き相談を持ち掛けて来るようにさえた。それは最初、私にとって戸惑いでもあり、また不安でもあった。しかし日数が過ぎるにつれて、先生は私に責任を持って考えるという事を教えようとしている事が少しずつ分って来た。師に常に教えを乞い、それを只忠実に守っていただくだけでは、独創性も、想像力もない真似ごとだけの体操しか身に付かない、という事を先生は私に伝えようとしている、と私は感じた。事実、私の体操が、大きく伸びたのは、それからである。私の心の内に秘めていた、未知のものに対するチャレンジ精神や、その後、体操の技に対する独創性を求めようとする基本的な姿勢が、この時代に培われたと言って過言ではないと思っている。好きなことに情熱を打ち込みとことんまでやってみる。そしてそのような私達の周りには、常に恩師の慈愛に満ちた目が光っていたのを覚えている。

やがて高知工業を卒業し日体大に勧誘されて特別奨学生として入学することが出来た。母子家庭の貧しい家庭に育った私には奨学生としてでなくては大学に行けない状況だった。それを知っていた恩師がかなり走り回って手回ししてくれたお陰で大学にまで行けたと私は今でも大変感謝している。

大学に入学して1年経った後の春の合宿中にアキレスの断裂2回という不幸に見舞れた。私が体操競技を始めて第1回目の大きな怪我であった。そして私の足の手術をしてくれた医者か

ら私は体操競技に関しては再起不能という宣告を受けた。その時、私の心の中でこんなことで負けてなるかという負けじ魂が頭を持ち上げたことは言うまでもない。入院40日もの間にリハビリを徹底してやったお陰で、手術を担当した医者も驚く程のスピードで回復し、体操競技への再起を固く決心して退院したのである。それからというものは無我夢中で練習に打ち込んだ。寝ても起きてても体操の事しか頭になかったと言っても過言ではない。短期間で体力もめきめき回復し、精神面での成長も著しかった。長かった入院中私はよくベッドの上で自問した。何故自分は体操をそれ程迄にやりたいのか、また体操とは一体自分にとって何なんだろうと何度も繰り返し考えてみた。従って、その頃から次第にスポーツの本質的なものに対して目を向ける姿勢が出来てきていたように思う。私を体操競技と言うスポーツに生涯を賭けてチャレンジする、という方向に駆きたてて行った要素がそこに芽ばえていたように思えてならない。

やがて、2年後に見事体操競技界に復帰を果たした私の進歩は順調で、その頃世界のトップを走っていた日本のナショナル・チーム入りを1963年に果たした。しかし、私の選手歴はその当時の多くのナショナル・チーム・メンバーに比べてそれ程華やかではない。怪我が多かった事、大事な試合でのミスが多かった事などの理由で東京そしてメキシコ・オリンピックの両方共代表選手からもれ、素質に恵まれた大型選手と騒がれながらも選手としては大成しなかった。そして1968年のメキシコ・オリンピック最終予選中怪我の為棄権をしオリンピック出場を諦めた時から、自分の選手生活後の人生の有り方について考えるようになった。

それ迄の私には、とに角体操が全てだった。私は体操を通して全てを学び、人を知り、夢を育てた。その体操から自分を離別する事は考えられないという思いと同時に、自分が選手として果たせなかった夢をなんらかの形で実現してみたいという強い願望が自分の心の中に残っているのに気が付いた。その為には何をすれば良いのだろうか？そう考えているうちに、段々と心の中で夢が広がり、更に大きくなり、ついには思いが見知らぬ遠くの外国にまで馳せて行った。

そうして、1969年アメリカ大陸に渡り20数年、自分の果たし得なかった夢を求めて外国人を相手にそのチャレンジはまだ続いている。いつの日か、世界一を目指して。

あの灼熱の日の下で熱く育った夢、不屈の精神、そして滾らない情熱は遠く海を渡った外国で今尚私の心の中で生き続けている。私にとっての高校の思い出は一粒の清涼剤でもある。爽やかな、若き希望に満ちた日々の思い出は、私に今でも明日への活力を与えてくれる。

母校を思いながら。

インディアナポリスにて

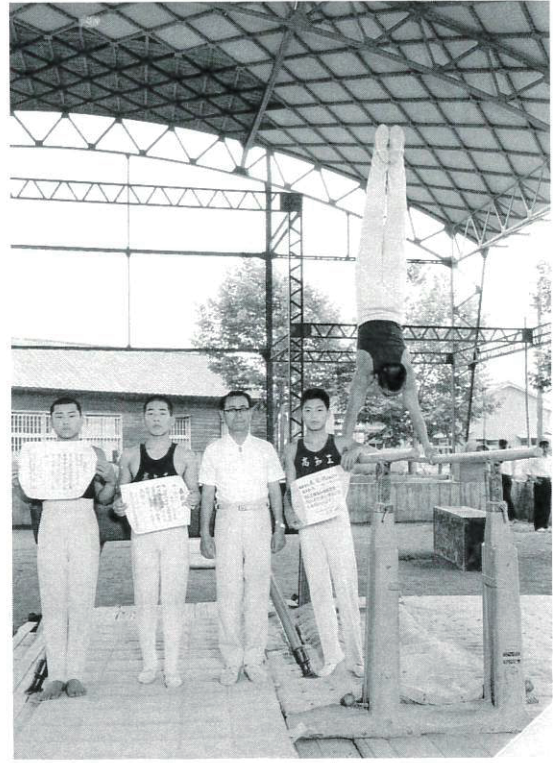
体操部13年

森岡 洋二 (昭36木工卒)

私の母校でもあり、又最初の教師生活10年を過ごした高知工業高校の創立80周年を心からお祝い申し上げます。また、この度、記念誌の発行にあたり、私のような者に執筆の依頼をいただき大変恐縮に存じます。

昭和33年の春、県下、四国はもとより全国的に活躍していた体操部にあこがれて、木材工芸科に入学しました。その当時は体育館がなくて、青空練習場でした。雨が降ると体育館のある追手前高や西高へ通ったものです。普通ならしんどいところですが、正直いってそこには女子体操部があったので、それが大きな励みとなっていました。むしろ雨が降ることを願ったものでした。夏の猛暑には、木陰で休み、時々頭から水を被っての練習でした。又冬の極寒には、たき火に当てて体を温めながら練習をしたことでした。このような悪条件でしたが、ほとんど休むことなく太陽が筆山に沈むまで頑張ったことを、今では懐かしく思い出します。

昭和40年、大学を卒業して4月に高知工業定時制に教諭採用となりました。その時分には、今の体育館で体操部、バレー部、バスケット部、卓球部、ボクシング部の5つのクラブがところ狭しと活発に練習をしていました。私は、午後2時過ぎから登校して、定時制の授業の始まるまで自分の練習をしながら、体操部の指導をする生活が、転勤までの10年間続きました。私がまだ若かったこともあり、「バカたれ、そんなことができるのか、見よってみい。」といった調子の厳しい練習でしたから、いい加減少ない部員の半数以上が退部してゆくありさまでした。私の結婚式の当日、昼からの式だからということで、こっそり午前中練習に出掛けましたところ、家では、新郎がいないと大騒ぎしたエピソードがあります。ほとんど休むことがなかったので、部員減少は尚のことでした。それでも、最後まで頑張った部員は、毎年個人で四国大会や全国大会、国体にと出場しました。団体で県大会、四国大会で優勝して、全国大会では予選通過して、みごと11位になったこともありました。17年以上になるこの教え子達は、今はそれぞれ独立して、県内外で活躍しており、大変嬉しく、又心強く思っております。その後体操部は、私が転勤した後、2年で活動が停止してしまったとのこと、淋しく思っています。聞くところでは、近々2階建の素晴らしい体育館が建てられるとのこと、これを機会に体操部が復活して、活躍のあることを願いながらおわりとします。



体操部

「故郷は遠きにありて想うもの」

久保田 昌良 (昭37機卒)

“南国土佐をあとにして、都にきてから幾年ぞ” 早いもので30年になりますが、その間一度も高知に帰ることなく過ぎてしまいました。工業卒業前に一家が大阪に移ったこともあり「故郷は遠きにありて想うもの」を実感しております。思い起こせば、日立（ひたち）と読めなかった会社、日本地図の関東から日立市を見つけられなかった地にどうして来たのか、我ながら不思議でなりません。

昭和37年当時は日本経済が神武景気の絶頂期で就職戦線は高卒でも売り手市場。夏休み前に無試験、面接のみで、キ、テーからげて5名が日立地区にいと簡単に内定し、「お前が研究、彼が〇〇工場」、今考えれば信じられない就職でした。残念乍ら、残っているのが私1人（東京本社に1名、他は退社）という状況です。先輩達は重電、家電の各部門で夫々中心的存在で活躍しておりますが、我々以来バッテリーと後輩が続いてないことを考察すると何が原因か？反省しているところであります。しかし、茨城地区としては毎年優秀な後輩が続いており、該当工場での先輩達の活躍と母校の努力を心強く思っております。

さて、私事です。研究所では約20年前の環境問題に端を発し、当社の環境技術の研究開発部門として設立された部署に集められ、最初が公害防止の水質浄化から化学の分野に手を染め、バイオから現在、地球環境問題に関する研究部門「環境技術開発センタ」に所属しております。キ卒ですがCOD、BOD等の水質分析から、魚油からの生化学物質の分離精製など畑違い

CO₂のつらら

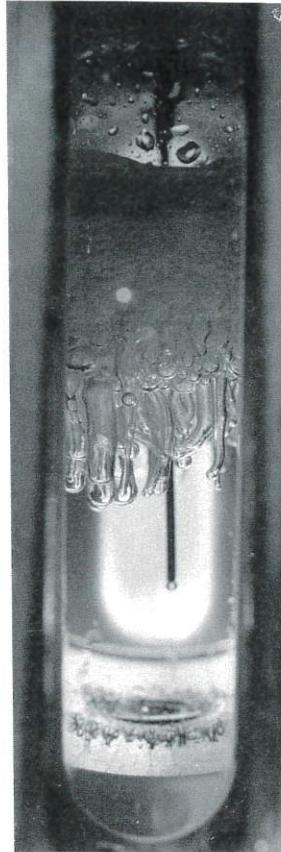
試験管の上部から下に向かってのびる十数本のつらら。大きなものは長さが一・五センチ、直径

〇・五センチにも。これは日立製作所が作った二酸化炭素(CO₂)のつららである。CO₂がある条件でつらら状に成長することは一部の科学者には知られてい

たが、これは正確に写真にとらえてみせたのは例がない。地球温暖化の原因物質としてヤリ玉に上がったCO₂。そのCO₂をどう削減するか、世界各国の政府、研究機関、科学者が知恵を絞っている。CO₂の海洋投棄も一つのアイデア。CO₂分子は深海中で水分子と合体し包接化合物(ハイドレート)となり、海底に沈んでしまう点に着目したアイデアである。CO₂のつららの表面の外殻も、この包接化合物。中に液体

状のCO₂が詰まっている。いわばCO₂の缶詰である。仮に巨大なCO₂のつららができるとすると、それを海洋投棄して深海の奥深く閉じ込め、地球温暖化問題が解決できるかも知れない。

包接化合物使う「缶詰」 地球温暖化の抑止技術に



工学的な観点で眺めると、CO₂全部を包接化合物にするより、表面だけが包接化合物のCO₂のつららの方が作成は簡単だ。ただし、どうやって中に入ったCO₂が外に漏れ出ないようにするか、難問もある。CO₂削減技術の開発は緒についたばかり。CO₂のつららは将来、地球温暖化問題の解決に貢献するだろうか。

試験管の中で作るCO₂のつらら

の研究を担当してきました。

この為、所属する学会も機械学会から化学工学会へと主旨換えしました。この学会のなかで、「バイオ分離工学プロジェクト研究会」に昭和63年から2年間委員として所属した時のエピソード。大学、メーカー各専門家の研究会での会議はほとんどチンプンカン、眠気と必死に闘い、暗くなってからの懇親会ではにわかにな元気になるのですが、学会に何しにいったかわからない始末でした。しかし、委員長の東大教授を「遊びに来て下さい」と日立に呼んだことで「出張旅費を使って遊んでると思ったが、ちゃんと成果があったナ」と部長から言われた時はさすがにホッとしたものです。当社に人材がない訳ではありませんが、偶然と云え門外漢の私が学会のバイオ専門分野の研究会委員として遊んでられたのも、日立という看板を背負っていたため、まことに幸運で、楽しい経験をしました。

現在は、地球温暖化の主因物質とされている二酸化炭素(CO₂)処理技術の研究に携わっております。写真は、海洋科学技術センタの潜水調査船「深海2000」が沖縄海域の水深1,550米の海底において、世界で初めて発見したCO₂と水との水和物(ハイドレート)を、私が実験で再現したものです。天然ものと養殖ものとの違いはありますが非常にめずらしい写真です。幸い、読売の他、日経など数社の業界新聞に掲載されました。すなわち、自然界に存在するならば、CO₂を深海に投入して固定しても構わないという考えです。しかし、この方法は国際的に賛否両論があり、先の地球環境を主題とした国際エネルギー機関京都国際会議(平成3年11月)において日本が提案し、大きな論議を呼んだと報道されています。CO₂処理技術の決め手がなく、深海に閉じ込める方法が現実味があるため、はたして実用化されるかどうかは21世紀にならないと結論が出ないかもしれません。しかし、高知県の広さと同じ大きさの南極の氷山が漂流しているのも温暖化がジワジワと進行している兆候であり、世紀末が近づいているかもしれません。だんだんホラっぽくなったところで近況報告とします。

高知工業高等学校定時制に学んで

秋津高章(昭38定電卒)

早、卒業してから30年近くになる。

今日は久しぶりに定時制時代の仲間3人と夫婦同伴での飲み会でA氏の家に集まった。「やあ、お久しぶり」と挨拶もそこそこに、さっそくにビールで、久しぶりの再会に乾杯。皆それぞれに家族の近況報告と話が進む。子供のこと、自分の職場のことなど色々と話が弾む。

話がどんどん盛り上がっているうちにいつしか定時制の話しへとうつつっていた。

勤務で学校に出席できない友達のために、代返したことや、ホームルームの時主任の先生にいろいろな歌を教わったこと。

そのとき教わった歌は今でもよく歌う。

飲めば必ずその当時の歌がでる。

ひと癖もふた癖もある我々が、他のクラスはほとんど帰り、ひっそりと静まり返った校舎の中に、我われの歌声が響いていた。

それから楽しかった修学旅行。

高知駅から宇野駅まで普通列車。宇野駅から急行瀬戸号に乗り替え富士吉田まで行き、富士吉田からバスで富士箱根巡り、東京タワー、の高さに驚き、後楽園球場の広さとナイターの光線による芝生のグリーンの美しさに感動。

猪苗代湖、金沢の兼六公園と。

列車の中では荷物を置く網棚に上がって寝る者、列車の腰掛けをはずして広い場所を造り、そこで車座になりトランプをしたこと。

話はずきない。

当時、我々は経済的に恵まれていなかった。生活は苦しかった。

た。

しかし、クラスの者は全員修学旅行に参加して、皆各々が色々なことに遭遇し、忘れ難い思い出をつくった。

私は高知工業高校定時制に入学してから、クラブ活動や生徒会など通じて、人前で話をする事ができるようになった。

それまでは、恥ずかしがりやで無口な暗い少年でした。

私は、誰に学校に行けとか、勉強しろとか云われた訳ではないが、中学校卒業して、住み込みで店員になり3年を過ぎたとき、自分はこれでいいのだろうか、高等学校は卒業しとかなければと考え、高知工業高校定時制に入学しました。それから4年間、あまり勉強したとは思わないが、無事卒業しました。

今の生活があるのは、高知工業高校定時制に学んだからだと思います。大勢の友達との遭遇、色々な先生との出会い。その人達に支えられて今日の自分があると思います。

子供も社会人となった昨今では、定時制時代の友達と夫婦同伴での飲み会が昔を懐かしみ、また少し若返って仕事の活力になります。友達は大切にしたいですね。

それは私にとって、かけがいのない宝であり財産です。

厚い壁

包 国 勝 (昭39機卒)

仰げば尊し、我が師の恩。厳肅な卒業式で母校を出、早くも28年が経ちます。様変わりした今の卒業式と比べれば時の流れを感じます。どちらがどうとは言えませんが、卒業式を迎える度に伝統の流れが薄らいでゆくようです。今年で80周年を迎える本校に配属されて18年になります。精一杯やっているつもりですが、長年勤務しているとマンネリ化し、どのような形式であろうがどうでもよいと思うことがしばしばあります。年月が厚い壁となり、打破する為の努力より楽な方向？ 換言すればゆずりあいの精神、また協調の精神から、石になり日々を流してしまうのです。

そんな中で昭和58年からラグビー部の監督を命じられ、素人監督として部員の指導にあたることになりました。ラグビー部の創設は昭和24年からで歴史は古く昭和31年・38年・39年と高知県代表校として四国大会に出場するなど、伝統のあるクラブです。

当時の部員は1年生が20人、3年生が15人ぐらいであり、3年生は県体を最後に卒業し、1年生だけのチームで自ら指導できないだけに、他チームとの練習試合を中心に共に勉強をしていきました。幸いすばらしいメンバーがそろっており、昭和59年には県代表になるだけの力ができました。昭和61年・62年・63年と連続して四国大会に望みましたが、いずれも香川県勢の厚い壁の前に全国花園大会の夢を砕かれました。年号が変わり平成元年の大会は香川・高知代表の最終年度、4年連続県代表となった高知工業は、評判の高かった香川県の坂出工業に対し

果敢な試合を挑み、前半0：0後半6：6の引き分け両校優勝となりました。抽選の結果勝利の女神は我がチームに微笑み、念願の花園への出場権を獲得することができました。

全国大会は1回戦で新潟代表の巻高校で48：7と完敗でしたが、県勢としてトライも取ることができ高知工業の名を花園の地に記すことができましたと思っています。

全国大会に出場できたこと、また出場に際しまして高知県内はもとより、大阪在住のOBの方を中心にご指導・ご協力をいただき、厚くお礼を申し上げます。また伝統の力の大きさ、有難さを楽しみ感じています。

現在は初めての年の選手であった堀内監督が今後もさらに伝統に磨きをかけるべく、日々努力しています。

先輩方が築かれた伝統の力や社会的な存在を背に、現役が時を流してしまうようでは、さらなる前進はありません。

よく高知工業高校は伝統ある県下の中心校である。・・・と言います。この意味を高知市の中心に昔からあるから。と言われられないようにするためには、また諸先輩方の築かれた良き伝統に新しいページを記すために今何をすべきか。自身のマンネリ化現象を含めおおいに反省している今日であります。諸先輩方の今後益々のご指導を宜しくお願いします。



坂本龍馬と5万円札

中 田 良 政 (昭44機卒)

さて、題名を見て、『いつ5万円が発行されたかな』と思われたCDカード派の方もいるかも知れませんが(そんな人はいないか)、2年程前から1万円札の発行比率が87%を越えており、高額紙幣の発行が検討されていると言う記事を目にした事がありますか？

その高額紙幣の肖像に我々土佐の生んだ偉人、坂本龍馬を是非載せたいとは思いませんか？

我々のグループは、名古屋を中心に、この『坂本龍馬を5万円札の肖像にする会』をやっており、この会の生い立ちと、何故坂本龍馬なのかを書かせていただきます。

全国には坂本龍馬の事を本当に大好きと言う人が沢山おり、

中には龍馬狂いと言われる人もいる位で、その一人として私の友人である須賀氏がいる。彼は自称『坂本龍馬』であって我々の会の会長を務めている。龍馬と彼の結び付きは、少し時計の針をもどさなくてはいけない。

当時のNHKの大河ドラマで『国盗り物語』が放送される事となり、司馬遼太郎氏の原作を彼に「これメチャ面白いから読んだら」と貸したのが始まりで（当時会社が終るとアパートで文学青年をしていた・・・！）

彼は司馬氏を気に入り、司馬氏の本を手当たり次第に読み、とうとう『竜馬がゆく』に到達した。それからの彼は坂本龍馬と書いてある本はほとんど手に入れ、そのうち長男が産まれると龍馬の字名である『直柔』を子供の名前に付けてしまう程です。

（これは有名な姓名判断の先生に凶と言われた。）又彼の経営するレストランのメニューに龍馬弁当が出来たり、部屋の名前を龍馬とし、その両側の部屋を薩摩、長州と付けてしまったりで、全くの龍馬狂いであります。その龍馬狂いを中心に我々のグループは、時には斉藤道三、織田信長、河井継之介、勝海舟等を酒の肴にして飲んでいた時、ふと龍馬トレーナを作ろうという事になり、有名な書道の先生に『龍馬』と背中に書いてもらい作る事になったのですが、出来て来ると胸に小さく『坂本龍馬を10万円札の肖像にする会』となっており、理由をたずねると、龍馬は日本で初めての『社長さん』であり又、維新後の新政府にとっては経済基盤の確立が第一である、と考えた経済人であり、なんとと言ってもお札には左から撮った写真が第一と言う訳で龍馬には長崎で上野彦馬が撮った有名な写真がある。

（横浜の銅像のモデルでもある）

ところが3～4年すると、10万円が5万円になっており、又理由をきくと、今の紙幣に、お札のスーパースター『聖徳太子』が居ない、これは大蔵省としては、次の高額紙幣の10万円に聖徳太子を考えていると言うのです。（この事は、東京美術書発行・植村峻氏の『紙幣肖像の歴史』の最後の今後の展望という項で、同様な意見として「いつかは太子の再登板の可能性……云々」とある。）

しかし、まだトレーナに『坂本龍馬を5万円札の肖像にする会』と書いてあるだけの時は良かったのですが、大蔵省に陳情する為に署名活動をやろうと言いだし、今までは酒の肴だけだったのに、署名の募集をするハメになり、京都で龍馬祭があると行ったり、昨年の高知での龍馬まつりの中の『龍馬シンポジウム』に参加し、当会の発表をしたりと大変な事となりましたが、しかし我々土佐の生んだ坂本龍馬がお札になると思うと嬉しくありませんか？ 又龍馬の夢であった世界を飛び回るといふのを、お札の肖像として叶えてあげようではありませんか。

5万円札賛成と言う方は是非ご連絡下さい。

最後に同窓生の皆様のご発展をお祈り申し上げます。
追伸・11月10、11日に今年もシンポジウムがありました。

80周年記念誌によせて

加賀野井 卓（旧職員）

1. 浮世哲学

昔の人は「ほんに浮世はままならぬ」と、世のあじけなさを嘆いたようだが、文明開化がうたわれる時代になっても、「人生うたた不可解」と嘆息した分子もあって、藤村操のごときは、哲学を学ぶに及んで人世の矛盾を感じ、日光華厳の滝に投身自殺したことは、明治文化史の1ページを飾るに足る悲話でもあった。全くこの世は漫然と暮らせばそれですもうが、考えてみれば矛盾だらけの世ではある。私はここに世間にいわれる矛盾を思いだすままに集めてみた。

善は急げといえ、急いで事は仕損じると戒められる。道は近きにありといえ、急がば廻れという。沈黙考せよといえ、ばかの考え休むに似たりと冷笑され、ばかにつける薬はないといえ、ばかとはさみは使いようで切れるという。亀の甲より年の功といえ、キリンも老いては驚馬にひとしいとやられる。一石二鳥をねらえといえ、二兎を追うものは一兎を得ずと戒められ、不言実行は尊しといえ、言行一致でなければならぬという。名を重んぜよといえ、名より実をとれという。

金銭のドレイとなるなといえ、人間万事金の世の中とやり返され、正直の頭に神宿るといえ、ウソも方便といえウソの効用を並べたてる。休まずに働けといえ、運と果報は寝て待てという。大男総身に知恵は廻りかねと冷やかせば、小男みんな知恵でも知れたものとやり返す。

強く生きよといえ、柔よく剛を制すといえ。強い者として恐れるなといえ、長い者には巻かれろといえ、死を恐れるなといえ、命あっての物種といえ。無念無想といえ、頭を働かせといえ、血は水よりも濃しといえ、遠い親戚より近くの他人といえ。望みは大きく持てといえ、手の届かないものは取ろうとするなと戒められる。

必勝を期して戦えといえ、勝敗にこだわるなといえ。昔は不義密通として罪悪視された相思相愛は、今は恋愛は神聖なりとし男女は人前公然と愛をささやく世となった。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれといえ、君子危ふきに近よらずと返され、押しの一手といえ、退くもまた術なりといえ、ワキ見せずによれといえ、八方に気をくばれといえ。

（この頃はこれでない交通事故の心配がある。）足元を見て歩けという人があれば、流行歌手の坂本九は上を向いて歩こうと唄う。

（足元も危ないが近頃はビルの上から何が降ってくるかわからないから、これも理屈である。）

次にわれわれの日常生活で陥り易いものも考えられる。

自信が過剰すれば自惚独善となり、武勇が暴力に、隠忍が卑

屈に、儉約が吝嗇に、謙虚が内気に、従順が追従に、信念が頑固に、親切がお節介に、妥協が盲従に、寛大が放漫となり、自由が放埒にとまざらわしいことは混然雑然として複雑多岐にわたっていて、前述の金言や警句逆説にもまた真理があって、いずれが是、いずれが非といちがいに断定し難いことに遭遇することが多いのである。

しかしわれわれは目前に現われる事柄に対して、これを処理し、かつ将来に向けて方針をたてねばならないのである。それにはわれわれは物事について、何が正しいのかを判断する能力を養わねばならないのである。

善とは何かといえば結論として天地自然の大道であるという。しからば何が大道であるか、具体的につかむことはできない。具体的なものはつかむことができないが、悟り得たものは物事に当って判断を誤らざるよう、自分自身の教養を高めるより外ないということであった。

爾来私は一貫して剣道の修行と併行して心の修養に心がけているが、正しい審判をするには剣道そのものの高度の技術が必要であることと、その理念の同一であることを知ったのである。

柔らかいつもりで書き出したペンが堅くなって来たが、結局われわれは、日々大なり小なりの出来事を審判し、処理して行くのが人生であり、私はそれを浮世哲学と思っているのである。



42.3 アルバムより

2. 回 顧

高知県政史に輝く校歴80年!!80周年記念号に稿を求められてペンを執れば、万感胸底を徂徠して千想窓外の蟬時雨よりも滋し……なんとか、些か気取った文句も書きたくなる私である。

歲月流水の如しというのが、昭和14年12月に坂本土佐海先生の後任として、旅順中学校より県立高知工業に赴任して以来、星霜移って早くも茲に50年。

さて、課せられた題簽は“工業学校在職時代の思い出”だろう。

10年を一昔として、正に五昔を過ぐる回顧であってみれば、青年時代にかけて私の去りて返らぬ日の夢はなつかしく、われが吾が目にはっきりと浮かぶ。

当^{にきび}時^に面^に飽^み華^みやかな頃の学生諸君も、今は知命、六十路の年を迎え、禿頭もあれば、白髪もあり、可惜青春の希望も中道に折れ、既に此の世を去り幽明境を異にした面々も数ありと聞くが、若かりし時代の追想して、転た感慨無量なものがある。

当時校舎は北与力町にあって、南舎2階建校1棟と北舎1棟に^に鑄造工場並に電気・化学・土木・建築の教員室・実習室が渡り廊下で結ばれ、中庭に池が設けられて^に緋鯉らが遊泳して、今様に言えば如何にも落ち着いた、古色蒼然たる風情があった。

今では当時の思い出のあるものは殆んど残っていないが、丸の内高校の塀にそって立っている2本のどんぐりの古木（藩政時代の桐間（後年加賀野井に改名）屋敷に在ったものとか）と、今一つは女子大正門の右手の楠の木である。当時女子大の前身である高知工業学校の西正門の所へ植えてあったもので、この2つは東西向き合って今何を物語っている事やら？

生徒定員は確か720名だったと記憶しているが、校地校舎ともに狭隘で運動会も出来ないほど、施設も充分でなければ常に窮屈な授業を余儀なくされていた。

しかし施設はともかくも、工業立国を唱える世相であり竹内綱・竹内明太郎両先生の教育方針のよろしきを得て、生徒諸君は小学校でも1、2番でなければ入学は不可能であるほどで、県下中等学校でも1、2を争う最優秀生の集合体であることを誇りとしていた。

その当時いずれの学校においても、先生には夫々見事な字名（しこ名）が付けられていた。就任の挨拶が終るや直ぐに付けられたものである。後日生徒に私のしこ名は何と付いたかと、先手を打って聞いたところ、云々々々とその数の多いこと、しかしいずれもその理由が気に喰わない故、付け直して来いと退けていたところ、後日苗字の上2文字を略して「のい」と付けられたが、後年転任した学校すべて同じく「のい」で通り、退職した今日までそれで通用している。

そのころ、剣道場として特別に在るわけでもなく、授業するのは1棟校舎の東端階下の教室を片寄せて使用したものであり、部の活動は武徳会の道場で実施、県体の4・5位を目標に日々汗を流し「しごいた」ものである。昭和16年1月の寒稽古の時のことは忘れられない。酷寒の日々、毎朝6時より7時まで道場が狭隘のため、皓々たる外燈の元、運動場で1週間実施したのである。

準備運動に掛ける号令も寒さのために凍る思い、遂には声も出なくなり早速面を着けて宮地のごりさんと共に土煙りをあげて指導に当たれば、やがて汗ばんでくる。

最終日の日曜日の朝のこととて、いつもと違って多くの先生が見えていて不思議に思ったが、左様なことは意に解せず、例

によって汗を拭き拭き宿直室に帰って来れば、呆気にとられて一瞬わが眼を疑ったのである。

“ご苦労様、お疲れさま”まではよかったが、見れば室内の皿鉢には葉らんと刺身のつまの千切り大根、芋羊かん2、3片が残るのみ、酒盃の往来は激しく高歌放吟、大ボラの吹き放つしの状態には些か恐れ入った次第である。寒稽古の最終日で日曜日の慰労会ときているから多数出席したのも道理である。宮地のゴリさんが云うに、これは毎年の行事になっているから、別に驚くにあたらんよ、とのことである。その顔ぶれをあげれば、

森本長太郎校長を筆頭に、教頭の勝誠治(土木)、森光喜(美術)、小松生幹(数学)、宮地豊喜(体育)、北村宗寿(教練)、野々村正喜(事務長)、浮田寿男(柔道)、長崎政忠(機械)、島内義明(機械)、浜田晴喜(電気)、門田清春(化学)、小松正利(電気、山田から1番列車で)各先生の顔ぶれで、いずれも一騎当千の強者揃いであるから、その連中に調子を合わすも容易ならざると判断をし、茶碗1杯を飲み干して武徳会の寒稽古の納会に走る。

武徳殿では川崎善三郎範士(75歳)、山本名置(海南)、織田守馬(城北)、田岡伝(高商)、坂本土佐海(城東)、片山敵城(聯隊)各先生にタッブリ絞られて、快い汗を流して、井酒を十二分に頂いたことは、今にして鮮明に記憶しており、懐古にふける次第である。

その当時、県体では7位か最下位を争っていたので、4、5位を目標に放課後タッブリ仕込んだものであるが、そのころの生徒には腰山静雄(県剣連副会長、8段教士、高知大名誉教授)、池川寿一郎(元県消防協会)、坂本功(坂本技研)、若松望東雄、田坂卓、岡山雅利(四国エンジニアリング)、嶋村堯、西田敏加寿(かき吉)、島田正清、吉村幸雄(テック(株))、小笠原武夫、柏井忠利(市役所)、永森友喜、その他諸々であるが、なつかしいきわみである。

当時、校長は3代目森本長太郎先生で、私は職務配置で訓育部(現生徒部)に配置されたのである。私は訓育部によく縁があると考えさせられたものである。

中学時代は高知農業に学び、雨天の日などには退屈の余りか訓育部と上級生の教室で、こっぴどく油を絞られ、時にはピンタを喰うこともあったので、大体訓育部の在り方は承知していた。生徒にとってはあまりありがたいところではなかった。

そのころの訓育部の部長はゴリさんのニックネームで呼んだ体育の宮地豊喜、ウナギさんと呼ばれた教練の北村宗寿、テングさんと親しまれた美術の森光喜、金物屋のトウヤンこと柔道の浮田寿男、ベクさんと愛された国漢の上島茂彦、トラさんと呼ばれた教練の竹内虎治の各先生に加えて、新米のノイで構成されていて、ペンを走らせれば思い出は尽きない。

昭和17年4月校地狭隘の為、北与力町より棧橋通りの広大な現住地に移転することになり、全校生徒が机、腰掛け及び備品

その他等を運搬し、舎内外の整備も終わったものの、そのころの戦況は日増しに悪化して、学徒動員などがあり、世は騒然として落着いた授業どころではなかった。

同年8月に私にも赤紙の召集令状が届き、満州は虎林の150部隊で零下30度の酷寒に2期堪えて、悪運尽きず20年4月、錦部隊が本土防衛の為、郷土部隊として春野の八田小学校に駐屯していた。同年7月4日高知空襲。8月15日の終戦を迎えて解散し、帰校してみれば、空襲の為校舎は云うに及ばず、工場・図書館・道場等々すべて灰燼と化して、工業試験場、高商、県造船葛島工場、高須小、須崎小学校と不自由な分散教育の止むを得なき事態に至り、私は長岡組合立小学校に出向を命じられたものである。

翌21年9月仮校舎が落成し、全校生徒が収容されて落着いた授業が開始されたのである。

時の校長は森本長太郎先生で、度量寛大、温厚にしてこよなく酒を愛し、校内の和に特に重きを置いていた。入学式に「君らあ校則をよく守りよ、校規に背くと遠慮なく間引くぜよ」と訓辞せられたが、その言葉少ない中に威厳があって場内は肅然としていたことを覚えている。

何と言っても、トップバッターは「ゴリさん」こと訓育部長で体育修身の宮地豊喜先生である。その由来するところは兎もかくとして、独特な眼越しに上眼使いに見る癖があり、親しみある中に一種犯すべからざる風格を具えて居られ、生徒には怖れられていたが、生徒の訓育には最も重きを置かれたが、その反面温情味を以て臨まれた。

ある時某生徒が、その当時厳禁されていた女生徒との交際についてその禁を破り、少し度が過ぎたので、その女生徒の父が大いに怒って、相手方の本校生徒を退校処分にするように厳重に抗議して来た。受持教員は大分困ったが、ゴリさんはそれが私が解決しようと言われて、その父親を引見して、「ご意志の程は良く解りました。それでは本校生徒は退学を命じましょう。しかしお宅のお嬢さんと関係があったために退学を命ずると云うことをハッキリ掲示するが、よろしいですか。勿論お嬢さんの嫁入り傷になりますかよろしいですか。」と言うと、その父親は狼狽して、それではもう退学させないで置いて下さいと匍々の体で帰った。お蔭でその生徒は助かり、ゴリさんの恩義に感奮して学業に励み、優秀な成績を以て卒業し、某社重役とまでになった。

それにしても心を動かされたのは、ゴリさんを中心に天狗さん、うなぎさん、虎さん、べくさん、金物の父やんと、いずれもよく全校の生徒氏名とその家族構成を承知していたことである。当人を調べるに当たっても決して叱ることをせず、最初からその事柄に当ることをせず、まず両親の出身校から家族構成を聞き出し、真綿でジワリと首を締めようようにやるものだから、その効果は覷面である。私も極力生徒氏名と家族構成を覚える

ことに努めたが、生徒数の多くなった為か、記憶力の弱いのが原因か、はたまた雑用が繁忙であったが為か、極めて困難であり、以後生徒部長だった時も、すぐに問題解決の解決のために単刀直入その事に当たって来たような気がしてならない。

さて、現地の仮校舎が落成し全校生徒を収容して授業が再開されて、教員の校務分担もなされた。前記の顔ぶれに変わりなく依然として訓育部で健在であり、文化、体育部の活動も俄然旺盛になって、それぞれ顧問も決定した。私は剣道部と山岳部の顧問となり、部員を督励し汗水流して活動したものである。夏季には山岳部員と共に面河を経て、瓶ヶ森・石鎚山系・三嶺は云うに及ばず次郎笏など剣山系等々四国の名ある山々を登攀したものであるが、当時世界を挙げて混乱の巷と化し、殊に敗戦による物資の乏しいころであるから、アルコールの類など想像も出来難いだろうが、そこは何をか言わんである。背負うリュックの中には水枕があり、それに満杯2升分の密造酒の70度の焼酎が気付薬として存在していたのである。気付薬であるから部員にも飲み、空っぽになれば下山の仕組である。主なる顔ぶれは電気科の藤村薫、佐々木学、結城忠弘、原和夫、谷岡明夫、関田某（ピーコ）で、建築科の坂本聡平先生も石鎚山系に同行して、山の雰囲気堪能したものである。

その石鎚山行から帰校した時、はからずも全国高校野球の甲子園行きの問題が起きて校内が騒然としていたのである。夏季休暇中で全生徒に与える衝撃が少なかったのが幸いであったが、折角汗と泥にまみれて獲得した高校野球県予選での準優勝、甲子園行き南四国大会出場権を獲得したものの、その切符の雲行きが怪しくなり、外部の人もはいろいろ不穏な状態にあった。正投手の森実啓祐氏（現南国市教育委員会
教育長）が如何なる理由か、黙して語らず、未だにその理由が判然として承知していないが、俄かに偽急性盲腸炎に仕立てられ、遂には出場を断念せざるを得なかったことがある。世間では当時の工業同窓会長橋本亀郎氏云々の風聞もあったが、前田祐吉投手を擁する城東中学が代表として甲子園に出場したのである。

甲子園といえば、この問題の年を経ずして間もなく、高知商業が県予選で優勝し、その出場権を得たことがある。選手連中も浮き足立っていたのか、ある日放課になって選手たちが、高岡行きのバス中で、帰校同車の本校生徒が何等理由もなく、因縁をつけられて殴打暴行を受けた問題が起きたのである。調査の結果、本校の生徒には何等の非もないことが判明し、早速高商に訪ねてその説明と善処方を校長と共に松田監督に伝え、事態の容易ならざることを見守ったのである。

このことが高紙上に大々的に記事になるかと思えば、左に非ず。これを揉み消すべく松田監督はじめ運動部の関係者が私宅を訪ね来り、事は穏便にと依頼の挨拶があったが、事が事だけに、容易ならざることと用捨せず追い返したものである。学校野球協会会長である土佐校の曾我部校長から、事は穏便にと

丁寧な挨拶が学校に寄せられたが、断固としてこれを断った。結局その年高商の甲子園出場の夢は、はかなく泡と消えたが、そのころ当分の間、警戒して桜杖を手によくやら、日本刀を枕元に置くやらしたことであるが、今にして思えば、さすがに思い切り活動の出来たのも若さの然らしむ所以かと微笑するものである。

昭和24年1月、第2棟2階建校舎が完成する時を同じくして、県下高校再編成により、高知工業高等学校となり、4月には第4代森岡貞篤校長がその任に当られた。

高校再編成により24年4月、丸の内高校に転勤、男女共学はよいとして、女生徒を相手に受け持ったことは初めてであり、一寸抵抗を感じたが、まずは何事も経験と、そこは心臓、2ケ年を経て高岡高校へ再び転勤。踏んだらモーター（自転車）で成岡先生（英）と荒倉峠あるいは針木の峠を越えての茶屋でカップ2杯の油を注ぎ踏むこと2ケ年。29年4月には母校の高知農高に転任、国語を担当して生徒部長として、大ボラ吹きながら母校の教員として、また先輩であるという2面を使いわけたこともあって微笑したものである。充実した5ケ年間を母校で送り、33年4月、再度高知工業高に赴任したのである。

そのころは第1棟の本館2階建が完成しており、各科の実習工場、職員室、準備実験室、製図室、理科室、道場、講堂等々すべて完備しており、工芸科も統合して生徒数1,100人となり、それなりに普通科、各科の教員数も多かったが、懐かしい先生連の顔ぶれが揃っていたのには至極感激もし有難く思ったことである。その間、校長は4代森岡貞篤校長、5代八木生幹（旧小松）、6代戸梶徳喜校長を経て、7代が再度森岡校長であった。

33年より2ケ年工業高の定時制を担当して、フクロウ生活を余儀なくされたが、修学旅行で佐渡まで足を延ばして、おけさを踊ったことであり、なつかしい極みである。36年4月、8代戸梶校長を再度迎え、私も全日制に復帰して生徒部長として、大ボラ吹きながら、私なりに硬軟自在に生徒に当たって来たが、その間、兎角の批判する声もあったことは事実であるが、意に解せずそれなりに任を果たし得た心算である。

ホラは大きいほど面白いものである。吹くホラによって生徒を引きつけるものであることも悟っていた。学業成績などは2次のなものであって、要は裸と裸でぶっつかつてはじめて人を知り、自ら得るものであるということも知っていたし、随分と大風呂敷を広げて吹いたものである。その頃の生徒は、ホラ吹けばすぐに笑えたものだが、このごろの生徒は、2、3日経てからホラと知って笑っているような反応のにぶい者が多くなったことは事実である。

さて、そのころ酒飲みと言えば教員、交番の巡査、沖の仲仕が三羽鳥と称せられていたほどである。なるほど考えてみれば、いずれの学校においてもよく飲んだものである。私の工業校に勤務していた戦前、殊に戦後は物資の欠乏期で、闇の横行する

時代であった。うながされるままに、自分も嫌いな方ではないから、持参の手提の皮カバンには、常に水枕（鬯酒、70度の焼酎）が挿入されて運ばれたものである。再度赴任して以来、懐かしい顔ぶれも多く、若い連中も鍛えがきいたか上達が早く、いずれもこよなく酒を愛し、斗酒なお辞せずの類であり、放課には何づれかの科で内々楽しんでいたので、屢々ご相伴に与ったものである。放課を待って、日も西の端に近くなれば、俄然近所の谷岡酒店が繁昌する状態の毎日で、気心の知れた連中ばかりで愉快的日々であった。

ただ困惑したのは勤評騒動の混乱時代である。県教組の委員長や幹部連の豪の者が、異動により多数工業高に集められていた状態であり、勤評のあおりを受けて職員会議が大変であった。

議長団に大畠正賢氏（11代校長）と私が選出されたが、国旗掲揚と君ヶ代斉唱問題ではいつも喧々諤々が言いたい放題をぶつけての取扱いは、苦勞したものである。その間、10代塩田一郎校長は自若として事の是非を判断して、善処されたものである。

戦前、戦後を通じて25年間の高知工業高での教員生活は、38年間にわたる私の教員生活の中で、またとない尊い経験を得、さらには数限りない思い出と共に、最も楽しい、張り合いのある充実したものであった。歴代の校長を中心に教員の和が立派に保たれ、専門的に造詣の深い多くの先生方の意志相通じて、昔ながらの校風と伝統が守られて、巣立った卒業生も2万名の数に近く、産業界は勿論、各界にわたって幾多の人材を輩出し国家、地域社会に貢献して来たことは、学校の発展と共に誠に慶賀に堪えない次第である。私は剣の道一筋に精進すること60有余年。未だにその道を極め得ずして呻吟するも、余命ある限り老骨に鞭打って精進する所存である。幸いにしてこの道の最高の榮譽である剣道範士の称号を授与され、また叙勲の沙汰にも浴して身に余る光榮と存じおる次第である。偏に良き師、よき先輩、良き同輩のご指導ご高庇の賜と感謝申し上げる次第である。後進のためと思って剣に関する事項を執筆しながら、悠々閑々日々是好日に老妻と共に相携えて、人生の終着駅を美しく飾りたいと念じている。

黄泉の国に旅立たれた今は亡き諸先生のご冥福を心より祈るとともに、健在と思われる諸先生の益々のご健勝を祈ってやまない。

創立80周年を迎えるに当り、ますます発展することを念じ、90年の記念式典に参加できることを祈念するものである。

渡り来し朝靄ついて鴨の群

老いの日や椅子持ちすわる冬西日

割れもののごとくに提げて菊の鉢

妄言多謝

3. 回顧五昔

いずれの道においても、よく三羽鳥と称せられるものいるが、酒の道に關してもそのころ沖仕事をする仲仕、駐在所の警察官、学校の教員を称して三羽鳥といったものである。自然に身体の要求する力仕事、住民との接触融和を保つため、種々の会合その他集合する機会等々その根拠はどこにあるかは承知しないが、飲酒の機会の多いことは事実であった。

私の25年間に互る戦前戦後を通じての高知工業高校での教員生活は、よき先輩、同輩に恵まれ、旺盛な若き後輩の士に尻を叩かれて、洵に悔のない満ち足りた生活そのものであった。学校での傍ら武徳会、致道館、あるいは警察、諸学校等でたっぷり快い汗を流した挙げ句の酒であるから、その美味なることはこの上なしで、咽喉を鳴らして飲んだものである。学校では勿論、剣の道においても升升升組で鳴らした先生、先輩の大盃での仕込みであるから、今にして思えばよく飲みもしたが、飲みもしたものである。

戦前の北与力町に所在した高知工業学校時代は、校舎の狭隘だったためか、不思議と全員が揃う機会も多かったことに加えて、つとに酒を好む者とか、そうした酒席の雰囲気をごささら楽しむ者が多かったようである。酒の話をしれば酔ったようになる者もいれば、今日はお客と聞けばすぐに鼻上や額に油汗を浮かべてニヤニヤする者もあり、いかにも酔ったように赤ら顔になってくる者もあれば、額を逆撫でして目やねを出して出してうれしがる者、顔を撫でながら生唾を呑む者もいれば、踊りの師匠が扇子持参で張り切っている傍らで、水洩出してやけにうれしがる者等々種々雑多で、飲むほどに、酔うほどに法螺も大きくなり、俺が天下のように喧々諤々の果てには、家路の方向を間違えて挙げ句の果てが、火葬場の薪木の上で寝ていた者とか、葛島までの電車を間違えて終電車で伊野まで行った豪傑もおれば、梯子酒の延長の結果が、高知橋付近の路上に寝込んで追い剥ぎに剥がれた粗忽者もいて、まことに他愛もないものであった。

現在地に校舎が移ってからは、広域のためか全員での会合の機会は容易ではないが、依然として何処かの科乃至は気の合った者が集まって細々と宴がなされていて、我輩は運よく屢々参加したものである。

戦後は酒の類などある筈もなく、鬯酒（テレン酒と称す）、鬯の6、70度の芋焼酎の横行時代であり、清酒は配給制でとても学校で飲むことなどおよびもつかぬことであった。たまたま、私の承知する者が鬯酒の密売者と悪意にしている者を知り、その縁によって運搬方を依頼したものであるが、その出入の盛んだったことから、およそ想像がつくことであろう。

私の通勤するカバンには、つねに氷枕が入れられ焼酎（6、70度）2升か、鬯酒が躍動していたのであるが、帰りにはカバ

ンも軽くなっていたことから判断しても想像がつくことであろう。多士済々の豪の者ばかりであるから無理からぬことである。

やがて現在の鉄筋校舎に移るころには、清酒は言うにおよばずビール、ウィスキーなどの片仮名も豊富に出まわり、酒宴の機会がさらに多くなってきたのである。おかげで得意先とする谷岡活水酒店は、お隣の市商の連中とともにこれを活用して大繁昌、店のおかみはモーターで日に何か配達に往復したものである。また放課すれば帰宅途中に出入りする常連客の数も、またおびただしかった。

斯くして、いずれ劣らぬ豪者揃いであるが、場所柄もあつたであろうが、高知工業には私の知る限りでは不思議と音痴に加えて、無芸の者が多かったようで、ただ大ボラを吹いてはこれを楽しみ、哄笑しては満喫していたようである。

ここに至って、一部の者と計り趣向を変えて考案したのが、大相撲の番付表に習って、全職員の酒量番付の作製に当たったが、その手段、方法が大変であった。

まず審査の要項を協議した結果、1、酒量とその飲み方。1、宴席における品位風格。1、歌・芸の有無。1、悪癖。1、酔態等に決定し、行司役として御免蒙って番付の編成に着手したのである。が、いずれも甲乙つけ難く、発表の果てには物言いのつくのは必定と覚悟をしていたのである。

人それぞれに個性を具えた持ち主であり、その行動たるや十人十色であり、ことに心を許した解放された酒場となれば、人の知らざるところが出てくるもので、その気になって静観すれば実に面白く大いに参考になったものである。

少量の酒に額と鼻頭に汗を浮かして赫ら顔になってはしゃいでいる者もあれば、大杯でガブガブやりながら大法螺を吹く者があるかと思えば、チビチビやりながら顔青さめて朝まで居座る者、沈黙思考形もあるならば、席の暖まる間もあらばこそ動き廻っている者もあれば、水洩と涎を流して泣き笑いをする傍らで、悠々自若黙して語らずひたすらに盃の上下運動に励む者もありとすれば、酒を独り嗜み含み笑いをしながら独言に夢中になっている傍らで、飲む程に酔う程に大声になり高笑放歌する者もあれば、壁に向って演説形になって気張っている者もある。飲めもせず世話ばかりしている者、大笑いする傍らで怒りだす者もあれば、早々に退散する者もある等々で種々雑多であるが、さすがに泣き漏斗は見当らなかつた。

いざ、番付を発表したところ、果たして物言いが段々と付けられたが、上の要領の次第を告げれば、文句なしに苦笑いをしながら退散したのも、今にして思えばなつかしい話題の一駒である。

歌謡、踊り等の芸の持ち主もいたが、酒席もその境に達したならばたまさかに聞く程度のもので、芸の持ち主はひときは目立ったものであつた。

その中で横綱を張った踊りでは門田豊氏、歌謡では田原敏雄、

宇賀文彦両氏に加えて校長の塩田一郎氏の品位風格は特筆すべきであろう。さすがに横綱を張るのは容易でなく、たいていが大閉止まりであつたように思う。東西の三役を張った豪の者を挙げれば、敬称を略して、

校長の戸梶徳喜、道願正信、松村源吉、辻至誠、小松義喜、北内豊司、寺尾叔己、近藤善正、村田暢生、坂本聡平、小島鉄猪なお、酒とその雰囲気存分に楽しんだのが金沢篤志、町田尚友の各位であつたろう。

斯く言う小生は酒量においては十分にその域に達してはいたが、音痴なるが故に大閉止まりであつたろう。酒席が終れば得意先の谷岡酒店で、コップ3杯で解散したのも酒の上でのなつかしい思い出である。

夢に似る遠き日の酒に纏わる思い出を書けば果てしないが、竹刀を持つべき筈の手に筆を執る種変りの私の回顧談は、何処へ脱線するか見当もつかない恐れがあるので、以上で文責の一端を塞ぐことにした。

学生諸君！月日の経過は誠に早い。人生は虚生の見し邯鄲の夢である事を思い、まだまだ先は長いなどと考えるはならない。わが道を一路邁進せられてよき人生を送られんことを念ずるものである。

似て非なるもの

森 直行(旧職員)

この回想は——今は崩壊したソビエト社会主義共和国連邦の最高軍事法廷にて無実の罪(陸軍上等兵の階級章をつけているが内実は満洲国立大学の哲学教官で陸軍の露語教育を受けた通訳資格者であるとの事由)でスパイと判決され25年の強制労働の罰をうけ、極北シベリアの各地を転々、ある時は零下60度の地に、また鉄道枕木1本は1人の墓碑と言われる労働現場等11年余を経て復員した——私が昭和37年4月から同47年4月高知工業高等専門学校教官に転出するまでの10年間(倫理、社会の教員をしていた)の思い出の一つである。

戦勝を信じあらゆる苦難に耐えて来た国民と国家も無条件降伏し、戦勝国の占領下に新しい荆棘の道がはじまったのは20年8月15日であつたと思うが、私はこの新旧体制の相克、葛藤の生きていく苦楽、生きめばならぬ苦痛も体験も知らず、ソ連軍の銃剣下にシベリアで絶えず危機的状況に翻弄されていたのであつた。これは一つの有機体の生きてゐる姿で、目に映る一切の動植物は生命の糧であり、蛙雑草は季節を告げる自然の恵みではなく、生命を支えてくれる物であり、これらの物はいかにして生命を保つかの宝物であつた。従つてこの社会には不安は無かつた。只、今、在る天地自然に無条件に順応しておるか否かが生き残る条件なのである。

秀れた知性、強靱な体力、美しい心は有害にはなるが無益の生活である。この無知、無力の弱者のみが強健に生き伸びて

いる社会であった。生き残って母国の土地を踏んだ者は例外なく——多少の差はあっても——この地球上で30数億年の間耐えに耐えて生き続けているこの生命の偉力を体認していることと思う。

こんな私が復員して目に映じたものは、窮乏と復興に耐え、働んでいる姿と、その背後にチラチラと我慢のならない上滑りが感じられたのである。

有史以来の悲惨などん底に落ちこんだ者は例外なく自分を支えてくれている生命の根源的な恵みに浴し、それなるが故に、そこから逃避するタイプであろうと奮発する型の者であろうと生きている力の偉大性は内省したこととおったが、そこには生きていくこと、生きねばならぬことに汲々としてその原動力となっている生命そのものの力を汲み上げようとはしていなかった様に見られた。非力の身の私が教育に生きる決心をした一因にもなったのである。

弓矢も標的に近づけようとすればする程手前に引き寄せ、又、己の役割を果たさんとするならば、「主山は高く、按山は低し」（碧巖録）を体認せねばならないのではなかろうか。

工業高校にも「倫理、社会」という教科が新設された時であり、いかに生くべきか、われ何を為すべきか」の倫理の根本問題に取り組む上に欠かすことのできない思索と体験のABCとして「似て非なるものの混同」をせぬ生命の英知を共に学んだことが印象的である。

それは「平和者と平和主義者」「わがまま（自由）とわがまま（勝手放題）」「生命の畏敬と生命第一主義」「個性と習癖」「優等生と優位性」「細心と小心」「心配と決意」「共感と同情」等々混同せぬ身体知である。これを探ると興味深いものがあるが、今は追想に留めるが、この10年間の教え子が、いつか、どこかで何かの事柄で似て非なるものを混同しない体験と思索をしてくれたとしたら、正に孟子の言う三楽の一つを私も亦得たことになる。

現代の様にビッグサイエンスの時代、ハイテク社会になった今では、更に自分を見つける知恵が加わらねばならないが、これは現在の先生と生徒諸君が解明して、80周年を契機に更に充実と躍進をもっていってくれることと感じて祝意に代える。

高知工業剣道部の思い出

門 田 豊（旧職員、剣道部顧問）

私は、1968年（昭43）から1982年（昭57）の退職までの14年間高知工業でお世話様になりました。その中で「剣道部」の思い出は印象深く残っています。

着任当時は、プールの東側にあった古い教室で稽古をしましたが、窓ガラスも割れ、部室も可成り荒れていました。次に電気科実習室の移転跡を修理して使用することになりましたが、雨漏りがして大変苦勞をしました。しかし、その中で大西隆君

（現・建設省高松出張所）が、インターハイ出場を果たしました。

1973年（昭48）漸く現在の格技場が完成し、剣友会から立派な太鼓の寄贈を受け、志気大いにあがり、充実した稽古が出来るようになりました。そして、その年四国大会団体第3位の成績を収めることが出来ました。

また、剣友会（会長、腰山静雄、事務局長、竹内福志）には、多大のご支援を戴きました。改めて感謝を申し上げます。

いまここに、思い出の記録として、1980年（昭55）5月発行の「剣友会だより」に掲載された一節をご紹介致したいと思えます。

「総体めざして」

去る4月27日第32回高知市体育祭剣道大会で、土佐高を5対0と全勝で破り、その勢いで、総体強化指定第1シードの強豪高知高を4対1と、ワン・サイドに降して優勝しました。

続いて、5月11日第39回香南武道剣道大会で、総体強化指定第2シードの明德高を破り、再び決勝で高知高と対戦3対1と惜敗しました。

毎週木曜日には、高知大剣道部と交歓試合を行い、良い経験を積んでおります。

来る5月18日には、香川県の優勝校琴平高に11名が遠征し、交歓試合を行います。

さらに、5月20日には、県立武道館で、小津高と交歓試合を予定しています。

県体まで後10日、毎日毎日を大切に猛練習そしてコンディションを整え、悔いのない試合を行い度いと思えます。そして、厚い壁を破り今年こそ、来る8月2、3、4日高知で開催される全国高校総体剣道大会に出場したいものであります。

また四国高校剣道大会も、来る6月14、15日高知で開催されますが、かつて、先輩が築いた四国団体第3位の実績に挑戦したいと張り切っています。

“面ごしにまなざし光る生徒らの体当たり受く総体近し”

（5月13日記）

なお思い出として残る九州遠征（於・九州学院高校）早朝稽古、県立武道館借り切り練習、学芸高（当時故川添哲夫顧問）など他校との交歓試合の数々が、いまなお鮮烈に焼きついています。

共に汗を流した卒業生の中で、現在県下の教育現場において活躍している諸君を紹介致したいと思えます。

岡豊高校・中野邦彦君（錬士7段）、城西中学校・松井良一君（錬士6段）、香長中学校・大井隆明君（6段）、伊野中学校・依光良祐君（5段）、母校高知工業・岡本康生君（5段）、学芸高校・田村秀司君（5段）であります。

特筆すべきは、第27回西日本勤労者剣道大会（1988年於・県民体育館）において、強豪ひしめく248チームの中で、見事優勝を果たした「高知県教員B」チーム（大将・中野邦彦、中堅・松井良一、先鋒・田村秀司）は、高工業剣友会のメンバーであ

りました。

また中野邦彦君は、新設の岡豊高校において、1990年度に「赤松美保」を、インターハイさらに全日本女子剣道選手権大会に送り、本年度県体女子団体優勝を果たしました。

いま、県内外の職域・地域において高知工業剣友が活躍しておりますが、何よりも現役剣道部の飛躍を期待しております。

宿願の体育館もすでに着工されており、来年11月には落成し、その中に武道場が新設されます。

重ねて「高知工業剣道部」の奮起を念じつつ、私の思い出の記と致します。 (1991年11月記)

正 誤 表

| | 誤 | 正 |
|--------------|------------------------------|----------|
| 目 次 | (40) | (41) |
| 16ページ | 校内実行実行委員会 | 校内実行委員会 |
| 82ページ | (昭10キ卒) | (昭10機卒) |
| 122ページ | 校歌製作委員会 | 校歌作成委員会 |
| 187ページ(年表右下) | 11.24 改築期成会……を県内・国内外関係の前に入れる | |
| 279ページ(8行目) | 昭和10年には…… | 昭和7年には…… |
| 288ページ(右下写真) | (平成5年度) | (平成3年度) |

追 加

| | |
|-----------------|---|
| 98ページ(左下写真説明) | 憂国の熱情もだえがたく学半ばにして海軍 甲種飛行予科練習生として征く、松本、北 川両君の送別記念 昭18.3.20 |
| 101ページ(年表分18行に) | 高岡高等小学校 |